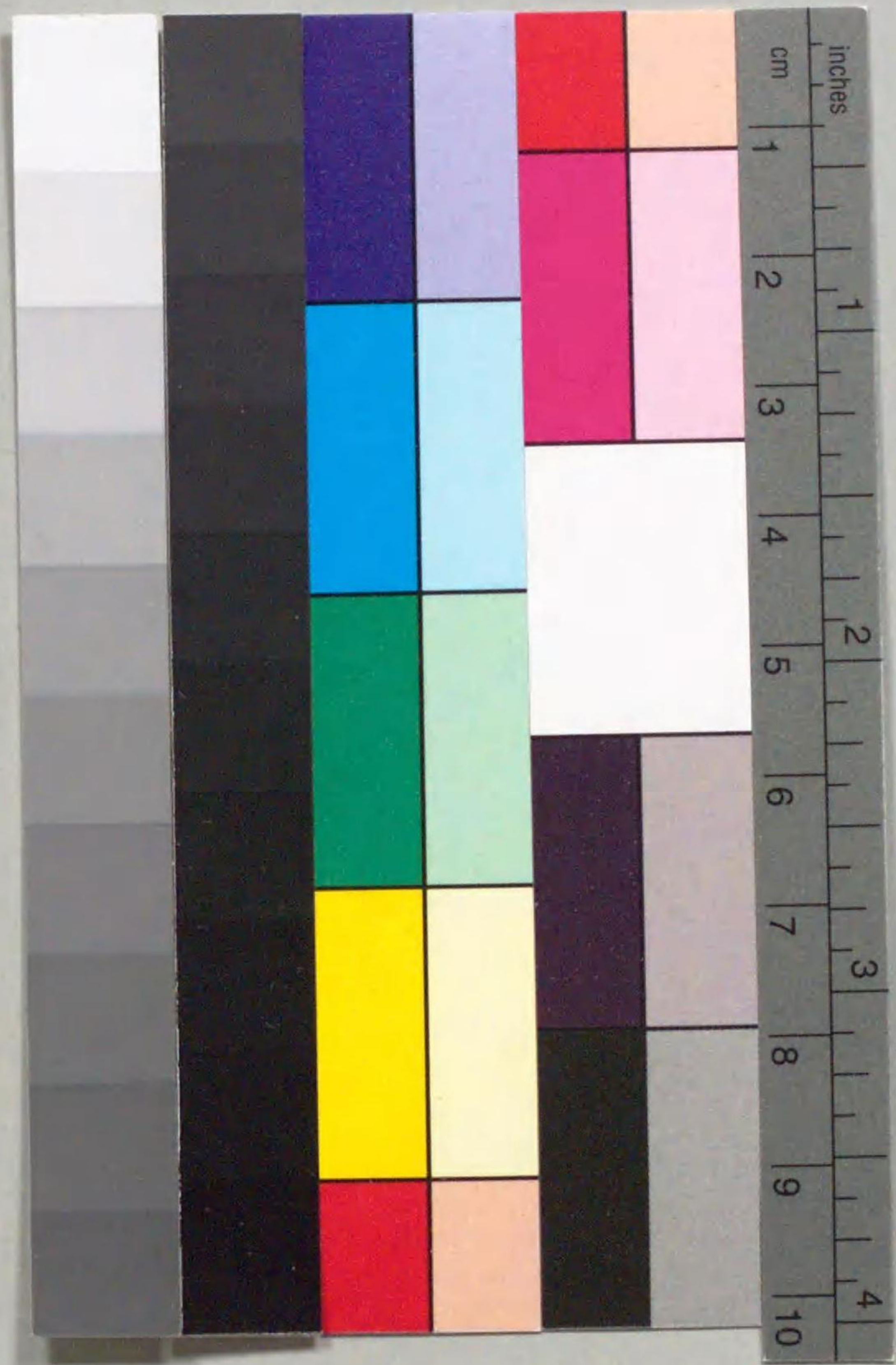


952
<del>952</del>
239









佐藤隆秀著



獅子鐵  
少年戰車兵





952

239

序

大機械化軍の驀進と大空軍の爆撃との緊密な協同戦闘こそは、實に現代戦の最大偉観であり、この勝敗はたゞちに國運の盛衰を左右するに至つた。

最近に於ける歐洲の戦線及大東亞戦争は明らかにこれを物語つてゐる。

こゝに大機甲軍の至寶たるべき少年戦車兵は大東亞戦争に於てますますその成果を發揚しその勇戦奮闘は衆人のひとしく認めるところである。

國土防衛の決意を鞏固に、義勇奉公の至誠に燃ゆる若人の少年戦車兵を志望せんとするものに對し、よく戦車部隊の内容を知り少年戦車兵の輝かしき前途を明らかにする爲に「若き鐵獅子少年戦車兵」を發刊せらる。

誠に最新好適の著書であると信ずる。日本を双肩に擔ふべき青少年諸君が、一段と發奮昂起して、献身殉國の氣魄を助長する事にもならば本書刊行の趣旨も徹



序

底される譯である。

乞はるるままに一言を序し推奨の言葉とする次第である。

昭和十七年六月一日

陸軍機甲本部長 陸軍中將 吉田 憲

### 序

今や軍の機械化は世界的趨勢であつて、近代戦に於て戦勝の榮冠を獲やうとする爲には、どうしても量、質共に優れた大機甲兵團をもつといふことが先決問題となつた。

然し量は國力が許しさへすれば、いくらでも製作し日進月歩する科學の粹を集めた兵器車輛を戦線に繰出すことが出来るが、一朝一夕にして出来ないのは、これを使ひこなす戦闘員である。訓練の精否は戦闘の勝敗の分れる最大の原因である。機械と共に生きる戦車部隊にあつては青少年時代より徹底せる訓練がなされてはじめて人間を超越し、彈丸雨飛の中にあつても悠然と機甲部隊の威力を四海に發揮されるのである。

大東亞戦争の緒戦以來各戦線に於ける少年戦車兵出身者の活躍振りは、ひとしく全將兵の感嘆措く能はざるところであり、軍の寵兒として益々大きく育ちつつ

序



あるところである。

この少年戦車兵に憧るる青少年は日とともに激増しつつあるが、重大なる使命を双肩になひ、我こそ戦車部隊中堅幹部として雄々しく立上らうとするもの最も知りたいのは、我が機甲界の将来と少年戦車兵の使命、志願から學校生活將來の見通しを明かにしたいといふ事であろう。

本書はよく之等の要望にこたへて、機甲界の全貌を知り、少年戦車兵として志を立ててより目的達成せらるるまで懇切鄭寧に然も試験準備に對する指針等を與へられたることは誠に慈雨にあつたよろこびを感ずるであらう。

ここに第二の軍神西住戦車長を憧れる熱烈なる諸君が本書によりますますその前途に希望をもち、勉強のよき相手として來るべき難關を突破せられん事を祈る。

昭和十七年六月一日

陸軍少年戦車兵學校長 陸軍少將 玉田美郎

## はしがき

大東亞戦争開始以來刻々我々の眼前に繰り展げられたる戦果の數々は、何といふ驚くべき素晴らしさであらう。

陸に、海に、空に、展開せられたる武勳に對し諸君の胸は自ら高鳴り諸君の血潮は自ら湧きかへりそれ等先輩の神の如き偉業に對して「我等立遅れじ」の決意は勃然と湧き起つて來るであらう。

眞に肇國以來最大の國難に遭遇し國威をますく世界に輝かし全大東亞に再び平和の神を呼び歸し之等盟主國として指導すべき立場に置かれたる國民、この感激、この痛快さ、今まで誰れが味ひ得たらうか。

日本男子として生を享けこの非常時に、巡り合せたる光榮これに勝るものはあるまい。

先輩のかくれたる偉業を我等の時代の一億總力でしつかりともしりたてて行かぬ



ばならぬその責任たるや誠に重且大なるものがある。この決意こそ明日の日本を背負つて立つ尊き原動力であり日本の精華ここに生ずるのである。

然して日々の新聞、ラジオに依つて報道される輝かしく戦果と共に幾多戦場の華形を見出すであらう。

曰く戦車曰く飛行機、曰く落下傘等々、然りこれ等こそ近代戦の華形である。

難攻不落と呼號する敵の堅壘を突破蹂躪して驀進する戦車部隊!!

遠く敵の背後に機動して敵を包圍殲滅する戦車部隊!! 華形で無くして何であらう。

荒鷲の猛爆、落下傘部隊の奇襲等の偉大なる戦果を機を失せず確保し敵にとゞめをさすものは即ち戦車部隊である。

装甲板の中に鼓動する生きた魂と、赤い血潮である大和魂を持つた戦車兵その人によつて戦車ははじめてその威力を發揮するのである。この戦車兵の中で最も寵愛され寶とされてゐるものに少年戦車兵がある。

若鷲とともに今次大東亞戰場に於けるこれら若獅子の活躍は一様に國民の目をみはらしてくれた。

その後これに關するいろ／＼の本が雨上りの筈の様に出版される。

その内容たるや我々少年戦車兵の採用に直接關係してゐるものにとつては、必ずしも感心されないものが尠くない。

折角熱烈なる戦車兵志願者が志を立てて晝は産業戦士として立働いた疲れを忘れて榮冠を得んと勉強せられる諸君に對し何等か先輩とし、又國民學校卒業後よき師をもたない諸君に對し出來得る限り御面倒を見て上げたいといふ念にかられここに文憲堂の獻身的御協力により上梓する運びとなつたのである。

この著により受験者各位がよく戦車の内容、少年戦車兵の使命を認識して一人でも優秀なる西住戦車長の第二代が出られたならば筆者竝に文憲堂主の幸甚とするところである。

昭和十七年六月一日

著 者 識



若き鐵獅子 少年戰車兵 目次

口 繪

序 陸軍機甲本部長 陸軍中將 吉田 懋閣下

序 陸軍少年戰車兵學校長 陸軍少將 玉田美郎閣下

はしがき 陸軍機甲本部々員 陸軍少年戰車兵生徒試驗委員 陸軍少佐 佐藤 隆 秀

機甲團の歌

第一篇 皇軍戰車部隊奮戰記

第一章 親獅子活躍の跡をたづねて

- 一 軍神西住戰車長……………二
- 二 徐州大會戰の岩仲戰車隊……………九
- 三 大東亞戰爭の血戰記録……………一四

目 次



1 スリム戦の華〇〇猛獅子部隊……………二四

2 フイリツピン上陸戦に躍る戦車隊……………三〇

第二章 若獅子少年戦車兵初陣武勇奮戦記……………三五

一 若武者ビルマに散る……………三六

二 シンガポール攻略の華・少年戦車兵……………四二

三 燃え上る戦車より隊長を救ふ……………四四

四 笑つて死ぬるぞ、氣負ふ初陣の若獅子……………四九

戦車兵の歌……………五三

第二篇 少年戦車兵感激の手記……………五五

一 少年戦車兵の決意……………五五

二 夏季休暇……………五六

三 少年戦車兵志願の動機……………五九

四 我等は少年戦車兵……………五九

第三篇 少年戦車兵志願の手引……………六〇

第一章 陸軍少年戦車兵學校について……………七三

第二章 少年戦車兵の進路……………七九

第三章 少年戦車兵教育の目的と志願者への要望……………八六

第四章 生徒採用検査……………八九

一 採用検査……………八九

二 検査終了から著校迄……………九五

三 著校後の検査……………九六

次 第四篇 學科試験の準備に就て……………一〇〇

第一章 一般的事項……………一〇三

第二章 國語……………一〇四



第一 國語の眞髓……………一〇五

第二 読み方、綴り方、書き方……………一〇六

    ◇標準漢字表……………一〇八

第三 短文の作り方……………一一九

第四 文章の訂正……………一二〇

第三章 國史……………一二三

    第一 國史の眞髓……………一二三

    第二 失敗しやすいこと……………一二三

第四章 算數……………一二三

    第一 算數の眞髓……………一二三

    第二 失敗しやすいこと……………一二四

第五章 理科……………一二五

    第一 理科の眞髓……………一二五

第二 失敗しやすいこと……………一二五

    戦車兵の歌……………一二七

むすび……………一二六

附録 機甲軍備發達の歴史……………一二六

第一章 昔の戦車……………一二三

第二章 戦場支配者のうつりかわり(近代戦車の誕生迄)……………一二三

第三章 近代戦車の誕生……………一二六

    第一 發明家は氣狂ひなり……………一二六

    第二 魅力は惡魔の様な攀登能力……………一二九

    第三 タンクの名稱の由來……………一四一

第四章 戦車の盛衰記……………一四二

    第一 戦車の初陣……………一四二



第二 一戦車を以て三百七十名の捕虜獲得……………一四五

第三 戦車の一師團は歩兵の十師團に匹敵す……………一四五

第四 状況急變——一千輛の註文取消……………一四六

第五 イイプル第三會戰に於ける戦車の悲劇……………一四六

第六 戦車最初の大成功作戦カンブレー戦車戦……………一四九

第七 アミアン附近の會戰及其の後に於ける英軍戦車の活躍……………一五〇

第八 前歐洲大戰間に於ける佛米獨軍戦車の活躍……………一五一

第九 前歐洲大戰間に於ける各國軍自動車の活躍……………一五二

第十 獨軍敗戦の主因……………一五三

第十一 前大戰後の戦車の運命……………一五五

**第五章 戦車の種類とその用途……………一七五**

第一 重さによる分類……………一七五

第二 目的による分類……………一七六

第三 列強戦車のあらまし……………一七七

**第六章 日本の戦車……………一八九**

第一 日本戦車のはじまり……………一八九

第二 近代戦車現はれてから……………一九一

**第七章 近代戦車の戦闘法……………一九四**

**試験問題竝に模範答解**

第一回昭和十四年度試験問題同模範答解……………二〇二

第二回昭和十五年度試験問題同模範答解……………二一九

第三回昭和十六年度試験問題同模範答解……………二二七

**附表**

第一 入學志願一覽表……………二五九

第二 身體検査合否基準表……………二六一

第三 陸軍諸學校生徒年齢別胸圍體重採用最下限表……………二六七





第一篇

皇軍戦車部隊奮戦記

機甲團の歌

- 一、八紘一字の礎を  
強く大地を踏みしめて  
妖雲消えて日の丸の  
世界に建つる機甲團  
列ふ威容は鐵壁ぞ  
旗風清く天高し
- 二、山川林野を踏み破る  
敵の背後に殺到し  
殲滅成りて日の丸の  
電光石火機甲團  
奇襲急襲忽ちに  
旗風清く天高し
- 三、十字の火網や彈丸の雨  
猛る戦車は惟れ鬼神  
敵陣潰え日の丸の  
二十重の陣地貫きて  
奮進蹂躪限もなく  
旗風清く天高し
- 四、屍山血河の激戦に  
勝利の扉を打ち開き  
聲朗らかに日の丸の  
現はす雄姿機甲團  
轟き渡る萬歳の  
旗風清く天高し

目次

- 第四 志願より入校迄の主要経路一覽表 ..... 一七〇
- 第五 少年戦車兵學校教育課目並に配當時間概見表 ..... 一七一
- 第六 生徒日課時限表 ..... 一七二
- 第七 聯隊區司令部管轄表 ..... 一七四



# 第一章 親獅子活躍の跡をたづねて

## 一 軍神西住戦車長

銃砲聲の轟きの中に夜が白々と明けて来る。今日も亦大場鎮の激戦は、今や展開されんとし  
てゐる。

戦場は硝煙に咽び、雨はシト／＼と降り続く。膝を没する泥濘は魔の海のように續いてゐる。  
幾條も堀られた塹壕がウネ／＼と連つてゐるが壕内も泥沼の様だ、一寸でも頭をもたげると待  
構へた、敵の機銃弾がヒュ、ヒュ／＼と、不気味な音を殘して掠めて飛んでゆく。

不屈の我が皇軍將兵は、今や死の突撃を前にしてジツと敵陣地をうかゞつた。

敵と味方は、その烈しさに緩急はあつたが、機關銃弾、小銃弾はひどく無神経になる程、激  
しく射ち合つてゐた。

「いつ大場鎮は陥ちるだろうナ。」

と兵隊は餘りの堅固さにフドつぶやき、銃口も焼けよと射ちつゞけた。

前面の敵陣は張家樓下宅といふ小部落である。其の後方二千米に、鐵壁の如くそびゑる大場

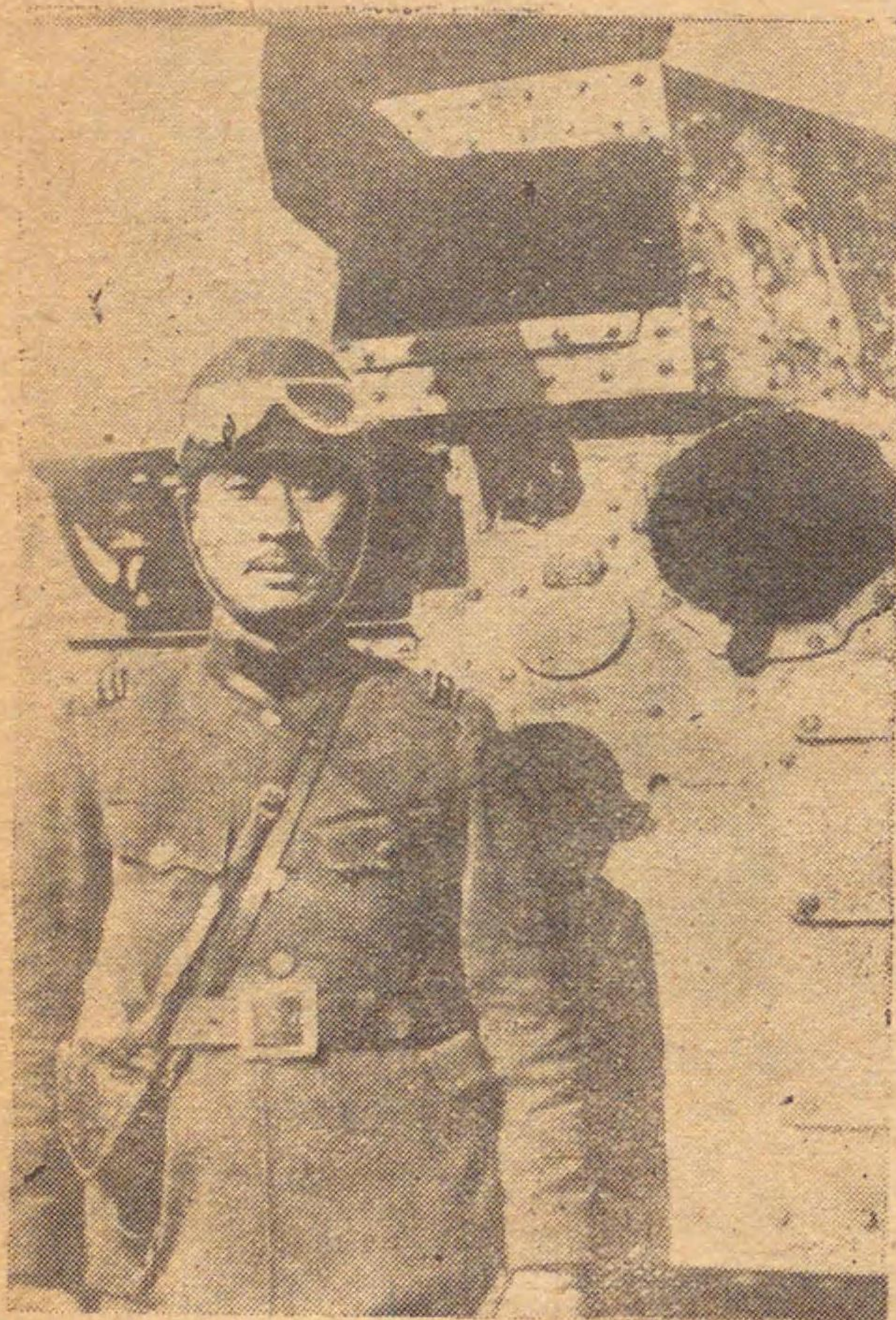
鎮要塞。

「何糞」石にかぢりつい  
てもと、兵の口許は引緊  
まる、この際、兵力の問  
題ではなかつた。(俺一人  
でも占領して見せるぞ)  
と太々しい氣魂がどの兵  
隊の中にもあつた。

然し敵も大場鎮を日本  
軍に與へる事は、江南戦

線の全面的退却を意味する。

大場鎮を失ふ事は、首都南京の衛りの喉元にヒ口を突付けられたも同然である。

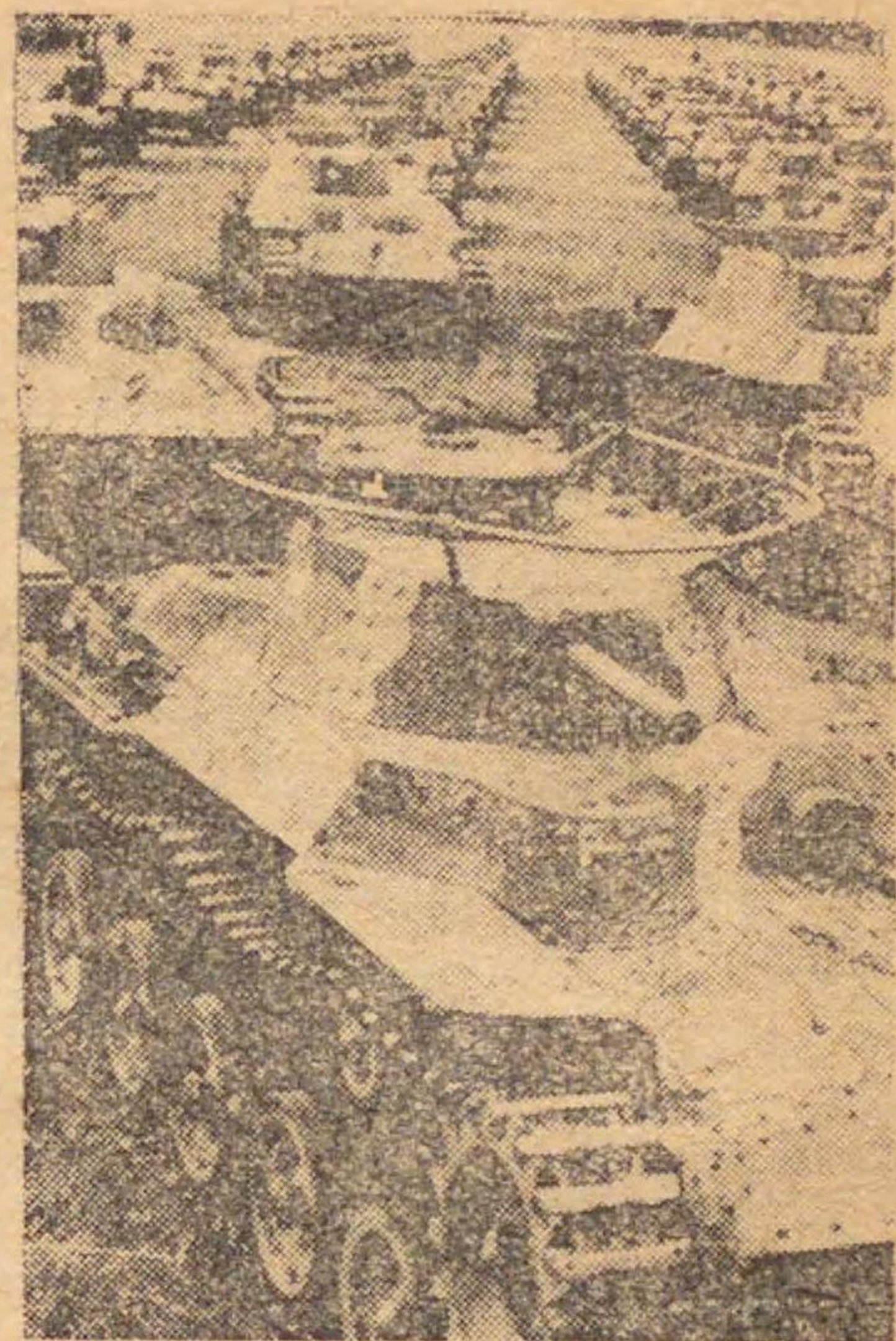


第一圖 西住戦車長の勇姿



大場鎮前面の張家樓下宅。

それは敵にとつて重要な要點の一つだつた。森林が其の部落を繞つてゐた。よく見ると蜘蛛の巣の様に敵陣地は十重、二十重に張り巡らされ總ゆる火器を勢揃して、怖るる如く、彈丸



第二圖 敵陣を襲ふ直前の陸戦の華 (陸軍省檢閲濟)

を射ちまくつてゐた。

けも死闘は繰返へされたが、しかし張家樓下宅の敵陣はビクともしなかつた。

「明日は陥ちるだらう」

「いやきつと、陥して見せるぞ」

どの兵隊も銃をギユツと握りしめ無念がると、共に、

「明日はやるぞ」と息まく歩兵たちだつた。

十月二十一日。

この日、愈々細見戦車隊が全力を擧げて協力、戦闘に参加する事になつた。

歩兵が待ちに、待つた、終に其の日がやつて來た。

ごう／＼……と頼もしき、百雷の如き音を立て、津波の様に敵陣に襲つてゆく鐵獅子。

是ぞ華の細見戦車隊の猛進撃なのだ。

西住戦車長の率ゐる戦車小隊は、張家樓下宅の西方無名部落より驀進した。

膠着<sup>かちやく</sup>してしまつてゐた、苦痛の戦場にサツと生彩がみなぎり、喜びの涙と共に、肉彈の兵達は甦<sup>よみがへ</sup>へるのだつた。

「オーイ、戦車が來たぞ、もう大丈夫だ、正に百萬の味方を得たも同然だ。」

さつそうとして立ち上つた、歩兵は勇氣百倍、朝からグングン押氣に出た味方だつた。

西住戦車小隊は、敵の射ち出す、十字砲火も何のその、クリークを渡り、堂々の日章旗をひるがへし、前進又前進。

敵陣はあわて、ためき、此の怪物に盛んに、雨あられの如く彈丸を浴せかけてくる。

だが西住戦車はゆう／＼と落着き一發も射ちださない、たゞ黙々と前進する。

さながら猛獸の王、獅子が獲物に狙ひをつけた様に。どつしりとした不敵の進撃だつた。

あちこちに、味方の元氣のいゝ歩兵が、泥と埃りにまかれて、ジツと戦車を見つめてゐた。



壕から盛んに射ちまくつてゐる兵もゐた。

味方の戦車の雄々しさに、誇りと自信に充ちた喜びに溢れた射撃を続ける。

「戦車だ！ 戦車だ！」

「しつかり頼むぞ」

と叫びあつた。戦車は（よし来たツ！）とひたむきに進んで行つた。

ぐわんぐわん。

戦車はもう砲口から火を吐いてゐる。あたかも歩兵を勇気づける様に。

地を這ふ歩兵はズリ／＼と敵陣に肉薄して行く。「やつたゾ、やつたゾ。」と嬉しい叫びが諸々にあがる。

一軒、一軒、陣地となつてゐる部落に戦車砲は適確に命中し、一弾又一弾、黒煙と共に、敵陣は崩れて行つた。

戦車の進む處、土壁はガラ／＼と崩れ、何物をも破壊して進撃する、勇壯さ。

めざす張家樓下宅の陣地が逼つた。

西住戦車隊長はふと、クリークの手前で一車を置いて援護させ、他の一車を従へて、猛然敵

中に躍り込だ。

そこには戦車壕が張り巡らされ、しかも水さへ張つてゐる。それは豫期してゐた事ではあつたが、しかし戦車にとつては甚だ厄介な代物だつた。（小癪な！）と叫んで一舉にそれをも突破しようとする、烈々たる闘志力が西住戦車隊長の胸にあつた。（何事も實行する事だ、しかもこれは可能なことだ）

「前進」

と叫び、旗記號は高らかに振られた。正に死を豫想しての大膽な突撃である。後続車も隊長車に遅れてならじと突込む。

正に敵前五十米。あわてゝ射ち巻くる、敵兵の眼の光りまで見えるではないか。

「よし、射込め。」

敵の側面に迫り、壕の上に跨つた。敵は最早施す術もなく、クモの子の様に交通壕を傳つてバラバラ／＼と逃げ始める。

待ち構へた、戦車砲は俄然砲口より、火を吐き、機關銃はバリバリ小氣味よく射巻くる。

敵は將碁の駒を倒す様に具合よく折り重つて潰れて行つた。



すぐ其の後から勇躍して味方の歩兵は逼つて来てゐた、歩兵の隊と隊との連絡は激闘の爲連絡出来なかつたのが當然の事であつた。

豆戦車が其の間、連絡の任に當つた。不死身な丈に豆戦車の連絡はもつて來いだ。

其の間、西住戦車隊はグングン／＼逃げる敵を追ひまくつてゐる。

味方歩兵も大いに志氣旺盛にて戦車に負けるな、と許り敵をケ散らし／＼陣地の後端へと突込んで行く。

突撃は終に感激の中に成功したのだ。

見よ、敵陣にひるがへる日章旗。

西住戦車隊の不屈の猛進で遂に張家樓下宅は陥落したのであつた。

赤い夕陽が戦場に赤々と輝く頃、戦車兵も歩兵も抱き合つて泣いた、泣いた。

「戦車よ、有難う」

「歩兵よ、有難う」

大場鎮は裸にされたも同然、もう時間の問題だ。

「明日は大場鎮を……………」と、將兵の決意は愈々堅い。

## 二 徐州大會戦の岩仲戦車隊

徐州、徐州と人馬は進む……………。

徐州會戦は實に東洋のタンネンベルヒ大殲滅戦であつた。

敵は精銳を誇る、李宗仁の率ゆる、四十餘萬の大軍。

我は、南下する寺内司令官の指揮する北支軍。北上するは畑司令官の率ゆる中支軍。

刻々として、全世界注視の中に戦機熟す。

徐州へ、徐州へ……………。

人の波、馬の波、見渡す限りの大麥の海原に、日章旗は北上する。

鐵の猛獅子、岩仲戦車部隊も、北へ北へと驀進する。

五月十二日朝まだき、敵要衝蒙城攻略に城内へ殺到、一番乗の戦功を樹て意氣揚々。

蒙城北部の曹市集を出發して、六十軒の悪路、泥濘を一氣に突破、所在の敵をけちらしつゝ、

僅か七時間にして、一舉に永城へ突入したのであつた。



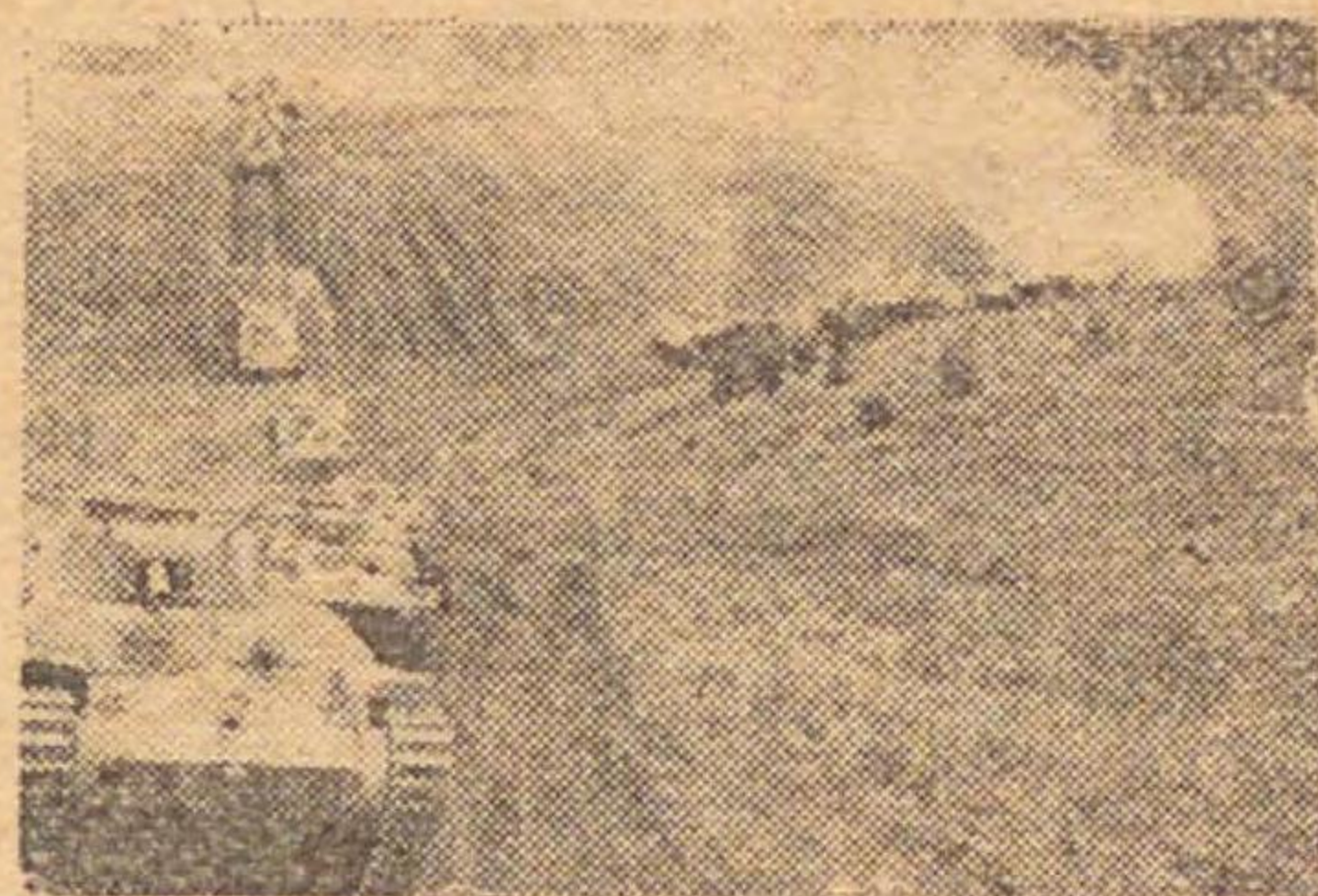
鐵獅子の子は、緑濃い枝葉で擬装されていた。  
熱風吹き捲くる大麥原を、戦車の大森林は、觸るるもの總てを踏し勇ましく進撃は續けられる。徐州へ、徐州へ、大會戦を目指して鐵の波はヒタヒタと押進む。

驀進、又、驀進。

正に敵陣永城へ逼る、敵は此の鐵の大波に肝を冷やし、早くも第九十五師の約一千の敵兵は、鐵獅子の大群に威壓されて、射撃する事も忘れ、茫然自失の態であつた。

期を失せず、飛鳥の如く飛び出して行つた、草刈工兵隊が、城門を爆破する。

待機の戦車は「ソレツ！」と許り、無限軌道の音も高らかに地ひゞき立て、殺到又殺到。



第三圖 砂塵けたてて勇躍北進中の戦車隊(陸軍省檢閲濟)

敵はまたくまに、踏みにぢられて、到る處で武装解除をされてゆく。

蚌阜から永城迄、二百餘軒の快進撃を續けて來た岩仲戦車隊の將兵一同、さいさきよしと、志氣愈々旺盛となるのであつた。

時！ 重大秘命、岩仲戦車隊に降る。

「岩仲戦車隊は、徐州の敵退路を遮断すべく、隴海線を爆破すべし」  
今や、徐州の包圍圈は刻々として狭められていつた。折角包圍した敵軍に、隴海線を断ち切らねば逃げられてしまふ。

實に隴海線の爆破こそ重大使命であるのだ。

榮えの重大任務に岩仲戦車隊の將兵の喜びは此の上もなかつた。

もとより大君に捧げたる身、生還は期し難し、然も重大任務に浴せる光榮、男子是以上の名譽なる事なし。

勇躍して、直ちに前進。

五月といふのに、もう内地の眞夏以上だ。忠誠の部下は、エンジンの音、高らかに、勇みに  
勇み、戦車隊長車に續行した。

麥畑の大海原、黒潮の如き鋼鐵の流れは續く。

永城北方四十軒の韓道口で約一千の敵と遭遇、激闘二時間、快速部隊は、けちらしけちらし、重大使命達成の爲、もはや敵など相手にせず、一路隴海線に向つたのである。



敵は到る處、銃砲火を浴せて来るが、何のそのと許り、猛驀進を夜となく晝となく続ける。十四日午後三時。

岩仲戦車隊は碍山東方五里の隴海線附近に其の勇姿を現はした。目指す汪集橋の鐵橋は長々と、其の姿を横へてゐるではないか。何といふ喜び、一同の臉に光るものがある。

噫々終に、はるばると來たものだ。

「战友、アノ鐵橋を見せたかつたぞ。」

と、胸にしつかり結んだ白木の遺骨に涙ぐんでもの言ふ兵もあつた。

然し感激にごたついてゐる時ではない、嚴然として、岩仲戦車隊長の命令は降る。

「爆破作業開始！」

勇士は戦車を先頭にヒタ／＼と橋梁に迫つて行く。

猛然として敵が射ち捲くつて來る、覺悟の決死工兵作業隊は夫々橋脚に取りつき、雨あられの如き十字砲火の中に作業は続けられて行く。

「何を小癪な。」と鐵獅子は荒れ廻る。

敵も此の橋梁を落されては、實に死命を制せられると激しく抵抗する。然し戦車の前に何物が立つ事を許され様、ふみにじり／＼敵陣はも早や、狼ばいして、散を亂して逃げて行く。

追ひかける戦車、敵の屍體は累々として積まれて行く。

敏捷な敵弾下の決死難作業。一時間。

準備は全く完了した。

隊長の「點火」の命は下された。

グワーン。グワーン。

地軸をさくかと許り思はれる大音響と共に。

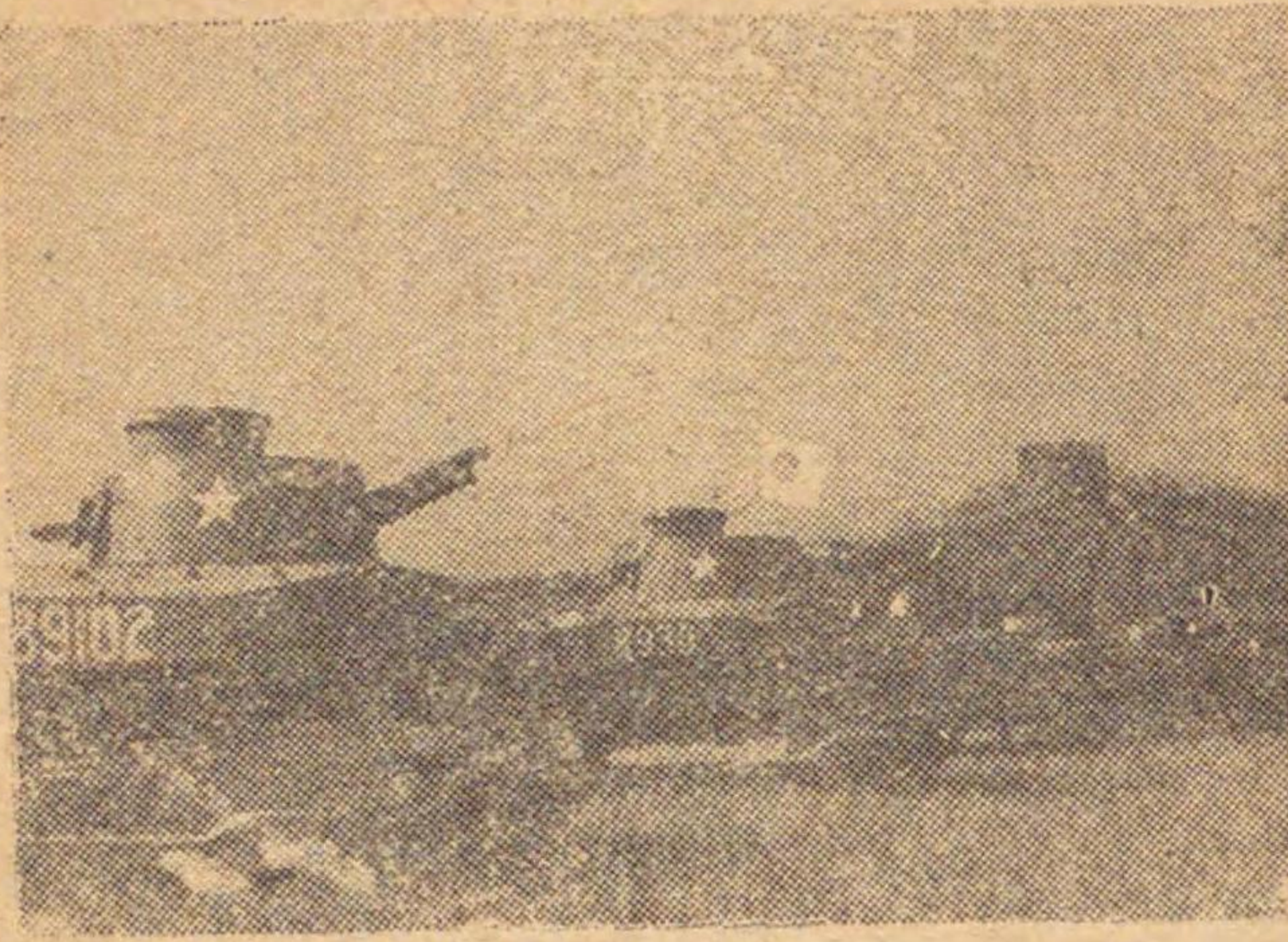
噫々、見よ、空中高く、吹飛ぶ汪集鐵橋。

時正に午後三時。

將兵は抱き合つて、感涙にむせび、萬歳を三唱する

のであつた。遂に徐州の敵は其の退路を断られたのだ。

實に徐州大會戦の勝因の一を爲したのは、岩仲戦車隊の歴史的隴海線の爆破であつたのだ。



第四圖 工兵の決死的爆破作業を援護しつつある岩仲部隊(陸軍省檢閲濟)



### 三 大東亞戦争の血戦記録

#### 一 スリム戦の華〇〇猛獅子部隊

「天皇陛下萬歳」「天皇陛下萬歳」

各所にあがる「聖壽萬歳」の聲が、津波の様に涌きあがつて来る。

敵陣カンパルを十二月二十九日以来攻撃中のマレー中央進撃隊の新春は、銃砲聲のいん／＼たる中に明ける。

「御目出度う」「お目出度う」も十字砲火の洗禮の中だ。

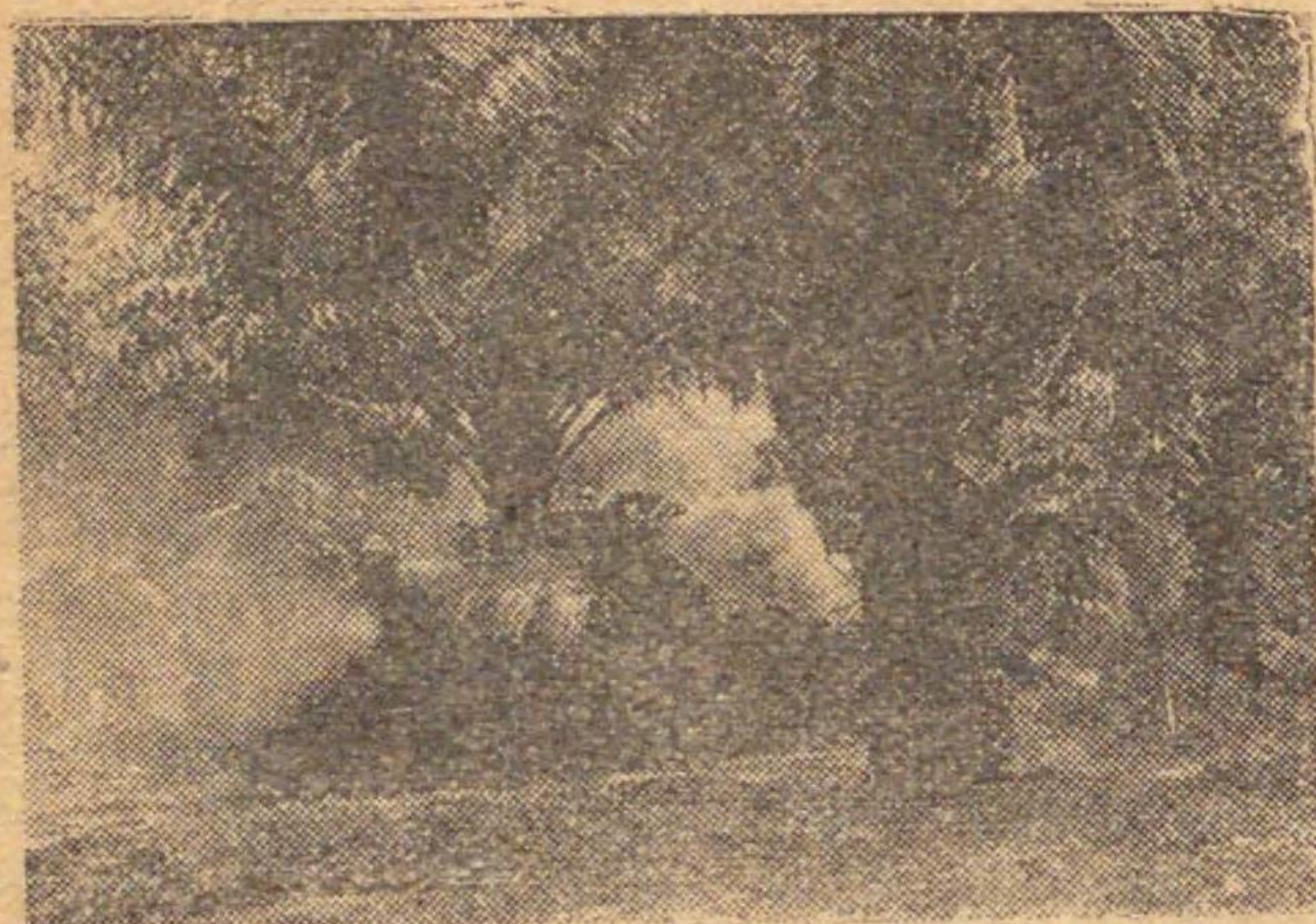
「萬歳」を絶叫して、直ちに攻撃だ。

「オーイ、景氣の好い正月だな」と兵は愈々逞しい。

さしも頑強な敵も、我が猛攻にたまりかねてか、一月三日遂に總退却を開始した。

「追撃ダ!」「追撃ダ!」一同の志氣は愈々あがる。

次に目指すは一箇師團の敵が、強固なる陣地を占領しているといふ、スリムである。



第五圖 煙幕をついて敵陣に肉迫する我が精銳戦車隊 (陸軍省檢閲濟)

「スリムへ」「スリムへ」南下する、怒濤の如き進撃。

何物をも到さずんば止まない皇軍得意の追撃である。愈々スリムの堅陣へと近付いたのだ。

先鋒部隊に挺進して敗敵を蹴散らしつゝ、勇ましくも、無限軌道の音高かに進撃するには〇〇少佐指揮の〇〇戦車隊である。

スリムの敵陣は、一箇師團の敵が守る、名にしをう堅陣である。〇〇戦車隊は、敵一箇師の眞只中に、單身敵陣地の後端迄勇壯にも突き破つて行こうとするのだ。

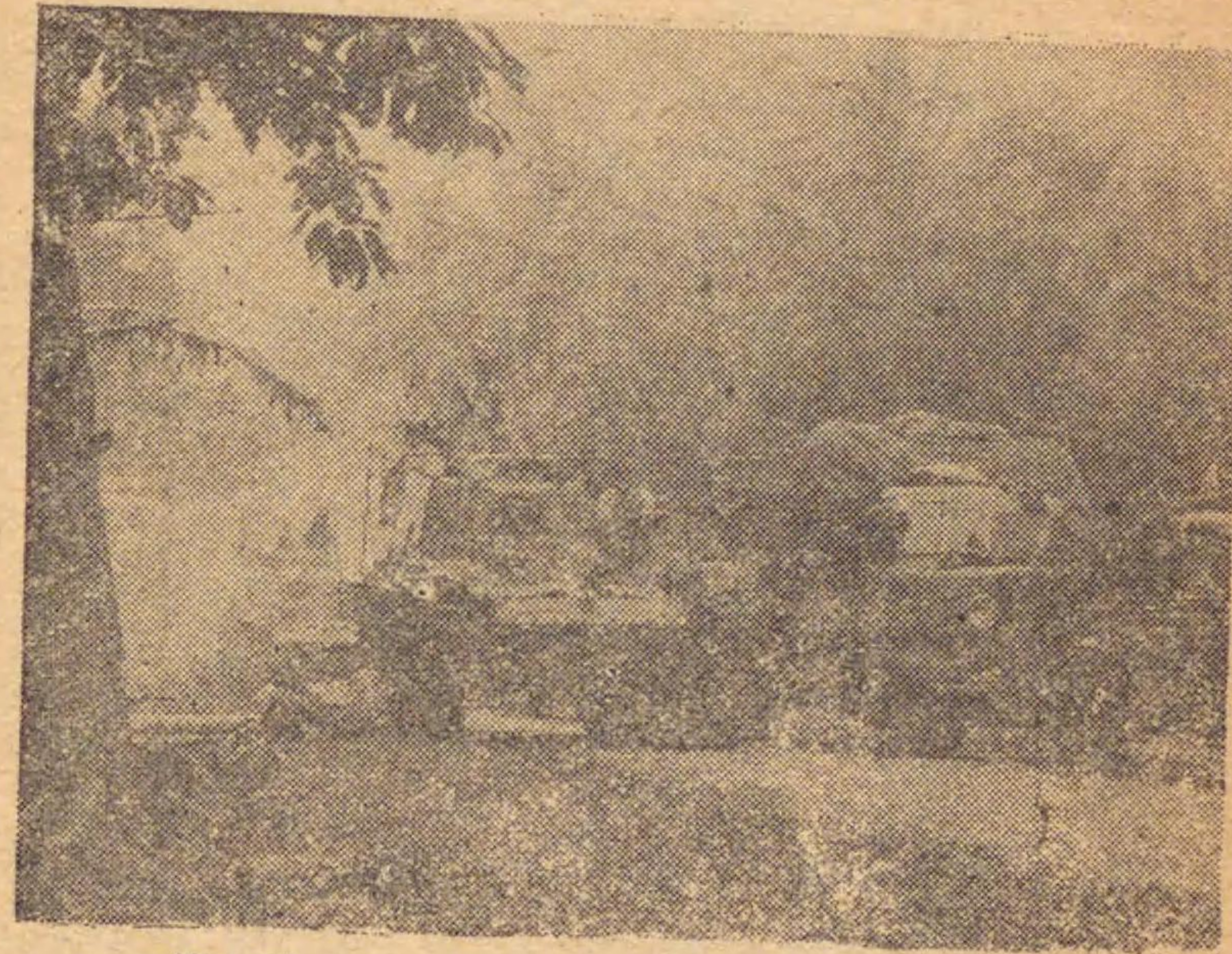
大膽と言わうか、無暴といをうか、〇〇戦車隊長の膽はカメの如しである。

不死身の猛獅子なればこそやれるのだ、と〇〇少佐の決意は堅い。

陣前三杆。猛獅子は曉の薄霧を破つて、勢揃ひをした。

「前進。」隊長車の信號旗は高らかに、打振られた。





第六圖 スリム戦線へ椰子の木蔭を猛進中の我が猛獅子部隊(陸軍省検閲済)

胴振ひをして勇む、部下戦車も、をくれてならじと、次々に爆音高らかに出發する。また、く間に味方歩兵線を超す。

「ダーン」「ダーン」正に敵前二〇〇米、俄然敵砲兵、速射砲の猛射を受く。

透かし見れば、道の兩側はウツソウたるゴム林が茂り、更に其の兩側を不氣味にジャングルが色黒く静まつている。

路は只だ一筋、是ぞ死の道、全軍にとつての活路でもある。

隊長車に連なる戦車からは、一樣に車長が掩蓋から頭を出して、隊長の氣配をうかがっている。隊長車の右手はサツと上り、前進を命じた。

この時、小隊長！ 小隊長！ と叫んで、先頭の小隊長車に、馳けつけて来た、歩兵の中尉がある。

見れば尖兵戦車隊に續行してゐた、歩兵の小隊長である。

「オーイ、二人で行かう、貴公は遮二無二突つ込んで呉れ、俺は貴公の戦車に續行するから」「ヨーン、やろう、後からついて来いよ」

こんな會話を部下同志、ニコ／＼しながら聞いて居た。

二人が親しみ深いのも小隊長同志、士官學校、同期のお互ひ二十三歳の若武者であつたのだ。烈々たる攻撃精神は充ち、歩兵隊と戦車隊の精神的結合はしつかりと結ばれた。

必勝の氣はく充ちた、戦車は愈々突進する、も早や砲塔より、必中の戦車砲は火を吐き、歩兵もをくれじと、戦車と共に攻撃前進に移つた。

彼我の銃砲聲と戦車の轟音は全陣地を覆ひ、勇壯限りない。敵對戦車砲の弾丸は不思議に命中をしない。

小隊長を先頭にした歩兵小隊もゴム林の中をチラ／＼と見えつ隠れに、戦車に負けるなと許り、くつゝいて前進して来る。



小隊長戦車がピタツと停止した。

敵の第一線陣地鐵條網にぶつかつたのだ。然し戦車の前に鐵條網は何物でもない。

「バリ、バリ」と黒き鋼鐵の一團は、踏みにじつて尙も前進は續けられる。

第一線陣地は簡単に踏破る、次々と鐵條網は破壊されて行く。

兩側よりする、猛烈な射撃をもともせず、歩兵工兵はしつかりと戦車と共に前進する。

〇〇〇隊長の先頭車、二番目の戦車から猛烈に砲口から火を吐いたと、思ふと、道路の直ぐ左側にあつた、敵のトーチカが吹飛んだ。

恐れを爲して右側のトーチカからも逃出した敵も、十米と行かない中に、次々と我が機銃の餌食となつて噎れた。

突進は續けられ、七時、道路三叉路に來ると、敵の速射砲の猛踏と共に、小癩にも敵装甲車三輛が出撃をして來た。

良き敵、御參なれと思つている間に、彼我愈々接近する。

「ダーン」先づ第一發は敵によつて切られた。

敵弾は砲塔をスレ〜にかすめて、密林内に空しく消える。

近寄る丈、近寄つて、必中の戦車砲は火を吐く。

「ダーン」

第一發、見事命中、敵の天蓋は木破みぢんに吹飛された、も早や命盡きて動こうともしな

い。  
敵の装甲車は隊長車の最後を見て、おぢけづいてか、一目散に方向をかへるや、退却をしようとする。

逃がしてなるものか、と精確な我が戦車砲は一車、二車と瞬く間に敵装甲車に命中する。

猛獅子は返り血を浴びて、愈々勇躍前進する。

前方から又何物か前進して來る、急を知つて、敵戦車群でも押寄せたかと思つて見ると、前進し來つたのは何と敵の乗用車だ。

恐らくこんな處まで、突き破つて來たとは知らぬ連絡に來た敵將校の自動車である。

「ダーン」

戦車砲が高鳴ると、敵乗用車は、みぢんに、くだけて散つてしまつた。

敵は相當、混亂を來してゐる様だ。



前方に眞白い橋梁が見えて来た。見ればまだ破壊されていない。それもその筈、橋梁の手前にある敵兵は一兵も未だ退却していないのだ。敵は我が戦車が、突然現れたので、暫し呆然として居つたが、間もなく、滅茶苦茶に打ち出して来た。

今迄橋梁を爆破された事によつて、どんなに戦車部隊は苦勞して来たか知れない。

小隊長の頭に咄嗟に、後續部隊の爲、是が非でも敵の橋梁破壊を未然に防がねばならない、といふ事が頭にピーンと来た。

橋脚には爆薬が装置してあるのが見へる。

そして後方に電線が引かれてゐる、電気爆破装置だ。

最早一瞬の猶豫もならない。

ヒラリと小隊長は戦車から飛び降りるや、敵の射ち出す、十字砲火をもとせせず、軍刀を抜き放つて、電線に向つて突進して行く。

敵は狙ひ射ちに、中尉めがけて射弾を集中する。

「小隊長殿、危い！」

部下の制止も聞かばこそ、軍刀を揮つて見事、電線を切斷した。何たる沈勇、何たる豪膽。しかも中尉は莞爾として笑つてゐる。

「前進」と全戦車は無事に橋梁を通過し終るや、猛然と敵陣に突つこんで行く。

敵は散を亂して四方、八方にくもの子を散らした様に逃げる。

機關銃が火を吐く、敵は面白い様に、バタ／＼墮れる。

味方の機關銃は一兵も逃さじと、銃口より眞紅の炎を吐いて射ちまくる。

前進——橋梁確保。前進——橋梁確保。

次々と小隊長の勇敢なる、行動は繰返された、敵中深く、橋梁に差しかゝり、小隊長は戦車より躍り出さんとするとき、敵の一弾は「ハッッ」と中尉の、手首を貫通し鮮血はサツトほとばしる。

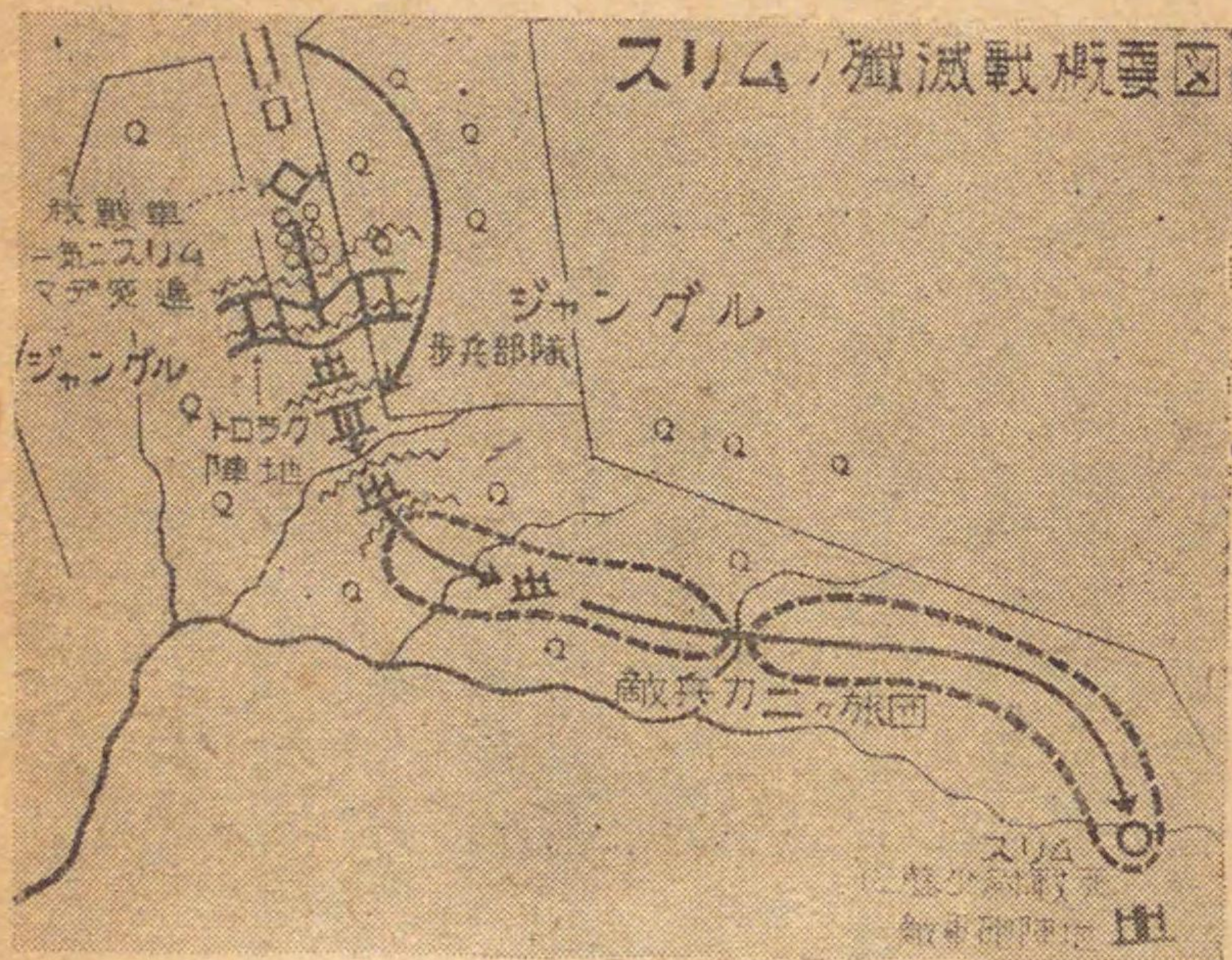
やうやく中尉は戦車より躍り出でる事は思ひ止まつた代りに、戦車の機關銃射撃によつて見事に電線は切斷された。

はるか、後方には豆を煎る様な銃聲が聞えて来る、あたかも歩兵隊の健在を示すかの様に。尙も戦車の猛進は續けられる。



出發後三時間。敵陣を抜く事七線の陣地、あたかも無人の野を行く如く敵中突破六軒。強固な鐵條網も地雷もふみにじつて、敵を撃滅する事、算を知らない。特に〇〇〇〇では、敵砲兵二十數門、自動車二百輛、戦車五十が宿營をしてゐるのを發見。機先を制せずんば危しと、不意に近寄る丈、近付くや、全戦車は一齊に火蓋を切つた。味方は十餘臺、百倍の敵に體當りをして行こうとするのだ。何といふ勇壯さだろう。不意を衝かれた敵は、手の下し様もないらしい。射撃も忘れて、バラ／＼。散を亂して密林内に逃げて行く。味方に、較べて何といふだらしなさ。兵の士氣は彌が上にもあがる。片ツ端から敵に使用されない様、兵は喜び勇んで破壊して馳り廻る。然し陣地後端迄、進出する任務の前には、長居はして居られない。「前進だ」

驀進、驀進、ぐわうぐわうたる無限軌道の音は密林中に勇ましくもどろく。愈々陣地後端も、どうやら間近に迫つた様だ。機關は累々の敵中突破に相當加熱をして來た。



第七圖 スリム殲滅戦概要図

戦車隊長車より、停止の記號が振られる。兵は、いさゝかのつかれも見せず、愛車にとりついて點檢が始められる。「全車異状なし」

戦車隊長の口許に思はず會心の微笑が上る。「愛車よ、有難う良く戦つて呉れたな、だがまだだぞ、頑張つて呉れよ」

爆音が近づいて來る。「スワ敵機？」後參なれと待構へる、上空に姿を現をはしたは、銀翼光る友軍機だ。「萬歳」兵は日章旗も千切れよと許りに打振ふ友軍機の操縦士も、片手を舉げて、「頑張れよ。戦車隊！」と勵まして呉れる。



突如「ダーン、ダーン」敵の高射砲が狙ひ射を始める。音は間近だ。

「よし、敵の高射砲陣地を踏み躪れ」

と雄叫びと共に、進撃は開始される。

間もなく敵の高射砲陣地は、木の間隠れに見えだす。先頭車は猛烈に突っ込んでゆく。頭を振り立て、何物をも倒さずんば止まぬ勢ひを以て。

敵は忽然と出現した戦車に驚きあわて、砲口を水平に直して立ち向うとしてゐる。

高射砲は零距离射撃を準備すれば、一瞬にして恐るべき、對戦車火器だ。

「南無三」危機一發、先頭戦車の火蓋は切つて落された。

命中！

空中高く、敵高射砲は吹飛ぶ。

是で友軍飛行機は安心して上空を飛ぶ事が出来るのだ。

又も果敢な前進は續けられる。

道路の曲り目、バツたり、北進中の敵重砲兵隊と出會頭に衝突した。

敵は目を丸くして驚きあわてる。戦車隊は鋼鐵に物を言はして、體當りをする。

瞬く間に敵の先頭の重砲は踏み躪られる、後に續く重砲隊は驚き恐れて、廻はれ右をして退却を始めた。

追馳けていつて、踏みにじろうとするが、如何せん破壊した、敵の重砲が道路を塞いで前進が出来ない。

排除するのに、戦車隊は貴重な時間を費し又途中、橋梁を確保しつつ、前進は續く。十一時三十五分。

突如前面より、敵砲兵の猛射を受く。

此の儘で居れば、戦車隊の全滅は免れない。切角全軍の爲に確保した橋梁も水の泡だ。

戦車隊長の面は、悲痛な影に蔽はれる。

「隊長殿、私をやらして下さい」

進み出たのは、小隊長の佐藤東一郎中尉だ。

然し戦車隊長は兩眼を閉ぢて何も言はない。

「可愛い部下を見すく殺したくない」と隊長は思ひ中々許可を下そうとはしない。

「隊長殿、佐藤がやります」



重ねての言葉に

「よし、行けつ。」

隊長の口許がやつと開いた。心の中で「死んで呉れよ」と眼頭に熱いものがこみ上げてくる。俺は良い部下をもつて幸せだ、と戦車隊長の心に言ひ知れぬ喜びが湧き上るのだつた。

佐藤中尉は部下戦車に前進準備を命じるや、隊長の許に馳け寄り、

「出發します」と隊長に申告をする。

噫々、是が生還を期さない、必死の勇士の姿か、何と立派な若武者の落着き振りだろう。

険に熱いものが込み上げるのをおぼへ乍ら、隊長は、これが今生の別れかと「氣をつけて行けよ」としつかりと堅く、其の手を握るのだつた。間もなく、全員に送られた佐藤戦車小隊は勇躍前進を開始する。

送られる者、送る者、萬感交々胸に迫る。

無限軌道の勇壯な響きも、逐次遠ざかつて行て。

やがて遠く生還を期さぬ勇士の姿も消えた。

「ダーン」「ダーン」

突如彼方より、喧しく砲聲は鳴り渡る、さぞや、佐藤中尉の戦車隊は荒れ狂ふ如く奮戦をしてゐる事だらう。

戦車隊主力も左右より猛烈な射撃を受け、敵砲弾は無氣味な音響を残して飛去つて行く。

一方敵重砲殲滅の任務を以て勇躍前進した、佐藤中尉の指揮する戦車〇臺は勇躍前進。

暫く前進すると、眼の前、自動貨車に塔乗した敵兵が北進して來ると衝突した。

佐藤中尉の先頭車は、狙ひすまずや、第一弾によつて正しく命中。

車輛が大破されると、乗員はちりちりばらばら逃げるのを、逃がさじと、機銃はパツパツと火を吐く。

尙も前進を続ける、道路の隅角を曲るや否や、眼前十五米。

敵の重砲は、砲口を我に向けてゐるではないか。佐藤中尉の戦車に乗組むは、佐藤中尉以下

東堤軍曹、飯田上等兵、長谷一等兵の四名だ。

ちうちよをしてゐる時ではない。攻撃の一途あるのみ。

突如東堤軍曹の必殺弾は切つて放たれた。

「ダーン」



のけぞる、敵の重砲、快哉を叫ぶ、いとまもなく次に。  
噫々。時次に立向かはんとする時。

途端、立て続けに敵の三弾。無念にも佐藤戦車長車を貫けり。

正に敵前三米。乗員全部愛車と運命を共にし、大東亞戦の花と散り、壯烈なる戦死を遂ぐ。全弾を受けた戦車は恰も生けるものゝ如く、無限軌道の音も高らかに、驀進を続ける。怖れをなした敵は、後も振返へらずに、退却を始めた。

後から到着した部下戦車は、

「隊長の仇だ」

と逃げる敵を一兵も残さず殲すと共に、うらみこもる、敵重砲を完全に占領した。

部下戦車のつはものは、

「隊長殿、仇は立派に取りました」と、涙にむせんだ。

正しく死せる戦車、敵砲兵〇中隊を退却せしめたのであつたのだ。

佐藤戦車は實に立派な最後を遂げてゐた。

機關銃の銃把を肩にしたまゝ、長谷一等兵が壯烈な戦死をしてゐた。銃身はひん曲つてゐる

胸には十餘の弾片が中つて、鮮血淋漓、血達磨のやうだと、いうには餘りにも神々しい。

東提軍曹は砲を抱きかゝへる様にして打伏してゐる、飯田上等兵は生ける人の様に泰然と戦車操縦桿を握りしめて座つてゐる。

佐藤中尉は軍刀の柄を握り、敵弾を睥睨したまふ最後を遂げて居り、戎衣は鮮血に染め上げられた様だ。

最後迄、守地を離れぬ、其の責任觀念の旺盛さ、火の如き攻撃精神、何といふ男らしき最後だろう。急行した戦車隊長の眼からは、涙がポト／＼とこぼれるのだつた。

「佐藤よ、良く闘つて呉れたぞ」と。

夕陽は茜色あかねに輝き西の空に沈まんとする。戦車の威力を發揮するには餘りにも視界が狭くなつて來た。

戦車隊長は部下戦車を集めて、長方形の圓陣を作り友軍を待つべく決心した。

餘りの電撃的進撃に膽を奪われたか、逆襲をして來る敵もない。

遠巻きにして怖る怖る、戦車群を目がけて、めくら撃に射弾を集中して來る。



かうして、停止して見ると、今日の奮戦の様がありありと眼に浮んで来る。それと共に明方別れた歩兵隊の來著が待たれて来る。

夜と共に銃聲は愈々近付いて來た。歩兵は夜襲に夜襲を重ねて近付きつゝある。

「歩兵よ、頑張れよ」

銃聲は間近に愈々近づいて來る。

註 ○○戰車隊は、スリムの殲滅戦に、マレー方面最高指揮官山下奉文閣下より感状を授與せられたのである。

## 二 フイリツピン上陸戦に躍る戰車隊

突如リンガエン灣に大輸送船團現る。

堂々と白波を蹴つて進撃する大船群、是ぞ本間中將、指揮のマニラ攻略の皇軍精銳部隊である。

豫定の如く上陸を終つた、第一線は當るをなぎ倒し、なぎ倒し、猛然として進撃を開始した。

○○猛獅子部隊も上陸に移つたが、其の日、天氣晴朗なれど浪高く、作業は思ふ通りに進ま

ない。逸早く上陸した、光岡戰車隊は、上陸後間もなく。

「敵戰車十五輛北進中！」

の飛行機よりの通信筒に接したのであつた。

敵は小癩にも、我が上陸地點を一舉に衝こうとして

急進している様だ。

此の儘におけば我が苦戦はまぬがれない。

一刻の猶豫はならない、本隊の上陸を待つ間に期を

失してしまふ。

然し味方は僅に三臺。數に於ては到底勝目はない。

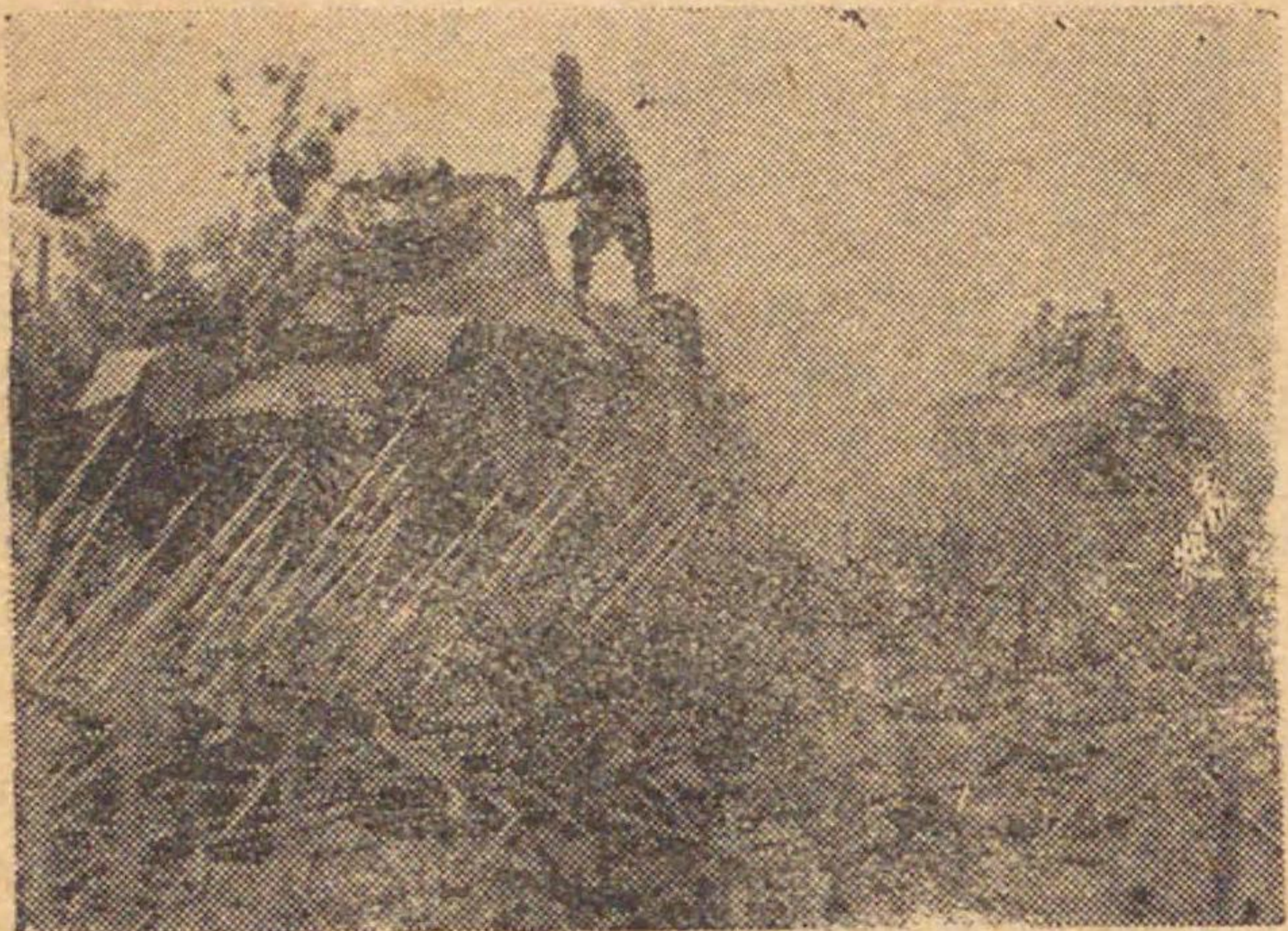
果敢にも光岡戰車隊長の信號旗は高らかに、打振ら

れた。

僅か三輛、敵戰車群に體當りをしようというのだ。

玉碎の二字に、こりかたまつた、熱鐵の一團は、日章旗をなびかせ、意氣既に敵を呑み、驀

進を續ける。



第八圖 敵の防禦網を蹂躪しつつ前進する園田部隊(陸軍省檢閲濟)



打つて出で、は味方の不利と、森林の出はずれへ來ると、ピタリと隊長車は停止をする。各車を隠して、準備を終り、猛獅子は息をひそめて敵の來るのを待つ。

この時間の何と永く思はれる事だつたらう。

「○隊長殿見えました」  
素早く發見した兵の報告に、前方を見れば、アスファルトの道路上をごろ／＼たる、響きを高鳴らせ來るは、正しく敵戦車の波。

はやり立つ、兵を押へて、光岡戦車隊長は時の至るを待つ。

頃はよし、正に敵迄の距離二百五十米。

「ダーン」「ダーン」「ダーン」

待機の我戦車は、一齊に其の砲口より、火を吐く、サント・トーマス山を間近かに望む、アスファルトの舗装道路上に、無限軌道のきしる音、飛び交ふ彼我の十字砲火、耳を聳する許りの戦闘は開始された。

勇猛果敢、隊長車は猛進撃に移つた。

敵先頭車にグ／＼遮二、無二突撃をして行く。五十米——三十米——二十米——十米——

五米。

噫々今こそ、隊長車は鋼鐵の肉弾となつて、體當りをしようとするのだ。

ガーン。

一瞬激しい大音響が起つた。蒙々たる煙は立ち上る。

勝敗は何方？

彼我兩軍共、ハツと一同眼をみはる中。

忽然と姿を現はす兩戦車。

噫々、日章旗は嚴然として立つてゐる。

「萬歳」

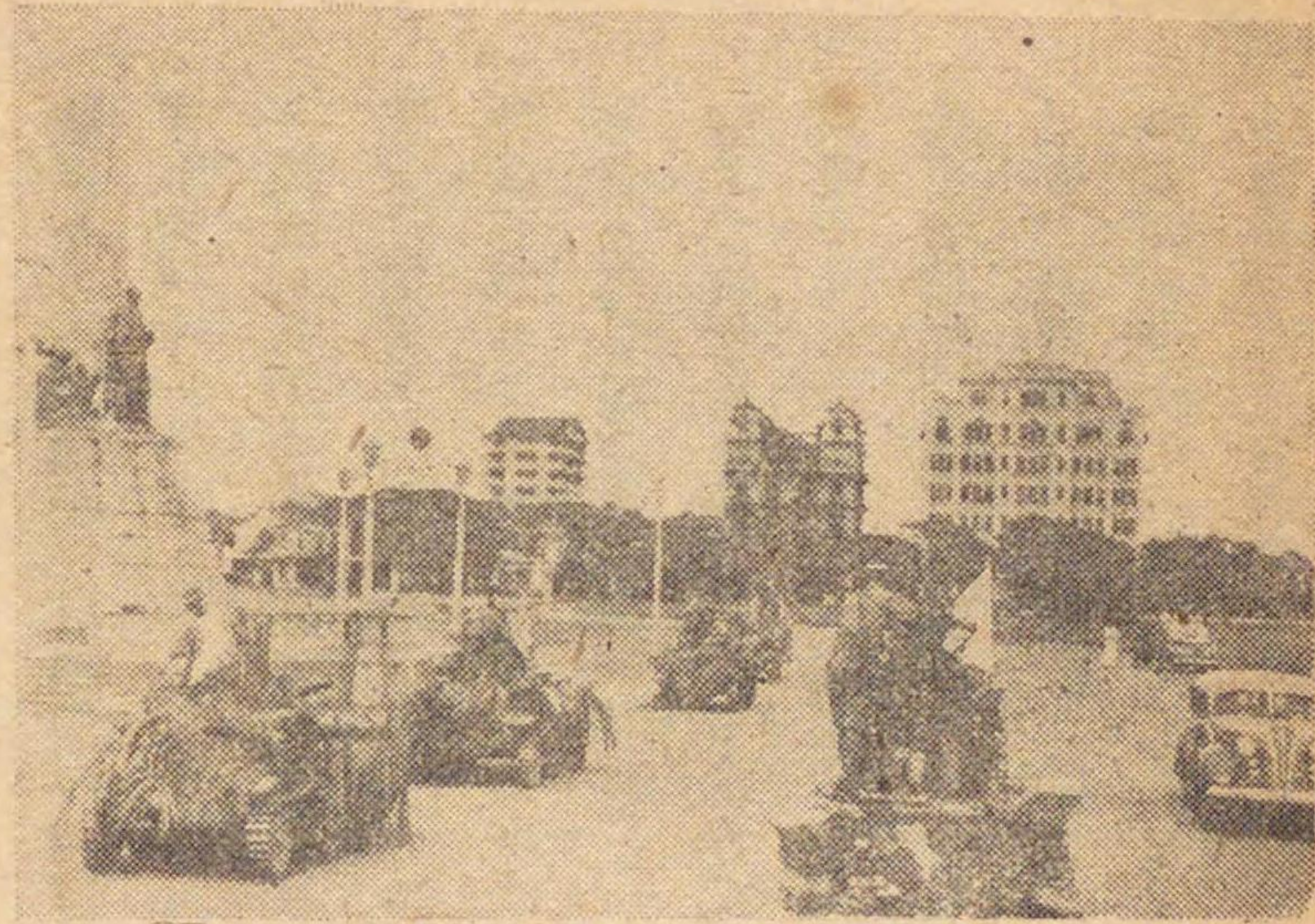
期せずして、部下戦車より勝どきは上る。

見よ。敵戦車は我が果敢な體當りの前に、無様に、あわれにも横腹を現して、路外に投げ出されているではないか。

猛獅子、光岡戦車はビクともせず、すかさず次の戦車に立向かつて戦車砲は火を吐き出す。

敵は隊長車を殲され、怖れを爲したか、反轉するや急ぎ退却を始めた。





第九圖 マニラ市ルネタ公園リサルト記念塔附近を行進する我戦車部隊(陸軍省検閲済)

「卑怯者奴」

叫んだ我戦車は、小數乍ら敵群を追馳け始めた。まるで大鯨の群が鯨に追巻くられて逃げる様だ。

逃がしてなるものか。猛烈な、愉快な追撃戦が展開される。

退却の退路を遮断せんと、戦車隊長車は火を吐き乍ら、一輛——二輛と敵を追越し始める。必中の炎がパツパツと、紅蓮の焰を吞むと、敵の戦車は次々とのげぞつて倒れる。

敵も此處を先途と、機關を全開して速る、逃げる爲に製つた戦車かと思はれる許り、逃足は馬鹿に早い。

味方は僅かに三輛。永追ひは危険、○隊長の

停止の信號は上下に振られた。

諸所に炎上する戦車。

遙か彼方に、もうくたる砂塵と共に、聞きなれた味方の無限軌道の音が近付いて来る様だ。愈々上陸を終つた、本隊戦車の進撃が開始された様だ。

斯くて上陸第一步、華々しき戦捷と共に、皇軍上陸の危機を猛獅子は救つたのだ。

敵戦車の去つた道路は坦々として、首都マニラに續く道だらう。

「オーイ、又會はうぜ」

無敵な猛獅子は、今度會つた時こそ、華々しく決戦を挑まうと叫ぶのだつた。

## 第二章 若獅子少年戦車兵初陣奮戦記

今まで滿洲事變以來我が戦車部隊の血湧き肉踊る活躍に感銘深いものがあつたが、これから昭和十五年夏卒業したばかりの僅かに十八歳乃至二十歳前後の童顔戦車兵、若獅子はいかなる



敵弾の洗禮を受けて如何なる活躍をしたか、この様な敵を恐れずたゞ大君の爲に勝つあるのみ、自分を犠牲として全軍の日章旗を進めることに唯一の誇りを感じる戦車兵は、日本の青少年諸君でなければ出来ない神わざである。

### 一 若武者ビルマに散る

ぐわうくく。

勇壯な響きは、曉の薄靄を突き破つてビルマ山岳地帯を壓して響き渡る。

ラングーンへ。ラングーンへ。

援蔣物資ルートの根據地を覆滅せんと、炎熱もものかわ、陸の精銳は眞一文字に進撃をする。

たゞ黙々として、前進又前進。

最先頭を勇ましく行くは、我等の戦車隊だ。

酷熱の太陽は、照りつける。鋼鐵は焼け、車内はさながら蒸風呂で蒸されるよりも暑い。

然し閉口たれる様な弱音をはく者もなく至極元氣だ。

快い愛車のエンジンは至極好調で、何だか睡氣さへも催しそうである。

國境突破以來、激戦は幾度か續けられ、撃破した敵の戦車は思ひ出せない程多かつた。



第十圖 雲南ルートを前進する皇軍最先鋒(陸軍省検閲済)

「ダーン」

突如、敵戦車現る。

隊長車操縦手原田伍長は思は

ず操縦桿を、シツカと握りしめ

た。

しつかりと堅く結んだ口許。

戦車帽に包まれた若武者美少年

の凛々しさ。

「やるゾ！」

不敵な笑をみさへ思はず浮ぶ。

隊長の信號一下、瞬く間に戦闘隊形は整つた。

敵との距離は刻々と狭められて行く。



一齊に我が猛獅子は火を吐いた。

「ダーン」「ダーン」

命中だ！

敵の戦車は砲塔を射抜かれて、動かなくなるもの、或ひは火を發するもの、一瞬にして、邊りは修羅場と變る。

逃ぐる者、追ふ者、追ひつ追われつ、まんじ巴の如く入亂れ激闘は續く。

中にも目立つて、鮮かなのは、原田伍長操縦の隊長車である。荒獅子の如く、當るを幸ひ、次から、次へと敵戦車を薙ぎたてる。

戦闘は終りを告げた様だ。勢揃ひをした猛獅子は各車より「異状なし」の報告は躍る。

勝つたのだ。然も全員全車異状なしとは。

勇躍して前進は息つく暇もなく續けられる。僅に〇臺、敵の大部隊を撃退した、一同の胸は高鳴り、緊張して前進は續く。二時間も前進した頃だらう。

突如、前面に砂塵蒙蒙たるを見る。敵か味方か。

正しく姿を現したは敵だ！

然も戦車の大群が、潮の如く、押寄せて來たのだ。

我の正しく數十倍。

噫々、隊長旗は振られる。「突撃」何といふ勇ましさ。

果敢にも、大敵に攻撃をしようとするのだ。

刻一刻、敵の大波は近付いて來る。

「ダ、ダーン」「ダ、ダーン」

雷鳴の如き、敵砲は一齊にうなりを生じて飛來る、必中を期する我が戦車は發砲をしようとはしない。

黙々として、肉迫は續けられる。

「ダーン」

頃は良し、必中の我が砲は先づ隊長車によつて切られた。

續く部下戦車も隊長車にならつて、砲撃を開始する。

彼我の鐵魂は、火花を散らして打合ふ。

原田伍長の操縦振りは、右に左に、あたかも飛鳥の如く、飛交ふ様はさながら神業の様だ。



激闘は暫く続く。

然し衆を恃む敵は、仲々頑強だ。

隊長車は、二臺——三臺と敵を撲滅して行く。

「ドカーン」

無念、飛來つた一弾は、噫々遂に隊長車を貫通した。

○隊長以下、壯烈勇戦奮闘、大東亞戦の華と散つた。

原田伍長は、其の一弾に貫かれ、人事不省に陥つたのである。

どの位、時間が過ぎた事だらう。意識を恢復した原田伍長は、あたりをハツと見廻した。

敵の戦車は、直ぐ間近迄、包圍して來てゐるではないか。立ち上ろうとすると、傷口より鮮

血淋漓としてしたゝる。

辛じて砲にかじりつくや、ともすると、もうろうとたる意識を振り起し、猛然として射撃を

始めた。

驚いた敵は遠卷になつたが、小敵と知つてか間もなく、又デリリデリと近づいて來る。

必死になつて射ちまくる、原田伍長の弾薬も残り少くなる。

運命決す。頼みの弾薬は終に盡きた。

既に覺悟を決した、伍長は車内の敵に渡してならぬ

重要な部分を片端から破壊。

事既に終る。

敵戦車は愈々接近して來る。此の儘にあれば捕虜と

なるより他はない。

少年戦車兵學校當時、教官の言はれた言葉が頭に浮

んでくる。

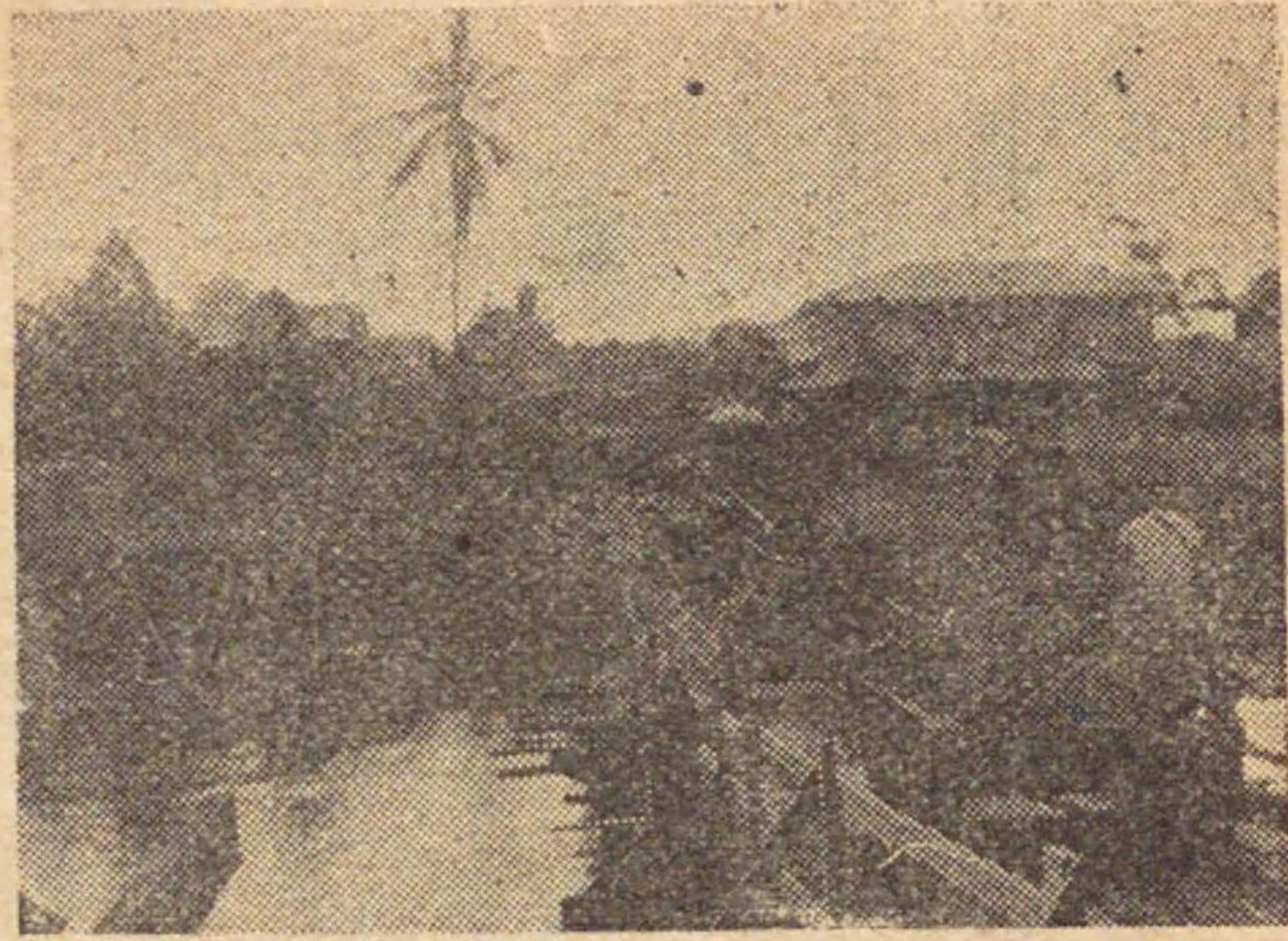
「若武者として、立派に死ぬ」

若武者は櫻花の如くに散つた。

小隊長に折り重つて、立派に、舌をかみ切つて最後を遂げたのだ。

崇高なる哉、噫々原田伍長。

誠に日本武士道の權化であり、武人の鑑みである。



第十一圖 サルウイン河を渡つて〇〇に前進する戦車隊(陸軍省検閲済)



## 二 シンガポール攻略の華、少年戦車兵

肅々として、兵は息を殺し、物音一つ立てず、暗黒の中で前進を開始した。時、二月八日。

正にシヨホール、バルを渡河、要塞シンガポールに敵前上陸を執行せんとする、歴史的な一大戦闘は開始されんとしてゐる。

敵前間近か、豆をいる様な敵銃砲聲の音響が喧しく吠え始めると間もなく、「友軍上陸成功」

の信號弾は暗黒の空に、高々と打ち上げられた。待機の戦車部隊も、それと許り、一齊に渡河を開始する。

海峡は、さながら雨あられの如き敵弾に蔽はれる。上陸艇はものともせず、まつしぐらに前進又前進の猛進撃は続けられる。対岸も間もない。

戦車は上陸を開始。

ズル〜。

不幸、戦車は濕地に入り込んで、無限軌道も空廻りをして前進をしない。

敵弾は雨あられの如く、戦車に降りかゝる。

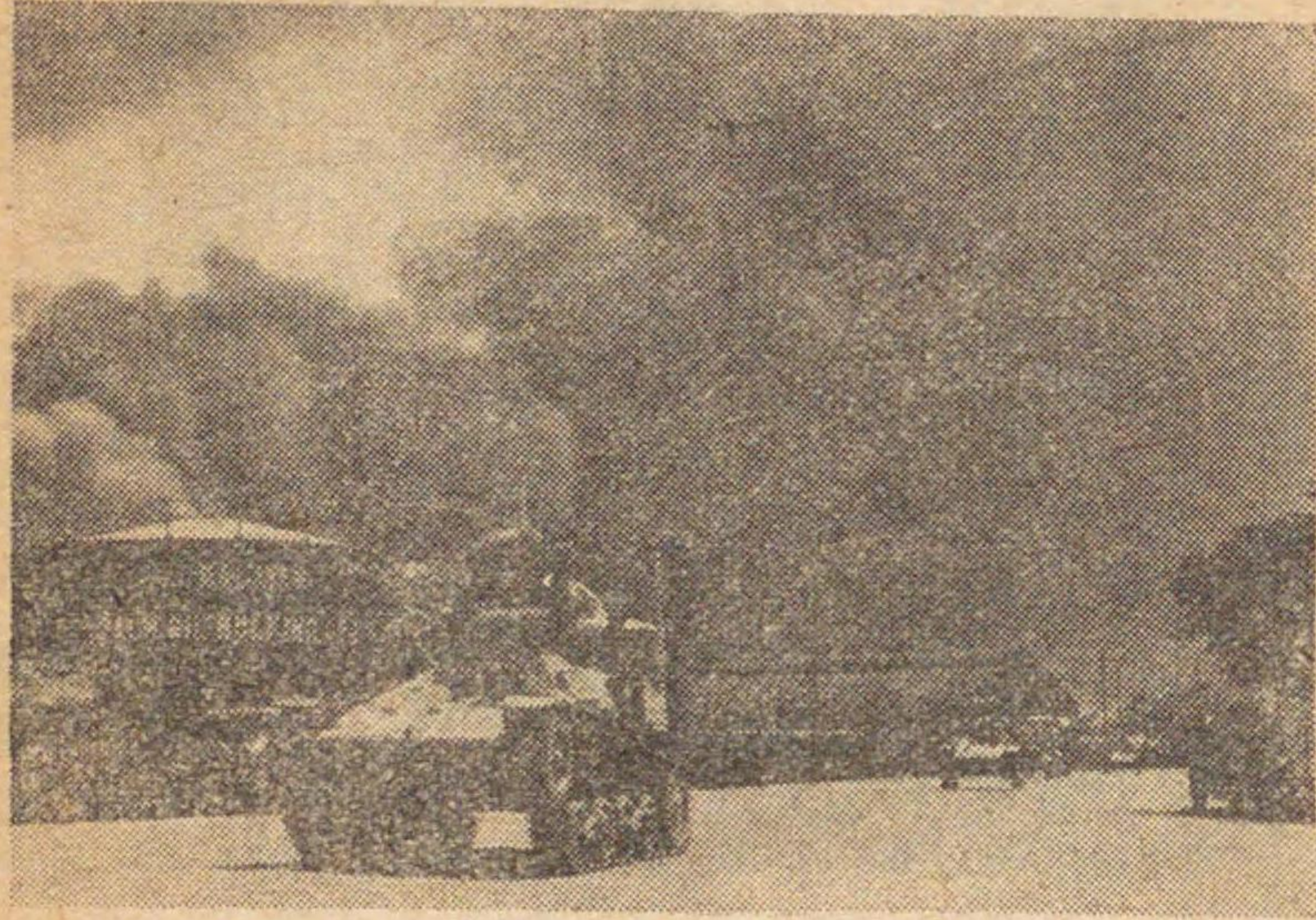
矢庭に禪一つ纏つた裸體の兵が飛出し、勇敢にも揚陸の誘導をしようとする。

「危い」「危い」

みまもる將兵、かたずをのむ中に水中に飛び込んで誘導を始めた。

濕地に入り込んだ戦車も、徐々に前進をする。

敵の射ち出す弾丸は、愈々猛烈となるが、ゆう〜として微笑さへ顔に浮べて作業をする、不敵さ。近くにあつた他部隊の將兵も餘りの大膽さに



第十二圖 皇軍戦車隊星港堂々入城(陸軍省検閲済)

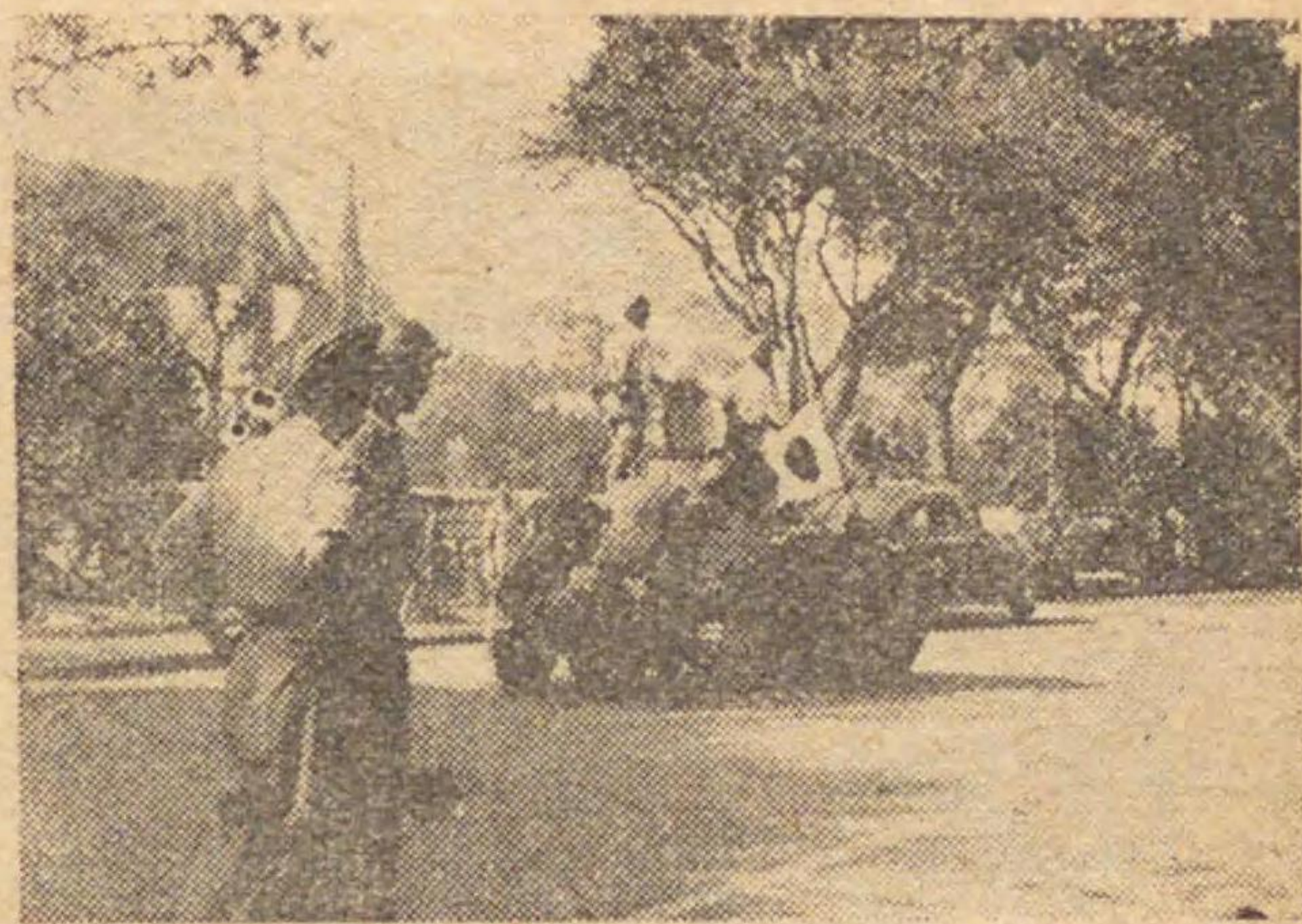




第十四圖 堂々昭南市内に入る戦車隊(陸軍省検閲済)

其の間砲弾は、愈々はげしくなる許りだ。部下は全部戦車内に退いたのを見届けた後、藤井伍長は自ら戦車内に入らんとして、片足を掛けた途端、無念飛來した敵砲弾に、藤井伍長は壯烈護國の鬼と散つたのである。

年少に似ぬ其の沈勇大膽不敵さ。



第十三圖 堂々星港市内に入る戦車隊(陸軍省検閲済)

是ぞ、少年戦車兵學校を巢立つて、間もない。○期生藤井伍長の勇壯な姿だつた。マレー進撃以來、特にアロスター附近の戦闘では勇猛をうたはれ、しばしば赫々たる手柄を立てた、若武者藤井伍長だつた。上陸を終つた戦車部隊は、感激的戦闘に勇躍、キヤタピラの音ごうく進撃は開始される。朝に一陣、夕に二陣と次々と藤井伍長操縦の小隊長車は縦横無盡に荒れ狂ひ、阿修羅の如く敵陣を蹂躪するのだつた。

二月十四日。

アダムパーク附近の戦闘も、成功裡に終了し、戦車隊は中隊毎に集結地へ集結を終り、戦車

や機關の調整を開始した。

「ドカーン」「ドカーン」

突如、何處から射ち出すのか、敵の砲弾が集中落下しだした。

どうやら敵は戦車の集結地を發見した様子だ。

「危い」

一刻も早く戦車内に隠れないと危険だ。

藤井伍長は大聲を發し、部下に戦車内に退く様命ずる。

舌をまき、

「あの子供の様な兵隊は何だろう」と感嘆をするのだつた。



華の若武者は散つたけれど、シンガポールに、少年戦車兵の武勳は永へに、花と咲き香ふ事だろう。

### 三 燃え上る戦車より隊長を救ふ

一月二十日、ムアル河を渡河急進は続く。  
翌る二十一日。

熱したる南國の風は、宛ら火炎にあえられる様だ。

「ド、ドーン」「パチ」「パチ」

前線より遙かに、銃砲聲が鳴り響いて来る。

パリツトスロインの堅陣に迫つた、友軍との間に死闘が始まつたのだろう。  
戦車隊も銃砲聲を聞き、頓に元氣づいた。

一方、敵陣は神速機敏な我作戦の妙に、完全に其の退路は遮断され、袋の中の鼠も同様、逃げ場を失つたので、已むを得ず頑強に抵抗を始めた。

早くも戦場に達した〇〇戦車部隊は阿修羅の如く敵中に躍り込んで行く。

鐵條網も、地雷も戦車の破壊偉力の前には、何物でもない。

敵の第一線、第二線と猛烈果敢に踏みにつつて勇ましくも、ごう／＼たる鐵の一團は潮の様に進撃する。

華の若武者松井伍長、小田川伍長は、仲良く二人一緒に〇隊長車の砲手、銃手として荒れ廻る様は水際立つて鮮やかだつた。

必中を期する弾丸が放たれる度に、敵はバタ、バタと墮れる。

其の度毎に、莞爾として微笑む二人の美少年だつた。

「ドカーン」

突如前面に、敵重砲現る。

正しく大敵、彼を制せざれば我制せらる。

瞬間松井伍長の戦車砲は火を吐く。

命中、敵重砲は見事にてんぷくした。

沈著なる砲撃は見事命中したのだ、敵はにはかに狼狽しだした。



此の機を失してはならぬ。「突撃だ！」  
猛烈な突進に移つた途端だ。

「ドカーン」

激しい衝激を受けると共に、敵弾は無念、我が戦車を射貫いた。  
惜しいかな、敵前六十米。

壯烈操縦手は紅に染まつて名譽の戦死。

○隊長、松井、小田川伍長は重傷を負つた。

然しゆうよは一刻も出来ぬ、此の状況を隊長に報告せねばならぬ。

○隊長の命一下、小田川伍長は車外に飛出すや、重傷に屈せず敵弾下を隊長車に向つて馳る。  
ポーツと機関部に火の手が上つた。

燃え上る戦車で、○隊長と松井伍長は砲に取りつき、必中の射撃は続けられる。

火の手は終に戦闘室に燃え移り、最早止まる事は許されない。

愛車の最後を見届けるや、二人は車外に飛び出す。

敵弾は雨あられの様だ。

松井伍長は燃え上る戦車より、○隊長を助け起し背負ふや、自分の重傷も忘れて安全地帯に  
退避する。

戦車隊長の許に来て、○隊長を地上に下ろすや否や、安心したのだろう、パツタリ其の場で  
意識を失つたのだつた。

炎上しつゝも勇敢に戦車に踏み止り、最後を見届けて車外に出で、自分の重傷に屈する事な  
く○隊長を救ふ。

一名は男々しくも重傷の身で確實に報告。

何と若武者の健気さよ。

榮光あれ、我等の少年戦車兵。

#### 四 笑つて死ねるぞ、氣負ふ初陣の若獅子

〔バクアン前線にて西田特派員二十七日發〕

われらは少年戦車兵、學校には○期、○期の弟たちがわれらの働きを見てゐる——陸軍少年



戦車兵學校を巣立つた第〇期少年戦車兵、この若獅子が比島戦線に従軍した数々の感激を語るのだ、眞ッ黒に灼けた顔には戦車兵魂が漲り比島驀進四百キロの赫々たる武勳が輝いてゐる、石川茂夫大尉の司會で、バナナの葉茂る下に彼等の生々しい初陣の感激を聞いた。

石川大尉 リンガエン灣の敵前上陸の感想は何うだ。

鈴木三郎伍長 上陸前夜の眞夜中に數發の砲彈が頭上を掠めた、その瞬間「戦争だ」と思はず手に汗を握つた、在校當時隊長品川教官殿が「笑つて死ぬ」「死の際まで紅顔の美少年たれ」と訓されたのが思ひ出された。

「どうしたら笑つて死ぬるだらうか」などとも考へて見た、上陸地點から四キロも出ると敵の兵馬が倒れてゐる。血醒き戦場——

「愛車よ頼むぞ」操縦桿を握る手が歡喜の武者振ひに震へる。

久米久昌伍長 敵は脆い、戦闘は演習より樂であります。一度敵彈の洗禮を受けると妙に度胸が出来る、バリ／＼蹂躪して暴れ廻つてやりました。

猪塚政治伍長 バリュアツグに進撃したのは元旦だつた、去年の年越そばは敵の砲彈だつたが元旦には逆に敵地深く潜り込み砲彈のお年玉をやつた、赤いバスが宙に吹つ飛ぶ敵兵はコン

クリートに叩きつけらる、痛快でありました。

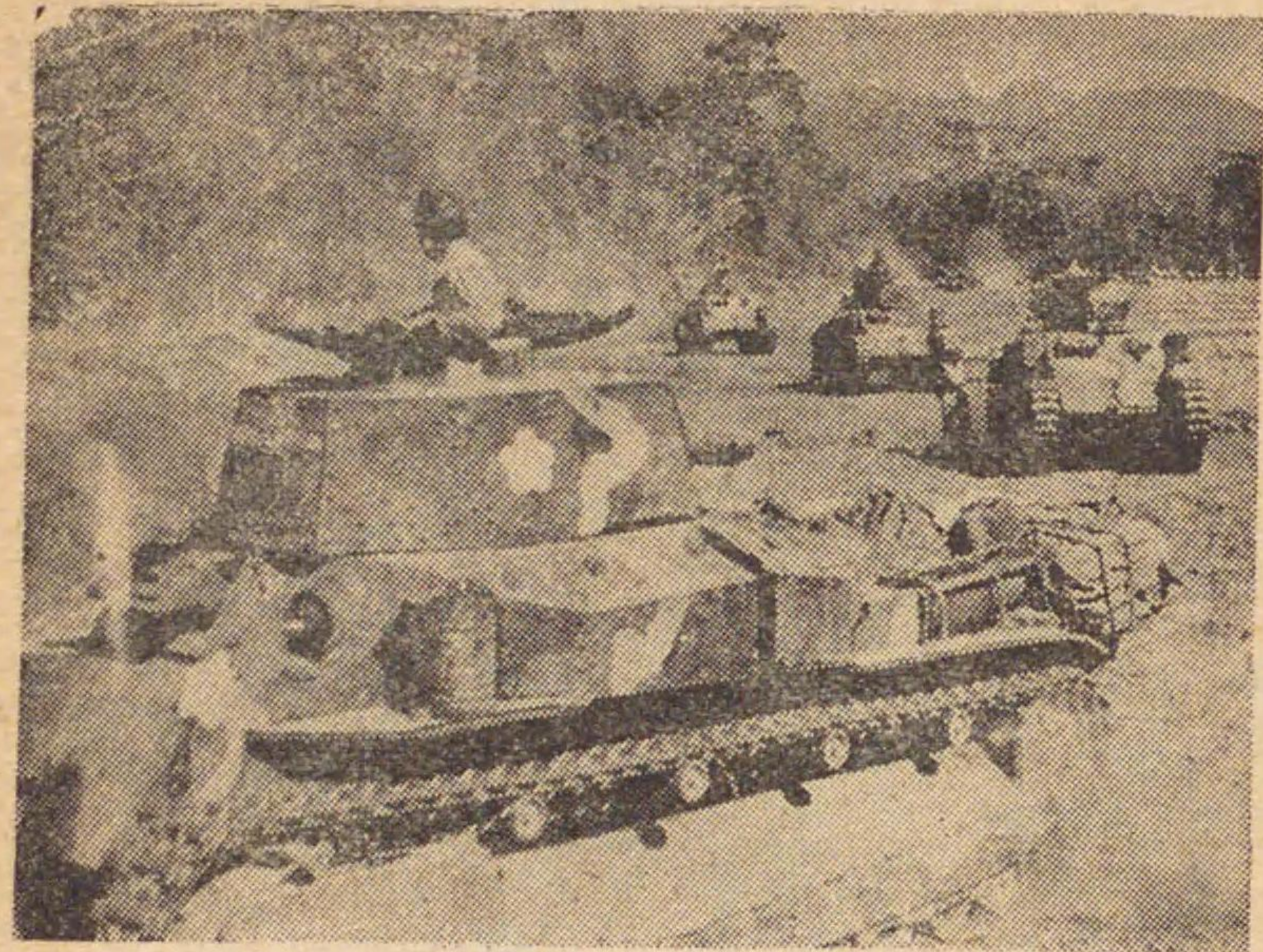
竹内善信伍長 バタアンに進撃するまでは黎明から眞夜中まで、眞夜中から黎明までと續けさまの追撃戦だつた、これだけの強行軍は演習ではありません、それでゐても少しも苦しいとも辛いとも感じなかつた、二年間の訓練の賜物だ。

戦車隊は常に部隊の先頭で一番乗りが出来て愉快だ。

猪塚伍長 戦闘が終つて晝間の激戦を思出してゐる時、同期の學友が敵彈を冒して飛んで来て顔を合せて話す言葉は斯うであります。

「オイッ、戦闘は思つたよりも樂だなあ」

「うん、愉快だ、しつかりやらう」



第十五圖 バタン半島攻略に向ふ園田部隊(陸軍省檢閲濟)



學友と會つた時は親兄弟に會つた以上に嬉しい。  
……苦樂ヲ共ニシ死生ヲ同ウスル軍人ノ家庭ニシテ……  
一同 平時はとても通過出來さうもないところも思ひ切つて操向を切れば案外たやすく突破出  
來る。

全く戦車兵は凄い、我乍ら日本陸軍の精華だと思ふ。

挺身突破 幾千里

黄塵遠く 地を覆ひ

敢然敵を 急襲す……。

(東朝所載)

## 第二篇

# 少年戦車兵感激の手記

### 戦車兵の歌

- 一、聖戰萬里海を越え  
吾が精銳の征く所  
旭旗燦たり皇軍の  
敵陣深く蹂躪す  
剛毅烈たり皇軍の  
三、挺進突破幾千里  
敢然敵を急襲す  
勇姿凜たり皇軍の  
四、滿蒙北支・中南支  
隴海線上麥青く  
武勳赫たり皇軍の  
五、五條の勅諭畏みて  
大和魂の雄健に  
忠勇無双皇軍の
- 朔風荒ぶ大陸の  
常に先鋒戦車あり  
精華我等は戦車兵  
歩兵の進路拓きつゝ  
これ有心の彈丸ぞ  
精華我等は戦車兵  
黄塵遠く地を掩ひ  
見よ装甲の機動力  
精華我等は戦車兵  
世界戦史に名も高き  
廣東城下菊薫る  
精華我等は戦車兵  
人車の契いや固く  
全軍勝利の基拓く  
精華我等は戦車兵



大東亞戦争に初めて敵弾の洗禮を受け親獅子は勿論全軍をして童顔可れんの少年戦車幹部の活躍には舌をまいてたゞ「偉い！」「戦車の寵児！」と期せずして口をわつて出る。  
實に皇軍のたのもしい戦士である少年戦車兵は如何なる感激と希望に燃えて、この若き双肩にせおひきれぬ様な責任を背負つて行かうと考へてゐるのであらうか。  
先輩に優るとも劣らじとせつせと努力しつゝある少年戦車兵生徒の手記を御披露しよう。

## 一 少年戦車兵の決意

第〇期生 流川兼男

家の譽、故郷の名譽を擔つて、幾多の健兒の中より撰られて、陸の華形、少年戦車兵として入校してより半星霜、凜然たる軍服に身を固め、第二の軍神西住戦車長を夢に畫き、先輩の赫たる武勳を仰ぎ、戦車魂を腹にして、一步一步と少年戦車兵としての道を進んで來たのだ。  
思へば戦車帽に身を固め、威風堂々と旨を受けて進む、少年戦車兵の勇姿をニュース、雑誌にて幾度見たであらう。

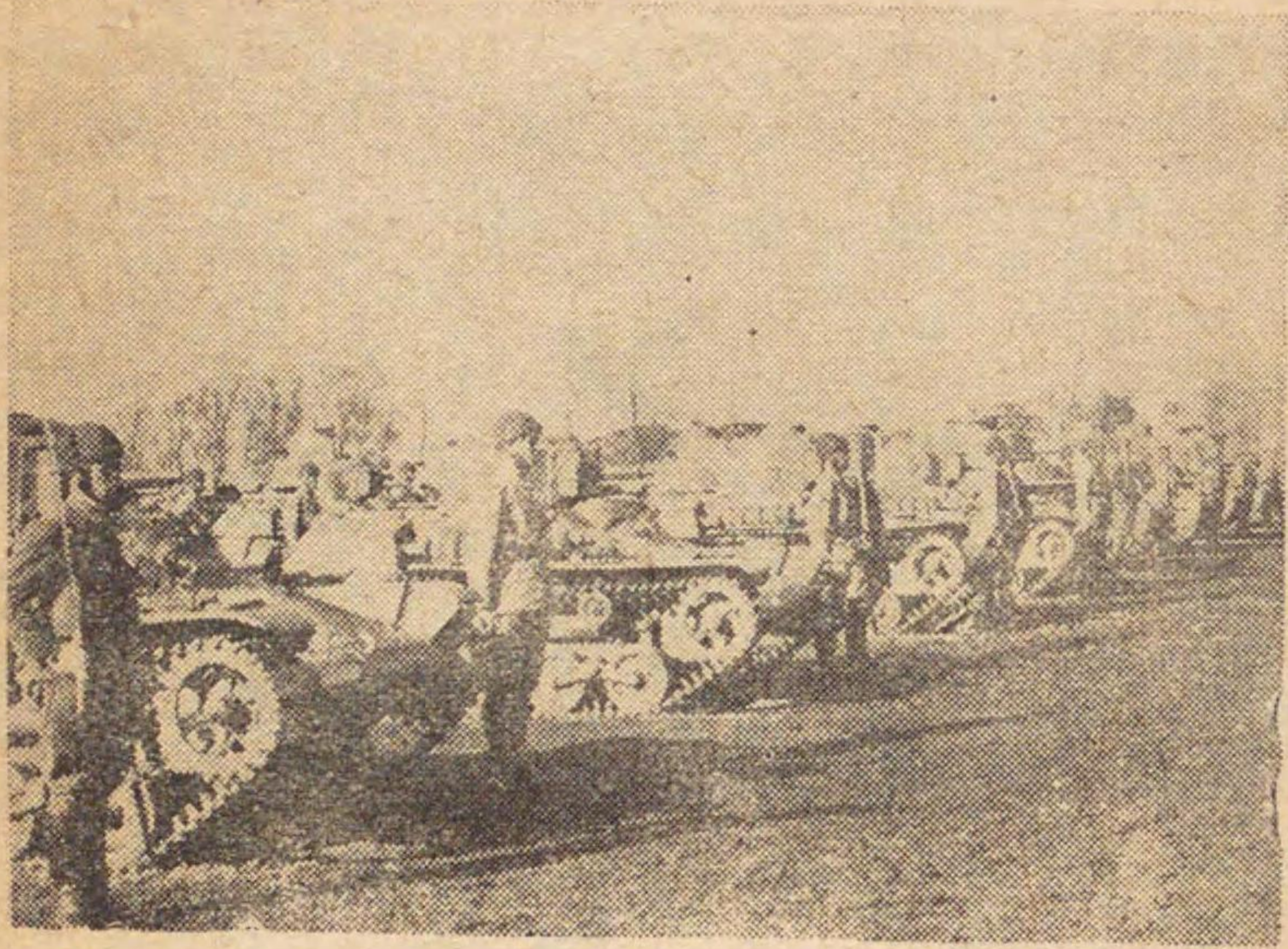
我等は其の羨望を押える事を禁じ得なかつた。「ソウダ」俺も少年戦車兵となつて見せるぞ。

其の祈願かなつて今、自分は其の榮ある少年戦車兵として國軍の精華と語はれてゐるのだ。其の間宮城を拜し、楠公の忠臣を偲び、靖國の英靈に誓ひ又陸軍始觀兵式には、間近に陛下の玉顔を拜する事の出來たのは、身を少年戦車兵となり得たればこそである。

我等の先輩は北の護りに、マレーの戦野に、フイリツピンに、蘭印に無限軌道の響も高らかに、眞先かけて、敵陣に突入し、機械化部隊の本領を發揮してゐるのだ。

其の花々しい戦果の陰には、一旦緩急ある場合に備へての猛訓練の賜物である。

中隊長殿を父に仰ぎ、區隊長殿を母として、父母にも優る慈愛を受け、總ゆる困苦を押切り、日



第十六圖 御親閲を受けたる若獅子の光榮



毎の訓練にいそしんでゐるのである。

初めて轉把を握りし時の嬉しさと、共に又此の腕に我等の精否がある事を思ふ時、思はず、握締めざるを得なかつた。

而して精神に、操縦に、射撃によりて、少年戦車兵としての、技倆否機械化部隊の幹部として練磨されて行くのだ。

初めて校門を通りし時、外出、年初休暇、我々の前に待ち受けてゐた颯爽として錦を着、故郷の地を踏みし時、その歡喜は無限の極であつた。

我等は愈々與へられたる責務に全力を盡し、益々訓練の精熟を重ね、如何なる場合にても、鹿島立の出来る準備に邁進してゐるのだ。

而して我等少年戦車兵は滅私奉公の大和魂は充溢し、如何なる試鍊をも蹂躪すべき、氣魄は漲がり溢れるのだ。

而して此の戦車魂の精神を受繼ぐべき、未來の軍神を待ちうけてゐるのである。

此の國家非常時に大東亞共榮圈の捨石と成る時は到來したのだ。

生を日出づる國に承け、名を少年戦車兵と稱え、君に忠を盡す事の出来るのは、此の上もな

い無上の光榮であり、名譽である。

無敵戦車に打跨り、縦横無人の境を行くが如く、戦場を驅逐する時、「車上ゆたかに美少年」との言を想到せず居られ様か。

我等の戦場は、我等を待受けてゐるのだ。雌雄は我等の雙肩にあり。

マレーの戦果も、ドイツの電撃戦も、戦車無くして出来様か。

陸に猛獅子、空に飛行機、其の陸の王者は我等少年戦車兵なり。

戦場の勝負は戦車にて決すと言ふも、過言では無い時代が來たのだ。此の時こそ、少年戦車兵の本舞臺であり、七生報國を誓ふべき時ではあるまいか。

少年戦車兵、少年航空兵、少年通信兵、皆國を護る心には變りは無いだ。而し我等は機械化の先鋒となり、最先端を進むのだ。

我等の前途を一億の同胞いや、東洋の民が、期待してゐるのだ。

少年戦車兵の任務は重し、數百の健兒が一つの力となり、驀進する時は來たのだ。

いでや少年戦車兵の名を擧げん。



## 二 夏季休暇

第〇期生 岡部正光

五月末の中間考査も過ぎ、教練、體操等に流汗淋漓となる頃には、何時しか期末考査も過ぎて楽しい遊泳演習だ。

東京灣には學校より、徒歩にて約二十分、中隊長殿始め皆禪一つだ。約三時間餘り遊泳し、十分に潮風に浴する。太平洋の荒波で十日間程鍛へた身體で、愈々待ちに待つた歸省だ。

前夜は嬉しくて眠れない、心は既に、故郷に飛んでゐるのだ、前期を完全に終へ、今や歸省せんとする時の喜びは何に喩へ様もない。

驛頭には、父母が待つてゐられる、弟が飛んで来る、自分の顔は眞黒にやけてゐる。父母は喜ぶ。休暇中も學校生活が、抜け切らず、朝は五時半には必ず起床するが、喇叭が聞へぬのが淋しい。家では餘り自分が立派になつたのに驚き喜ぶ。舊友が遊びに来て、驚き羨む。約半月の間に、十分に心身を鍛へ来る。

後期に頑張る體力を作つて歸校する、車中の旅は又格別な思ひだ。

生徒舎にて再び戦友と顔を合す時は、皆眞黒で見るからに、強そうである。

新しき元氣と體力で教練に射撃に操縦に張り切る時は、方に天高く馬肥ゆるの候だ。

## 三 少年戦車兵志願の動機

第〇中隊第〇區隊 阿部忠男

現代戦は總て、機械化戦だ。「マレー」に「フィリッピン」に大東亞各地に、無限軌道の音も高らかに、山と謂はず、川と謂はず、疾風迅雷、天に冲する砂煙をあげ、至る所敵を壓倒蹂躪する戦車隊の其の武勳たるや、實に赫々たるものあり。

此の戦車隊の活躍の状況を思ふ時、何者も血湧き、肉躍るを禁じ得んや。然るを況や烈々たる愛國の熱情に燃ゆる我々青年に於てをや。

自分が少年戦車兵として榮えある志願をした動機は、丁度昨年今頃だつたと思ふ。前から自分戦車兵になりたい。

戦車に乗つて正義に双向ふ敵を思ふ存分打ち破つてやりたい、と寢ては夢醒めては現だ。



其の爲には身體を丈夫にし、又勉強もせねばならず、一日一日を其れに精進した。學校を卒業するや、直ちに會社に勤めた。是も自分の望みではない、家庭上の都合からだ。然し自分は片時も其の志を失はなかつた。

ニユース映畫に、新聞に、ラヂオに、其の生々しい戦況を聞き、其の陰には明けても暮れても廣い大陸に、尊い血潮を流してゐられる人々の事を思ふ時、机に向つて何の苦しみもなく、算盤を弾いてゐる自分が餘りにも情なくなり胸は張り裂けんばかりだ。

或る時、雑誌で少年戦車兵募集の記事を見た、これ迄自分は少年戦車兵があると言ふ事は知らなかつた、戦車兵は現役でなければならぬものと思つてゐた。其から數日して、ポスターを見た、愈々自分の志を實現する時は來たのだ、もう一日も猶豫はならぬ。

早速願書を差出し、第一次試験迄の日をどんな事があつても、自分は今の望みを貫徹せずには止まんと固い信念が湧水の如く湧き出て來る。

父母も自分の志願を心よく許して呉れ、又蔭乍ら種々と努力もして呉れた。もう是で自分の將來は確立したのだ。

日本男子と生れ 天皇陛下の股肱として、一旦事あれば大君の爲、身を鴻毛の輕きに比へ、

水火尙辭せざる榮ある皇軍の一員として、生きて行くのだ。日本男子の光榮此れに過ぎたるはなし。七月二十日、第一次試験に無事合格した時の喜びはどうだつたらう。

然し難關はこれからだ。今高い石段の土臺を築き始めたのだ。自分は前よりもより一層の努力をなし、次に來るべき日を一日千秋の思ひで待つてゐた。

意氣潑刺たる青年には、希望がなくては、何もならぬのだ。一日一日を平凡に過してゐては何の役にも立たぬのだ。

其には希望を持つ事だ、希望に向つて一步一步前進して行く人間こそ、若き青年なのだ。

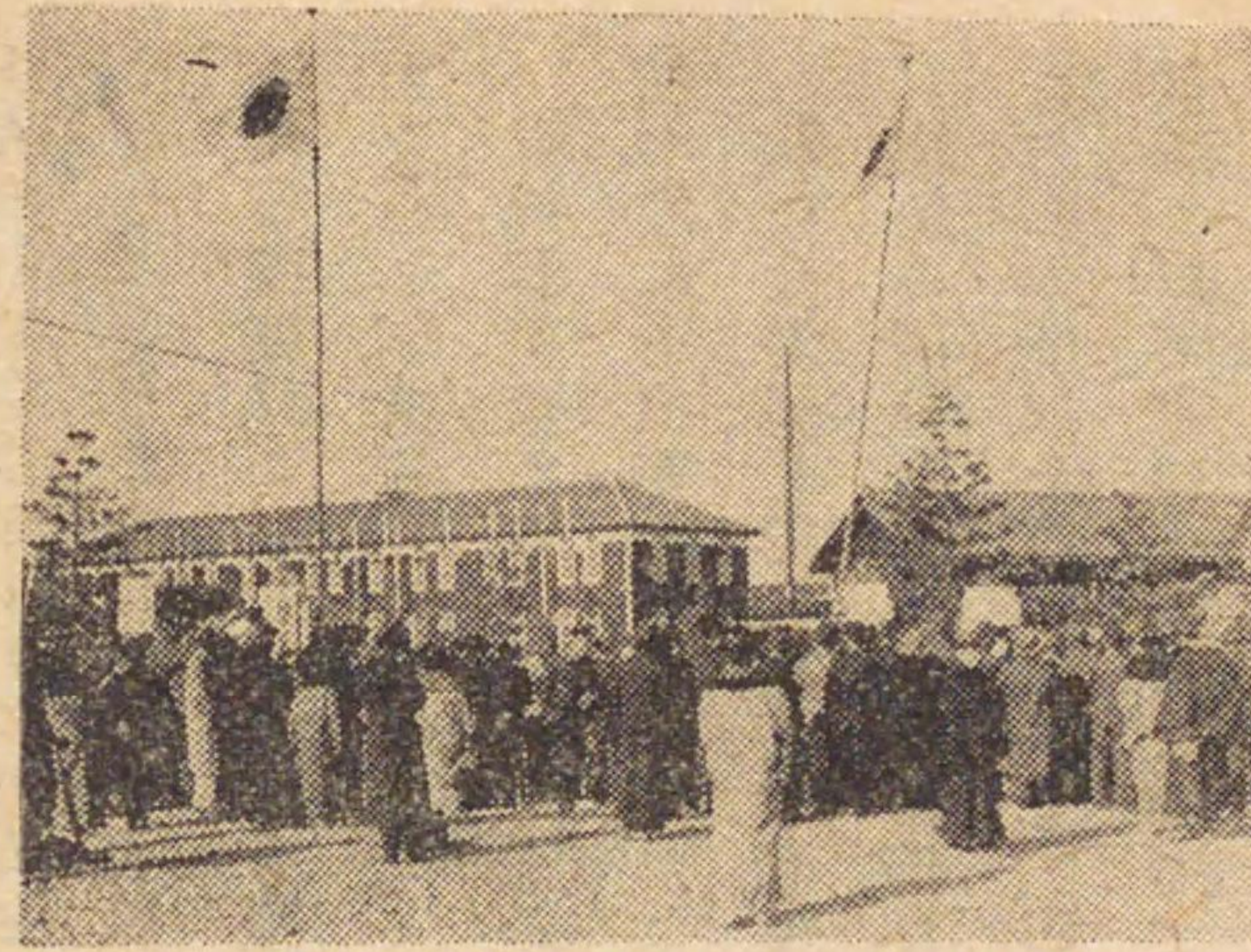
總ゆる困難を克服し、如何なる禍に遭ふも、是を轉じて福とするのだ。かの熊澤蕃山は「憂きことの尙此の上に積れかし、限りある身の力、ためさん」と言つた、其の通りだ。青年は此の氣魄を以て自己の理想に向つて邁進せねばならぬのだ。いや潑刺たる青年には、此の氣魄は當然備はつてゐるべきだ。

待ちに待つた出頭通知を受け、愈々出發と決まつた時の氣持は……

出發に當りて父母は、

「何の心置きもなく、家の事は忘れて、しつかりやれ」と言ふ。友人も村人も激勵して呉れる





第十七圖 校門前の試験発表

のに、何で不合格となつて家へむざ／＼と歸れ様か。よりによつたる優秀なる者の中で、此の自分が果して合格者となりうるか。其の心地たるや、實に悲壯其のものであつた。  
十二月一日、愈々運命の岐路たる発表の日。

是で見納めになるか、其とも長の親しみとなるか、二つに一つの校門の陸軍少年戦車兵學校と墨痕も鮮かに記されたる標札を眺めつゝ、待つていた。

愈々発表ダ！ 校門前は阿修羅の如き巷と化した。可否を決定した封筒は次から次へと渡されて行く。其の自分の番を待つ氣持といつたら……

封筒を開いて見て微笑んでゐるものもゐる。

只悄然と佇んでゐる者もゐる。愈々運命の封筒は自分の手に……

其の時の氣持と言つたら、いや誰でも、同じであつたらう。何も分らなかつた、封を破ろうか、破るまいか。

眼を閉ぢた儘、封を破り中紙を引き出し徐ろに少し眼を開き見た。

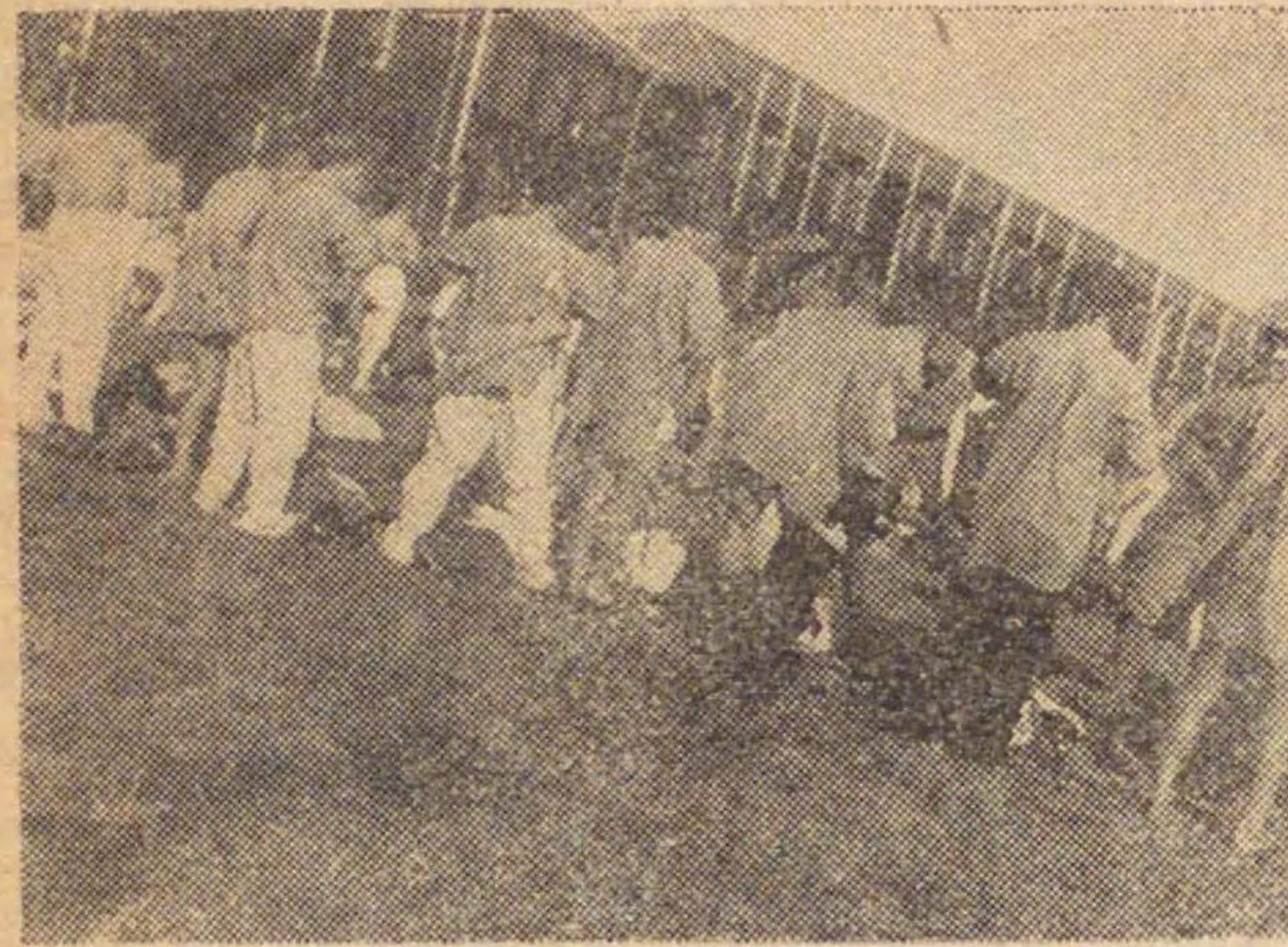
ウスボンやりと「戦車神社前集合」とあるではないか。夢ではないだろうか。我を疑ふ如く大きな眼をあけて見た。自分の身をつねつて見た。

矢張り痛い。オ、自分は少年戦車兵として、機甲界の一員として生きて行く事が出来たのだ。暫し感極まつて言葉も出なかつた、自分はこの合格の喜びを遠き故郷の父母に、友人に、村人に大きな聲で知らせてやりたかつた。

此の光榮、この感激、永久に忘るゝことは出来ぬだろう。又少年戦車兵でなくんば味はえぬ感激だつた。

今迄着てゐた物を脱ぎ捨て新しい軍服に、新しい編上靴を「グツ／＼」と鳴らせ乍ら。

「ヨシ己の身體は己のものであつて、己のものではないのだ」と思ふ時、今迄の總てを捨て去り白紙に立ち返つ



第十八圖 新しい軍服へ、新しい編上靴に





第十九圖 校庭に整列、初めての訓辭、査閲をうける。

て己は頑張つて頑張り抜くぞと、心の奥底から、次々と強い決心が湧き出るのだつた。

大東亞各地に於ける戦車隊の状況を思ふ時、若き青少年は感動する心がなくてはならぬのだ。然し熱し易く、冷め易しであつてはならぬ。

情にもろく、義に強い、これが軍人であり、又日本男子である。

將來の機甲界を背負つて立つべきは、少年戦車兵を置いては外に何者もない。

この光榮、この責任たるや、實に重大なるものがある。其を思ふ時、我々少年戦車兵は勿論、烈々たる愛國の至誠に燃ゆる青少年は同感であると思ふ。

自分は青少年諸君に告げる。現代戦は機械化力だ、世界は一日々機械化されてゆく。

機械化される國は榮え、機械化へ落伍する國は衰へ亡ぶのだ。若き猛獅子たらんとする、青少年諸君よ。

身體が丈夫、弱いの理論は第二だ。ドシ／＼志願をし給へ、總ては實行にあるのだ。何の躊躇もいらぬ。諸君の意志を其の儘、實現すればよいのだ。其が諸君達であらねばならぬのだ。自分等としては、より良き後繼者が欲しいのだ。自分達第〇期生は第〇期生として入校せらるる諸君の來るべき日を楽しみにしてゐる。(終)

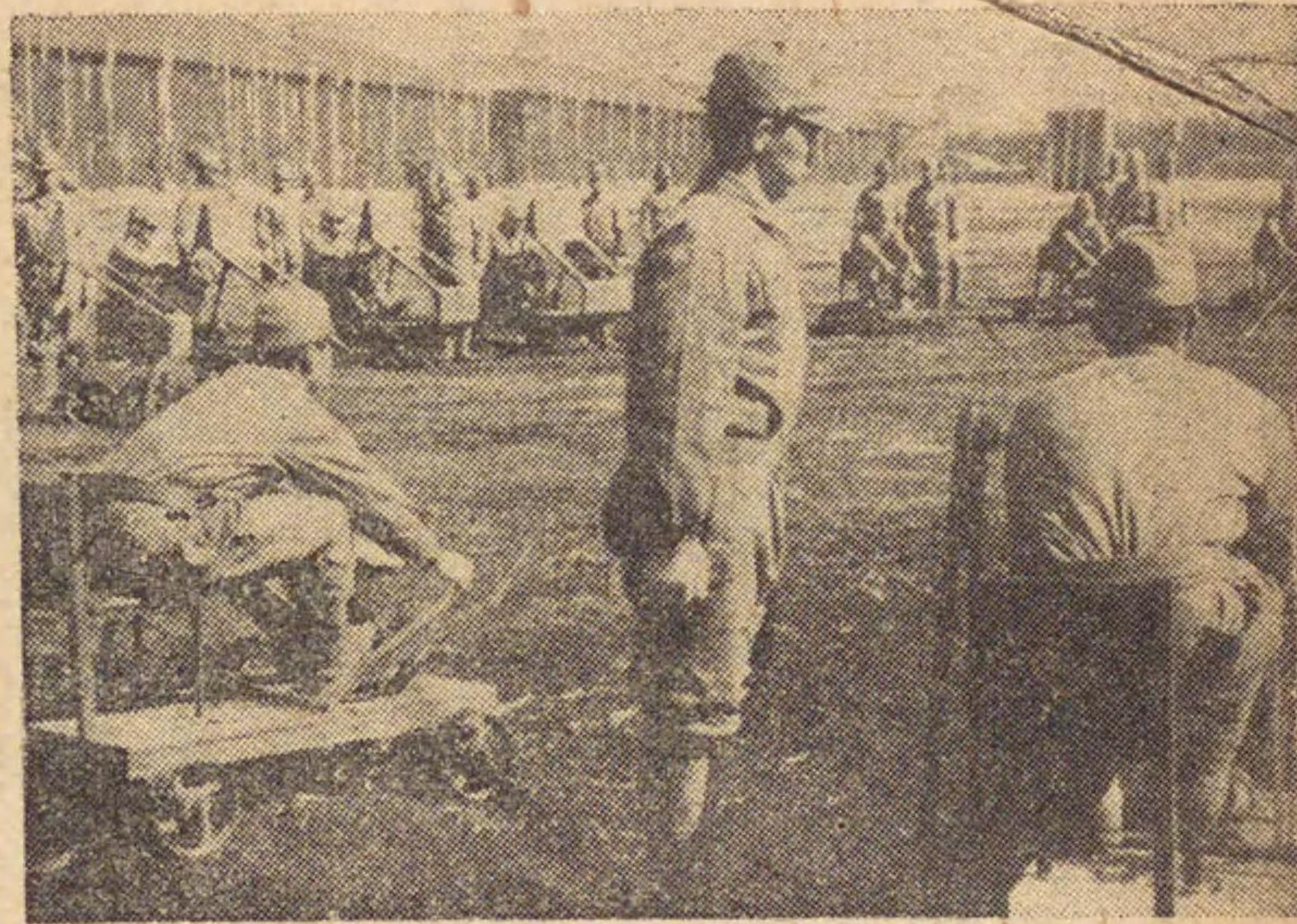
#### 四 我等は少年戦車兵

第〇中隊第〇區隊 金本喜代一

聳立する武寮の中、靜かな朝の清氣を破て響き渡る起床喇叭の音。一瞬一齊に床を蹴り直ちに軍装を纏ひ舍前に飛出し整列する。日朝點呼である。

活氣満ちた春風を肌を受け萬斛の空氣を胸に受け、心身清淨の氣に満々たり週番士官殿の點呼を受け、愈々少年戦車兵一日の活動が始まる。直ちに戦車神社に參拜する。戦車神社に叩頭し香取、鹿島の軍神に祈り遙拜所にて恭しく宮城を拜し伊勢大廟を遙拜し、父母祖先を禮拜す



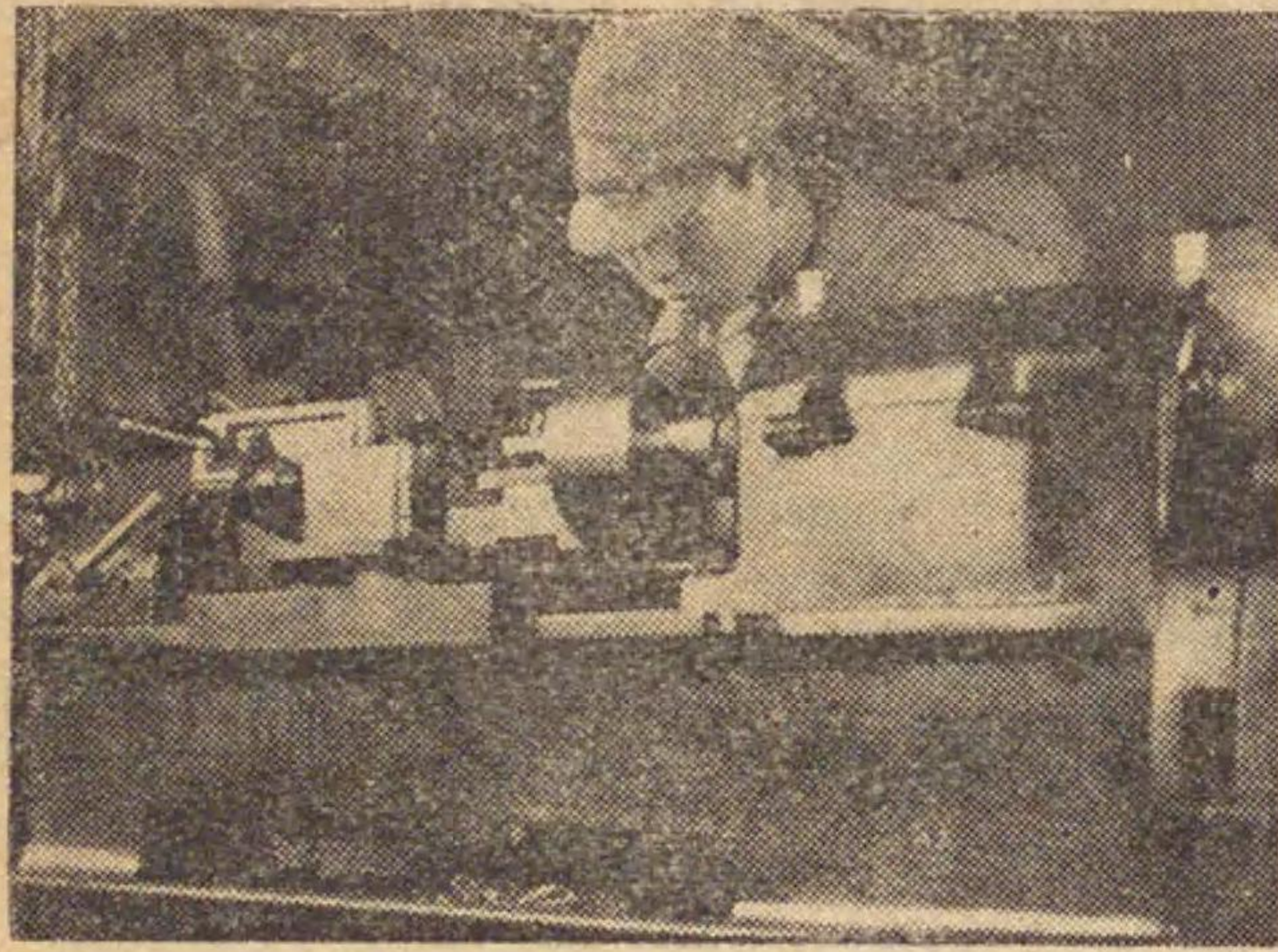


第二十圖 將來の名操縦手も手始めは架臺練習から

る。斯くして清澄爽快なる心境を持って朝の日課は終つた。

午前中は概ね講堂に於て普通學の授業あり、教場は戰場と同一である神聖なる修練道場であるを以て幹部の徳操と知行の啓發に努める。

午後は術科訓練である。體操、劍術、實兵指揮教練、戦車自動車の操縦、工術、射撃、總べての軍事術科を習得する。多忙なれど其の中に克服的精神は養成される。術科中特に訓練され又希望の的は戦車操縦である。下志津、習志野の曠野を縦横無盡に馳驅する時の痛快さに過ぐる事無からん。週に一、二日終日演習あり、新練兵場、三角原等に赴き終日單車教練に勵む。大いに訓練又鍛練し立派なる戦車隊幹部となるべく、絶大なる



第二十一圖 命とたのむ戦車の部分品は自分の手でと、製作に熱中する少年戦車兵

憧憬、烈々たる熱意を持って終始す。夜間演習又終夜演習もある。時に驟雨沛然として風雨雷塵に襲れる事あり。雨は吾々の戦友である、士氣旺盛、益々闘志を深くす。豪雨泥濘を物ともせず、前進前進又前進猛烈果敢、若虎の意氣を一段と

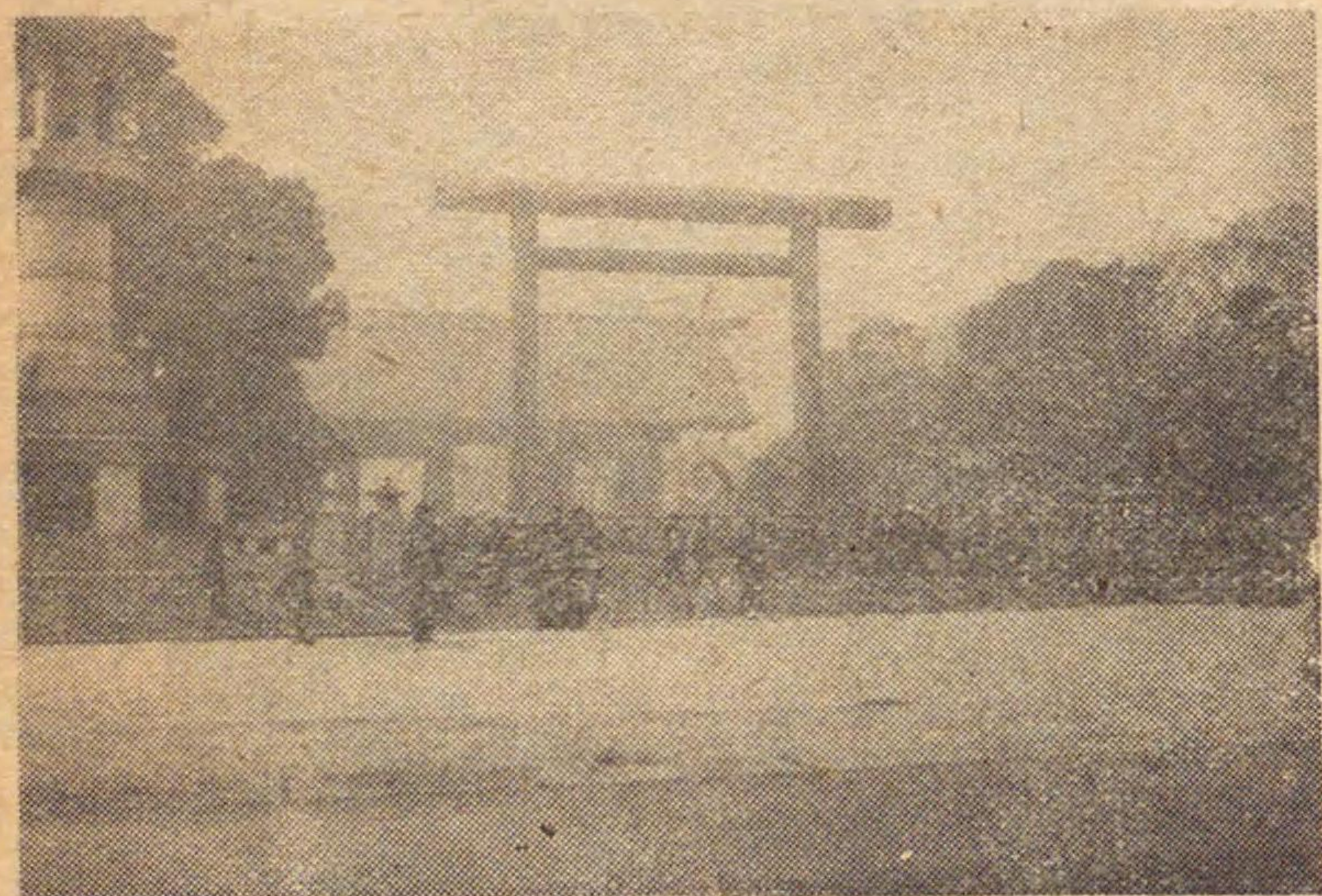
表現するは單車教練ならん。水塵を浴び湖溝の通過、戦車も逆轉せんかと思はれる突堤通過、或は挺身し或は強襲し敵中に突入す。斯かる困苦缺乏に堪へ、將來の戦車隊幹部の中樞となるべく、吾が若虎の訓練は又一入、猛又烈なるを知らん。

一日の勞汗も夕食前後の入浴に忘れ夕食後は號令調整、軍歌演習、詩吟を行ふ。隊伍、歩武堂々、皆熱聲を出して歌ふ。少年戦車兵の歌、戦車隊の歌、四條畷等、之等軍歌によつて固き團結に融け合ひ、

無言生建の傳統を呼起す。又舍前を散策して大聲、天も聞け、地も耳を傾けよとばかりに、號令調整を行ふ、之もやがて轟々たる中に機甲國を叱咤する聲となるも遠からじ。



我等は少年戦車兵



第二十三圖 靖國の英靈にぬかづき決死奉公の誠を誓ふ生徒

吾此の英姿を拜し、此の旨を體し我等少年戦車兵の士氣旺盛なる勇姿を目撃し、自ら尊王精神の奮ふを覺え士氣勃々たるを知るなり。

今や皇國は有史以來未曾有の非常時局に直面し、大兵を派して大陸に戈を進め大東亞建設に邁進してをる。而して東洋平和、肇國の大理想を實現するは容易なる業にあらず、然れども古歌に「大皇に背きし者は天地に入れざる罪ぞ打ちて粉にせよ」に言える如く世界に入れざる罪を打壞してゐるのである。

正義の向ふ所に如何にして敵あるを知らん。戦歴を見よ。南方作戦又總べての作戦は機甲軍團を先頭ではないか、戦車先頭に先輩の陣頭に立つを知れ、此の戦史を見るに付け吾等は氣興り、血沸き肉をどるを知る。

のみなり。

相呼應し壯觀之上なき分列行進、戦車は御馬前を驍進す、吾等の先輩なり、一入感激を益す



第二十二圖 楽しき校外訓育旅行

終りて二時間の自習に没頭する。明日來る日の戦闘準備なり、又修養時間に入る。日々を反省し入校時の感激と希望とを呼起し、武人の徳操と精神の向上進歩せしむ。

日夕點呼終りて圓らかなる夢路に入る、生氣滿々たる生活不撓の氣慨の内に烈々たる尊王至情は溢れる物の如く神聖に又前途を樂想する如く微かないびきも又、少年戦車兵の心情が知れるならん。

日曜日、休日等には

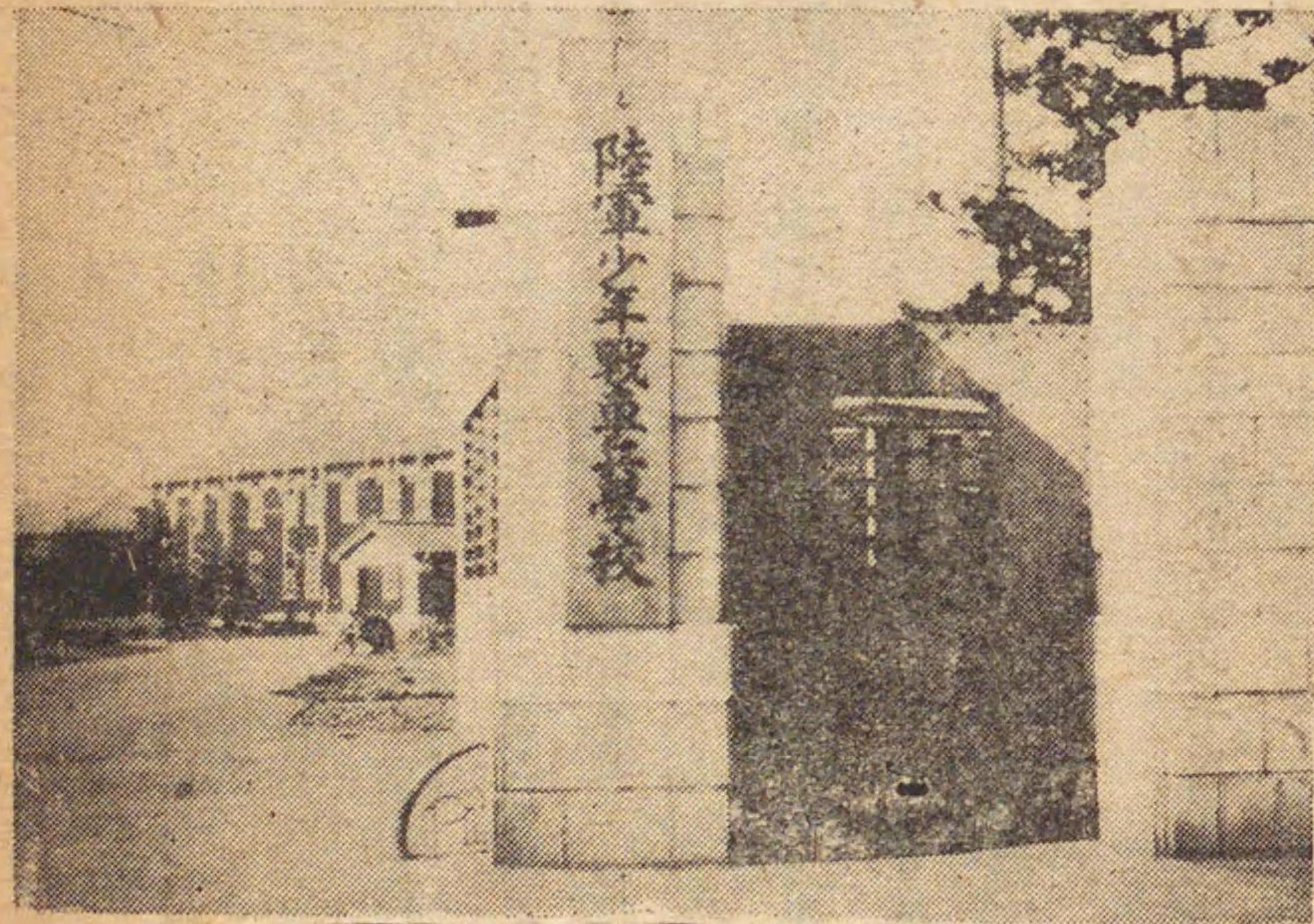
千葉海岸の散策、史蹟の訪歴、又、郊外の散歩なり。活然たる生氣を培い、實に意義深く消暇し多大の感銘を得て向上研鑽の資料とする。

天長の佳節には觀兵式の陪觀の榮に浴し 陛下の股肱たるの本分を愈々あつくし皇軍の榮譽に感激するのみなり。空陸



# 第三篇

## 少年戦車兵志願の手引

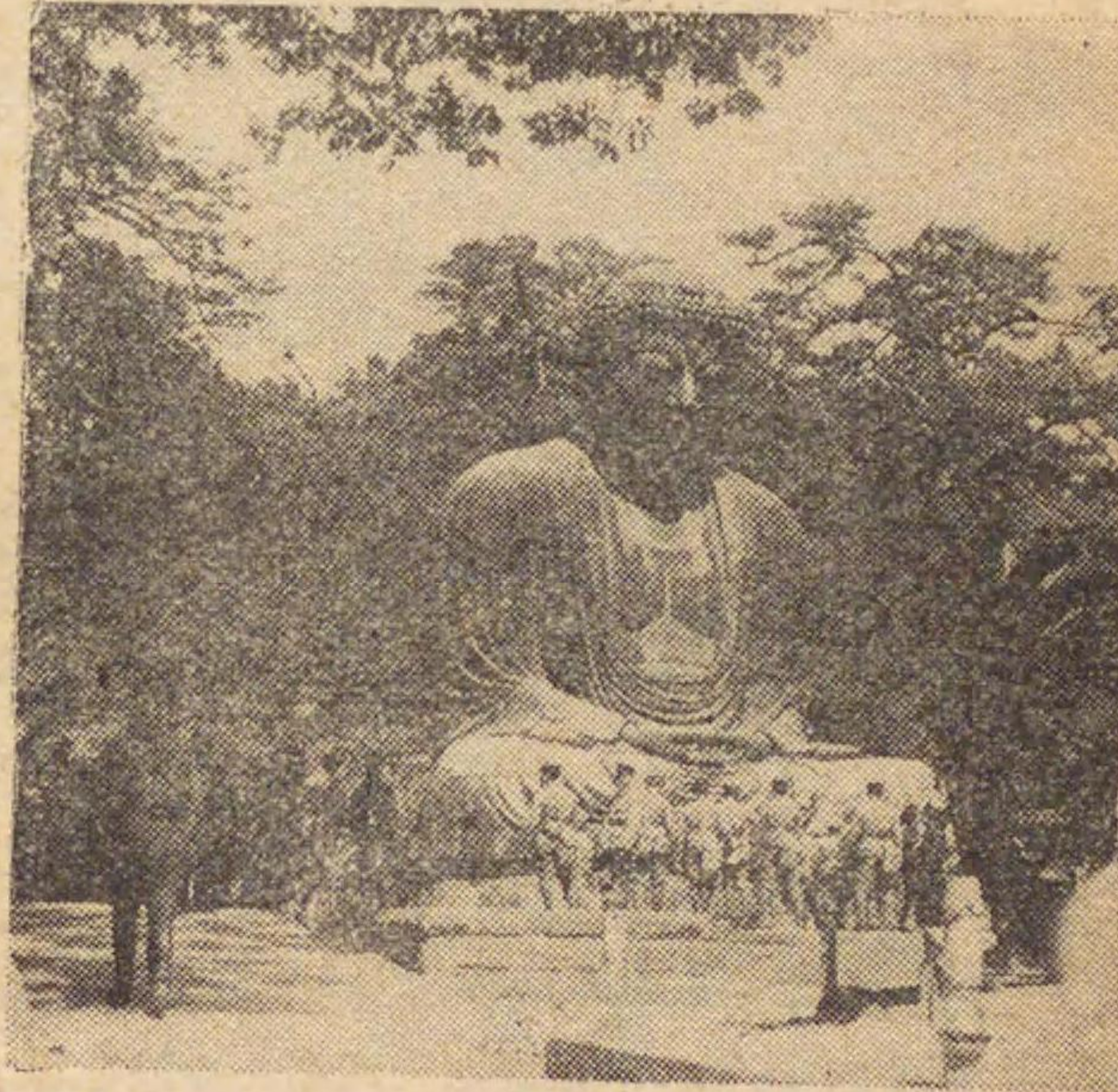


第二十五圖 (陸軍省検閲済)

憧れの陸軍少年戦車兵學校正門

皇國の前途に。

黒砂臺は綠濃く晴天に壯たり、吾等は此の光榮を得、此の堅き意志を又熱情を以て進まん。



第二十四圖 名所舊跡をたづねて(校外訓育)

軍は 天皇親卒の下皇基を恢弘し國威を宣揚するにあり 陛下の股肱として、御信念を忝く體し一死報國其の本分を盡し以て、東洋平和の礎石となる捨石となる事、是皇國有史以來の面目にして又男子の本懐之に過ぐるは無し。

皇軍の眞髓發揚は機甲界にあり、戦車隊に俟つ、來れ學べ、然して熱血、天を破り意志大地を徹すの氣概を持ってよ、而して非常時局と皇軍の使命を銘肝して止まない次第である。

何處からか、少年戦車兵の雄叫が耳に入る、轟々たる機關の音も又生氣をそそる、記號旗は前後に振られた、前へへ、少年戦車兵の意氣やがて南方に北方に、之等を結ぶ直線となり、永久に軍史にとどまるであろう。



これまでに大東亞戦争に於て少年戦車兵出身者の戦車兵幹部の、實に胸のすく様な目ざましい活躍ぶりに感嘆されたことと思ふ。

時代はしん／＼として移り變るに従つて世界各國とも戦車の擴張に大童になつてゐる時、我國に於ても滿洲事變を経て今次歐洲大戦並に大東亞戦争に於ける戦車部隊の眞の價値を遺憾なく認めらるゝに至り、來るべき戦争、國を擧げて勝敗を争ふべき(現大東亞戦争は米英を主なる相手國として正義の劍をふりかざし國運をととして勝敗を競ふてゐるのであるが、既にその勝敗のわかるゝところは明かとなつた。これ以上の大戦争)時我に數倍數十倍の機甲兵團が大廣漠地を蔽ふて航空部隊と力を協せ堂々と進撃しつゝある敵に對しては必ずや戦ふべき秋が到來し、且之等を一騎當千の勢を以て徹底的に撃滅することは諸君青少年の双肩にかゝつてゐるのである。然し機甲軍の中堅たる戦車兵として、その戦車部隊の寵兒であり至寶であるとあらゆる方面から賞讃の的となつた若獅子少年戦車兵には、果して如何なる手續によつてなり、又如何なる訓練を受けてゐるのだろうか。

熱烈に志願される諸君の誰れしもが、最も重大なる關心をもつて居られるところだろうと思ふので、これから項を分けて説明する。



第二十六圖 感謝の心をこめて楽しき夕食に向ふ

## 第一章 陸軍少年戦車兵學校に就て

### 一 少年戦車兵學校の歴史

少年戦車兵は從來、千葉陸軍戦車學校で教育して居つたが制度の擴充に伴ひ昭和十六年十二月一日陸軍少年戦車兵學校を創設せられ從來千葉陸軍戦車學校にあつた生徒教育に關する一切の機關を擧げて本校に移管擴充せられ、皇軍地上部隊の華形たる戦車隊幹部養成の制度を茲に確立せらるゝに至つたのである。

學校は創立當初千葉陸軍戦車學校の校内に假寓して居るが昭和十七年八月の頃静岡縣富士郡上井出村に新築中の新校舎に移轉、朝な夕なに靈峰を望みつゝ不屈の戦車魂の修養と練武の道に勵むことになつて居る。



二 少年戦車兵養成の由來



第二十七圖 近代戦は學力の向上を必要とす

純眞卒直で諸事に敏感な特性を利用して陶冶性豊かな青少年を教育し靈峰富士にも比すべき高潔な品性を植付け軍人精神の眞髓を體得させると共に果敢機敏な青少年の特徴を利用して速かに難しい戦車戦技の奥技を會得させ、機甲部隊の優秀な幹部を養成しようとするのが本校を設立せられた由來であつて、一般の壯丁の様に適齡後始めて此の方面に入るものには望み難い各種の點に期待する所が大きい。少年戦車兵の制度は制定後まだ日が浅く僅かに○回の卒業生を第一線に送つたのみではあるが、現に滿洲に支那に又南方の各地に遠征して居る本校卒業生の活躍振りは前述の如くにして眞に目覺しく至る所で赫々たる武勳を樹てつゝあり。

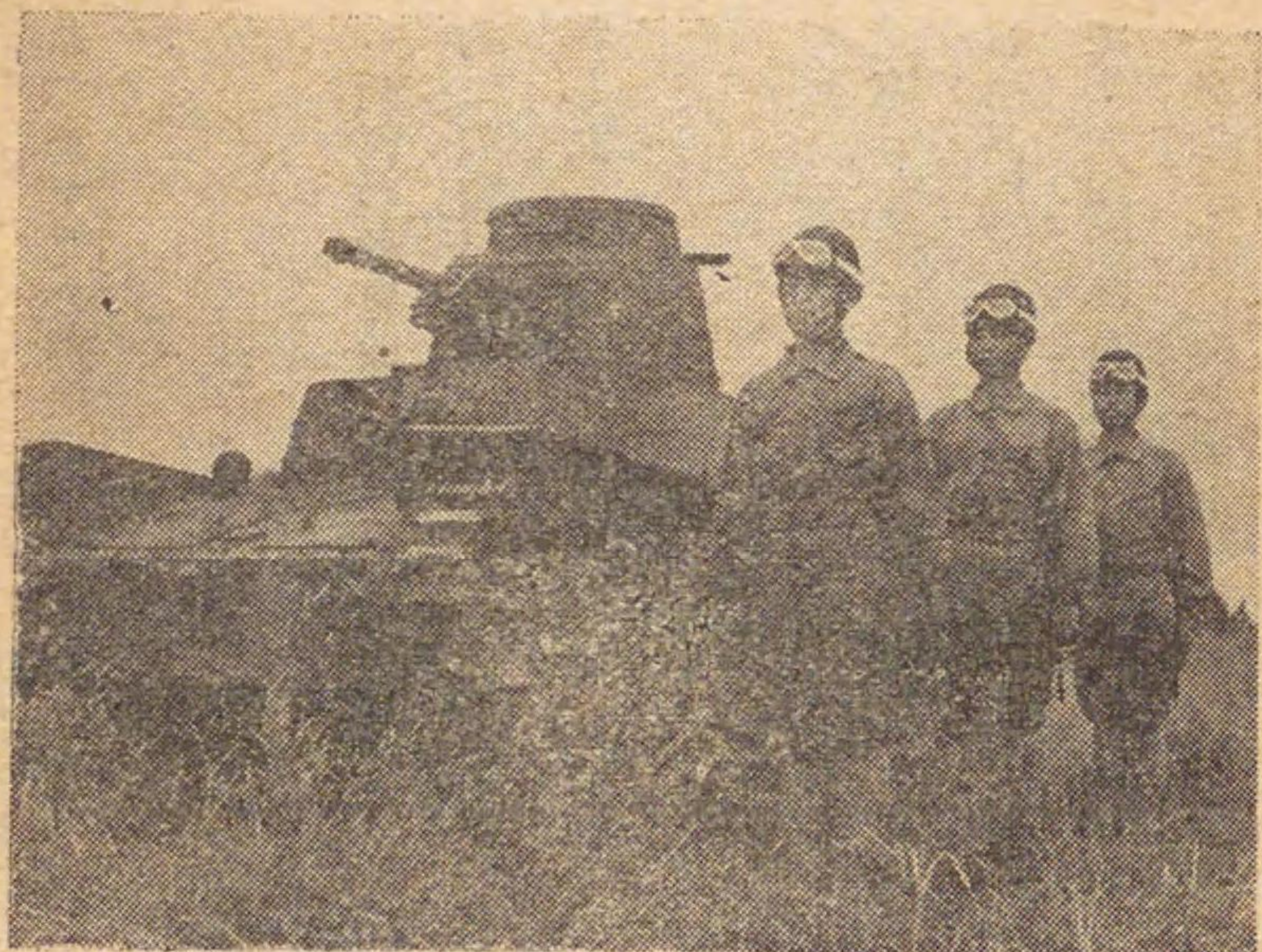
三 學校の組織

學校は本部、教授部、生徒隊、材料廠等の各部から成つてゐる。教授部は普通學や軍事學の學科教育と之に關聯する訓育を行ふ所である。生徒隊は若干の中隊に分れ中隊では訓育及術科教育が行はれる。材料廠は車輛、兵器の修理、生徒の實習を行ふ所である。

四 教育方針

戦車兵は卓越せる機動力と偉大なる攻撃力とを發揮して率先敵中に突入し敵の戦闘力を壓倒破摧して全軍戦捷の途を拓くものであるから、戦車隊の幹部以下は有ゆる困難を克服して其の本領を完うすべき絶大なる精神力を必要とするから本校の教育は國體及建軍の本義を銘肝し盡忠報國の信念を基調として軍人精神に徹する精神教育を第一義とし同時に強健なる身體、精練なる技能を完成するのに重點を置いて教育されるのであるが、僅かに二ヶ年の教育では總てを完成することは出来ないから、將來發達の素地を作る爲基礎の教育に重きを置いて居る。





第二十九圖 希望に輝く戦車訓練

があつて學習に便利な様に設備され又學校には講堂、炊事、食堂、入浴場、劍術場、生徒集會所、酒保等が設けられ設備は完備してゐる。中隊内は數箇の區隊及内務班に分れ區隊長(將校)内務班長(下士官)の指導の下に日々の起居、學術科の訓練が行はれる。

生徒は中隊を我が家とし中隊長、區隊長、准尉、下士官等上官の指導に従ひ純真率直に一致團結し些の不安もなく學術に勵んでゐる。中隊には各種の運動用具を備へ體育の用に資してゐる、又醫務室の設備も完備し早期の診斷に勉め身體の具合の悪き者に對しては常に特別の注意が拂はれてゐる。

日曜日や祝祭日には校内で運動や娛樂に興じ



第二十八圖 夕食後の團樂の一時(生徒集會所)

教育は訓育と學術科とに別れて居つて其の課目及配當時間の概要は附表第五の通りである。

生徒は校内に起居し特殊の兵營的環境内に於て育まれ文武の關係職員は父兄ともなり教官ともなり常に青少年の心理と體力とを考へ起居の躰しづから學術科の教育に至るまで合理的に漸を追ひ無理のない様親身になつて面倒を見る様にして居る。普通學は中學校の三、四年程度まで進めらるることになつて居る。

### 五 教育の内容

### 六 校内生活

日課の概要は附表第六の通りである。

生徒は中隊に配屬せられ中隊には自習室、寢室等



たり又は外出して浩然の氣を養ふのを樂みにして居る、又一年を通じ三週間以内の休暇も許されてゐてこの際には歸省外泊を許されることになつて居る。

### 七 諸演習の状態

術科の教育は校内に於ける教練の進むに従つて之を實地に移し更に野營演習等によつて實戰的に演練が行はれ又訓育は日常起居の間に行はれる訓化の外に、校外訓育として神社佛閣に参拜したり史蹟を探訪する等徳性の涵養情操の陶冶に資する様に計畫せられて居る。

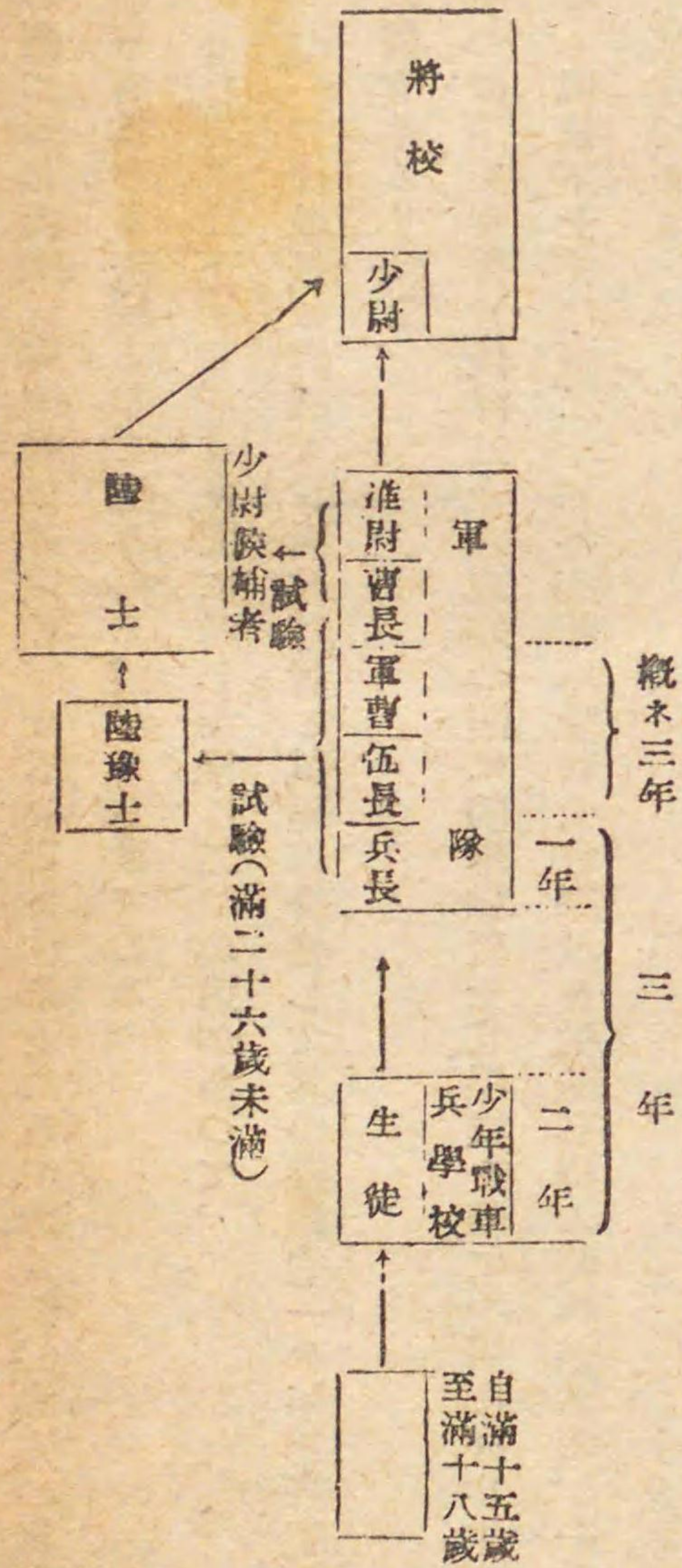
### 八 在校間の經費

總て官給であり僅かに日用品の購買、外出時の小遣、酒保の費用(校内で販賣しある菓子、日用品等)が入用であるが、之等は月四圓の手當を支給せられるから父兄から送金を受けなくても大體間に合ふ。

此の手當は決して多くはないが生徒としては十分な額である、從來の生徒も歸省用等特殊の場合の外は殆んど家庭から金錢の仕送りを受けるものはなく皆此の範圍でやつて居るのだ。

## 第二章 少年戦車兵の進路

一、少年戦車兵が本校に入校後進むべき道を圖示すれば次の通りであつて即ち本校入校三年後には陸軍伍長として下士官に任官することが出来る、之が戦車隊幹部としての第一歩である。





- 二、前の圖に示した様に從來戦車隊現役下士官を養成するところであるが、本人の努力によつては將來有爲なる將校として進み得る道がひらけてゐる。
- 三、將校となるには下士官任官後圖に示した様に二つの道があつて、
  - イ、其の一つは曹長に進級後少尉候補者の試験に合格して其の課程約一ケ年を終了した後少尉に任官する方法と、
  - ロ、一つは下士官任官後滿二十六歳迄の間に陸軍豫科士官學校を経て少尉に任官する方法である（現役下士官は滿二十六年迄陸軍豫科士官學校を受験し得る特典がある、一般の者は二十歳迄である）
- 四、尙當事者として少年戦車兵出身者に對しては特別な優遇方法が考慮せられつゝある。
- 五、陸軍軍人官等竝に諸給與等に就て  
陸軍に於ける現時の官等や色々の特典は次の表の通りである。

### 陸軍軍人官等表

#### 陸軍武官官等表

區分	將	官	佐	官
部生衛				
部理經				
部術技				
	陸軍大將	陸軍中將	陸軍少將	
		陸軍兵技中將 陸軍航技中將	陸軍兵技少將 陸軍航技少將	
		陸軍主計中將 陸軍建技中將	陸軍主計少將 陸軍建技少將	
		陸軍藥劑中將 陸軍藥劑少將	陸軍藥劑大佐 陸軍藥劑中佐	陸軍藥劑少佐 陸軍藥劑少佐
		陸軍齒科醫少將	陸軍齒科醫大佐 陸軍齒科醫中佐	陸軍齒科醫少佐 陸軍齒科醫少佐
				陸軍衛生少佐







考 備	加 憲 俸 兵	俸加績勤		俸加功年	名 稱	區 分	月 額	
		曹 長、 軍 曹	准 士 官	將 校				
通譯加俸ハ技能特ニ優秀ナル者ニ限リ月額二十圓以内ヲ増給スルコトヲ得、其ノ増給區分ハ陸軍大臣之ヲ定ム	憲兵准士官、下士官兵	五 圓	三十五圓	三十五圓	外宿手當	下士官、兵長	三十五圓	
	營外加俸	五 圓	三十五圓	三十五圓			上等兵	三十三圓
	營外居住下士官兵(曹長二等給以上ヲ受クル者ヲ除ク)	五 圓	三十五圓	三十五圓				
	營外居住下士官兵(曹長二等給以上ヲ受クル者ヲ除ク)	三 圓	三十五圓	三十五圓			三十三圓	

見習士官	陸軍補充令第六十五條ノ二及第六十六條ノ下士官候補者	陸軍補充令第八十三條第一項ノ下士官候補者、幹部候補生、操縦候補生(見習士官ヲ除ク)	陸軍諸學校生徒(士官候補生、幹部候補生、幼年學校生徒ヲ除ク)	陸地測量部生徒	依託生徒	依託學生	手 當 金				
							區 分	月 額	區 分	月 額	區 分
二十五圓	九 圓	十圓五十錢	四 圓	三十四圓	三十五圓	四十圓	伍 長	軍 曹	曹 長	區 分	月 額
							三 圓	六 圓	九 圓	十圓五十錢	十三圓五十錢



戦車乗員たる者に對しては一般兵種の外左記特典がある即ち戦車乗員たる公務員其の職務を以て戦車に搭乗し戦車勤務に服したるときは其の期間の一月に付半月以内を加算す

恩給上の特典

第三章 少年戦車兵教育の目的と志願者への要望

一、少年戦車兵教育の目的 本校は前にも述べた様に戦車隊の現役兵科下士官を養成する學校であつて皇軍幹部としての徳操を涵養し戦車隊下士官として必要な識見技能を興ふるのを目的として教育されるのであるから本校生徒を志願するといふ事は其の一身を捧げて軍人として戦場に報國の誠を致すべきを誓ふものであつて本校に入校する事によつて諸君の將來の方針は確立されるのであるから克く父兄、師友、先輩の意見を聞いて自分の決心覺悟を定める必要がある。一時的の興奮に驅られたり漫然と戦争熱に浮かされたり、或は單に何れ適齡になれば現役兵に採られるのだからと云ふ様な輕卒な考で志願すべきものではない。

二、志願者への要望

1 志願者諸君は前に述べた本校生徒教育の目的を十分に心得て置いて貰ひ度い。志は遠大でなければならぬが一足跳びに榮達を望む様なことなく、著實に一步々々を堅く踏みしめて生徒としての勉學研鑽の道に進まなければならぬ。斯くして學校を卒業した暁には、一に其の努力次第によつて進むべき道は何處迄も開かれて居るのである。



第三十圖 午後の體操

2 志願者は克く自己の特性を考慮しなければならぬ。戦車隊幹部として立つて行くのは決して容易な事ではない。特に戦車の眞の威力を發揮する爲には之に乗り之を動かすものゝ特性と云ふものが必要である、自己の性格を顧みず徒らに戦車隊幹部を志願し入校して見ても結局常に



他に遅れて自信を失ひ。充分自己の能力を發揮する事が出来ず、遂に失敗に終ると云ふ結果に陥つてしまふ。

此の自己の特性の發見といふ事は中々困難であるが、次に戦車隊幹部として特に必要な特性の二、三を擧げて見よう。

剛毅	果斷	果敢	放膽
沈著	機敏	不屈	不撓

等敏捷積極的で、然も事に當つて狼狽する様なことがなく落ち著きがあつて何處迄も自分の任務に向て邁進すると云ふ様な性質が大切である。

### 3 身體の強健である事

軍人としては身體の強健といふ事が如何に必要であるかといふ事は諸君も十分知つて居られるであらうが、特に戦車隊幹部として立つて行くのには絶対の要件である。

如何に前に述べた様な性格が戦車兵に適して居つても身體の強健でないものは御役に立たない、本校の身體検査が特に嚴格であつて現在は何とも無く一般には健康なものであつても本校生徒には適當でないと云ふものが澤山あるのも亦かう云ふ理由からである。

諸君は先づ身體に相談してから志願する事が必要である、特に兵業の關係上胸部諸機關の丈夫といふことは絶対の要件である。

## 第四章 生徒採用検査

### 一 採用検査

一、採用検査は陸軍少年戦車兵學校と陸軍少年通信兵學校の志願者を合せて同一試験課目と同一問題によつて試験を實施せられ、志願者の志望（志願票に記入した本人の希望學校）する學校に採用するのであるが、學校によつて採用の規格が多少違ふから第一志望の學校には不合格であつても、第二志望の學校に合格するといふこともある譯である。

二、生徒の採用に就ては二月上旬頃陸軍省告示を以て採用に關する事項を發表されることになつて居り其の頃には陸軍機甲本部から志願者心得と志願票（願書用紙）が全國に配布されて居るから志願者は各聯隊區司令部（自分の屬してゐる聯隊區司令部は附表第七を参照のこと）



〔朝鮮、臺灣、關東州又は滿洲國では各兵事部支那各地では各々其の地域にある最高指揮官の部隊本部〕若くは陸軍機甲本部（東京市牛込區市ヶ谷本村町）又は陸軍少年戦車兵學校（靜岡縣富士郡上井出村）に請求すればよい、郵送希望者は必ず五錢切手を封入すること。

三、陸軍諸學校生徒採用規則中の必要な事項は附表第一を見て貰ひたい。

四、志願及受験上の諸注意

1 志願票の記載

- イ 志願票には（甲）（乙）の兩片があるから記載例を熟讀の上所要の事項を墨又は青「インク」で字體を正して記入すること。
- ロ ◎印を附した欄だけを志願者で記入し其の他の欄には絶対に記入しないこと。
- ハ 志願票（甲）片の親権者（後見人）の欄に親権者（後見人）の捺印のないものは受け付けないから特に注意すること。
- ニ 志願票（乙）片の裏、履歷欄には學業、經歷、職業、賞罰等を判り易く且學業は年次順に在學、中退、退學、修業、卒業の別を明かにし、經歷は自家の手傳或は某所に勤務等を明瞭に記入すること。

2 志願票の差出

- ホ 青年學校は記入しなくてもよろしい。
- イ 志願票は（甲）（乙）兩片共に所要の事を記入し之に戸籍謄本（新たに市區町村役場より交付を受けたもの）を添へて四月一日から五月三十一日迄に到着する様に希望検査場所管の聯隊區司令官（朝鮮、臺灣、關東州又は滿洲國では各兵事部長、支那各地では各其の地域にある最高指揮官。）に差出すこと。
- ロ 志願書類の受付を確かめたい者は自分の住所氏名を記入した郵便「ハカキ」を封入しておくこと又差出郵便に料金不足のない様注意すること。
- ハ 總て願書類の差出期日は到着期日を示すものであるから期日を逸せぬ様少し早目に出すこと。
- ニ 後見人の承諾を得て必ずその認印を得ること。

3 志願票差出後の注意

イ 志願票差出後其の記載事項に異動を生じた場合（例へば住所移動、改姓等）は速かに其の旨を志願票差出先の聯隊區司令官（朝鮮、臺灣、關東州又は滿洲國では各兵事部長、



中華民國各地では各々其の地域にある最高指揮官)を経て陸軍少年戦車兵學校宛届出ること但し検査終了後に在つては直接陸軍少年戦車兵學校長宛に届出ること。(届の様式は自由であるが希望検査場名は忘れずに記入すること)

様式一例

住所變更届

昭和年 月 日

〇〇検査場

山川一水團

陸軍少年戦車兵學校長殿

私儀

今般左記ノ通り住所變更セシニ付届出ヅ

左記

舊住所 鹿兒島縣日置郡伊集院町太田一番地

新現住所 東京市江戸川区小岩町五丁目一九〇〇番地

ロ 志願票差出後検査場を勝手に變更することは出来ない。

ハ 止むを得ない事故の爲受検を中止する者は速かに其の旨を志願票差出先の諸官宛通知すること。但し検査終了後は直接陸軍少年戦車兵學校長宛届出ること。

ニ 志願票差出後色々な事を照會する場合には、名前丈けでなく必ず希望検査場名を肩書して分り易くすること。

4 身體検査

イ 身體検査の期日、場所、到着時刻等は志願者の希望した検査場の検査官から検査前直接本人に約七日前迄に到達される外検査場所在地の市(區)役所、町村役場(朝鮮又は臺灣に在つては之に準ずるもの)聯隊區司令部(關東州又は滿洲國に在りては各兵事部其他聯隊區司令部のない場所では其の地にある最高陸軍官衙又は軍隊)等の検査開始五日前迄に掲示される。身體検査に就いての間合せは直接検査場の検査醫官宛に行ふこと。

ロ 身體検査の時の服装は洋服又は和服に袴を着用すること。

ハ 身體検査の際の携行品

(1) 寫眞は單獨半身脱帽で新たに撮影したもの、大きさは手札型(縦約8cm 横約6cm)



とし之に縦 16cm 横 10cm の臺紙を貼り、其の表面餘白左側に本籍地と氏名を裏面に受検中の宿所を記入すること、この寫眞は身體検査不合格者の外は返さぬことになつて居る。

(2) 晝食

(3) 上履

ニ 身體検査の前夜には入浴を済まし身體を清潔にし猿又、禪等は綺麗なものを着用すること。

ホ 病氣其の他の理由で止むを得ず當日受検出来ないものはなるべく早く口頭又は文書で検査官に届出ること。

ヘ 身體検査合否の標準は附表第二第三の通りである。

### 5 學科試験

イ 身體検査合格者に對しては検査官から生徒採用學科試験心得を交付し、學科試験の場所集合時刻等を申渡される。

ロ 學科試験の際の服装は身體検査の時と同じである。

ハ 學科試験の際の携行品は「ペン」(萬年筆でもよい)、墨又は青「インク」、吸取紙(新しい無地のもの)、鉛筆、小刀、消「ゴム」、三角定規(無地のもの)「デシメートル」尺、の外は一切携行することを許さないから、試験場に餘計なものや不用意に手帳等を持つた儘入場するやうなことがない様に特に注意すべきである。

ニ 受験途中の離席は許されないから試験場に入る前に用便等を済ませておくこと。

ホ 検査場で不正の行爲があつた者、試験室に規定以外の物品を携へたる者、検査に缺席又は遅刻した者、言語所爲等眞面目を缺く者等は試験を停止される。

ヘ 試験前又は試験中に止むを得ない事故の爲受験が不能となつた場合の處置は身體検査の時と同様である。

## 二 検査終了から著校迄

一、検査が終つてから採用豫定者として決定する迄

1 身體検査を終つたものには其の試験場の試験委員から直接受検者に對し在學成績證明書



用紙等を交付されるからよく研究して爾後の手續に間違のない様に注意すること。  
 2 受検者は右の在學成績證明書用紙を添へて左記の區分に依つて證明願を出身の學校長に差出すこと。

イ 國民學校卒業者又は中途退學者……國民學校長

ロ 中等學校（青年學校を除く）第二學年終了

以上のもの及本年第二學年修了見込のもの……中等學校長

ハ 中等學校一學年在學中のもの……國民學校長

3 學校長は本證明書を規定の期日迄に陸軍少年戦車兵學校長に送る。

4 試験終了後の身上異動届（例へば住所移動、改姓）等は本人から直接陸軍少年戦車兵學校長に對し特に確實に行ふことが必要である。

二、採用豫定者の發表

1 採用豫定者が決定すると志願者の志望學校から直接本人に對し通達する（官報には發表しない）通達 通常速達郵便に依る。

2 本通知を受けたる者は速かに採用に應ずるや否やの回答をする義務がある、回答期日に

遅れたものは志願取消と認めるから特に注意すること。

三、採用豫定者發表から著校迄

1 採用豫定者として通知を受けたるものは併せて學校到着の日時を指定せられ、學校到着後著校後の検査を受けることになるから、採用豫定者としての通知の喜びに有頂天となることなく大いに自重して積極的保健に注意し、自分の不注意から著校後の検査で不覺を取らない様に心掛くべきである。

尙著校後の検査は陸軍少年戦車兵學校で行はれるが、設備其の他の關係で若干名宛數日に互つて實施されるから到着日時は人によつて違ふことがある。

2 前にも述べた様に採用豫定者としての通知は何處迄も豫定であつて、著校後の検査の爲不幸にして不合格となるものもない譯ではないから注意が大切である、今迄にも採用豫定者としての通知丈けでもう入校が決定した様に觸れ廻り、盛んな送別會迄受けて不合格となつても面目上歸るに歸れない様なことになつて散々學校に迷惑を掛けた者もあるが氣を付けなければならぬ。



### 三 著校後の検査

- 一、著校後の検査は身體検査、體力検査、適性検査及人物検査に分れて居る。
  - 二、身體検査は大體受檢の時と同様であるが、一層嚴密に實施されるから此の検査で障礙を發見されたり、受檢後の不攝生が原因で不合格となるものもあるから注意を要する。
  - 三、體力検査は概ね一般に行はれてゐる體力檢定の要領で行はれる。
  - 四、適性検査は本人の性能が戦車兵として適して居るか否かを検査する爲に行はれるもので判斷力、決斷力、作業力等を判定されるが落ち著いて受檢すれば何も心配することはない。
  - 五、人物検査は主として口頭試問により色々の事を質問される、思つて居る通り率直明確に答へればよい。
  - 六、この検査が終ると愈々正式に採否を發表され、採用をされたものは其の日から本校生徒として校内に起居する事になる。
- 従つて現在在學中の學校に對する退學届等は正式に入校した後に行ふことが必要である。

- 七、採用豫定者で無届又は不注意に依つて著校指定の日時に遅れたものは除名する、尙毎年無届不參者のあることは甚だ遺憾とする所であつて自分の無責任、不徳義を表はすことになるから注意しなければならない。

若し止むを得ない事情から出頭の出來ない者は必ず前以て届出ること、不參の届出のあつたものに對してはそれだけ次位のことを更に補缺として指定するのであるから、無届不參者は自己の不都合から他の切實なる希望者の志をも無にすることになるのである。

- 八、採用豫定者著校時の服装は洋服又は和服に袴を穿ち採用豫定通知書と印章を携行すること  
 その他父母の寫眞、日用品若干〔手拭、洗面具〔ハミガキ〕、ハブラシ〕、石鹼等、筆入、手帳、鉛筆、便箋、切手、端書等〕は携行して差支ないが、不用のものは成るべく携行せぬ様注意すること。
- 入校當初寒い場合には各自の腹巻、「シャツ」、「ズボン」等を重ねて着用することを許されてゐる。
- 入校後の被服、書籍、筆墨、用紙等は總て官給されることになつて居る。
- 九、この検査に出場したものには、受験當時の住所から學校迄の里程に應じ旅費を支給せられ



る。

又検査の爲學校附近に宿泊する場合には、其の宿泊料は入校後支給されることになつて居る。尙検査に不合格となつたものには歸郷の際往復の旅費と検査間の宿泊料とを支給される。

一〇、其の他

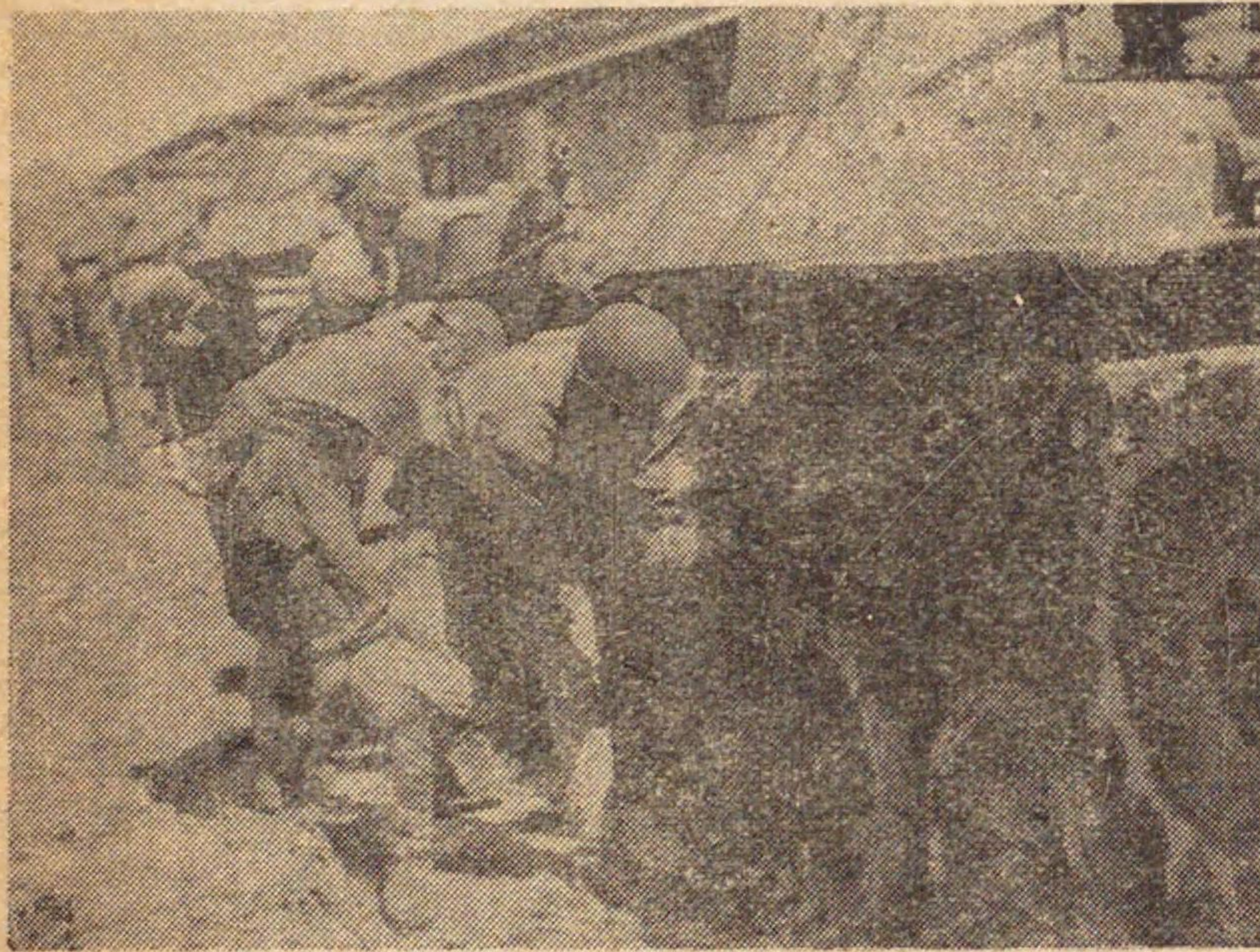
1 受験者の得点や序列等は一切發表しないこととなつてゐる。

2 第一志望が陸軍少年戦車兵學校で第二志望が陸軍少年通信兵學校であつた場合、試験の結果陸軍少年戦車兵學校には不合格でも、陸軍少年通信兵學校に合格の場合には其の方に廻される。

一一、以上各款に互つて述べたことを圖示すれば附表第三の通りである。

## 第四篇

### 學科試験の準備に就て



第三十一圖 人車一體、休憩は愛車の手入(陸軍省檢閱濟)



陸軍少年戦車兵學校生徒の採用試験の對照は國民學校高等科修了程度の青少年にあることは既にのべた通りであつて、準備の範圍は國民學校教科書の範圍から出ないのである。

即ち國民學校教育の根本目的たる

「國民學校は皇道の道に則りて初等普通教育を施し國民の基礎的鍊成を爲すを以て目的とす」の事項につき如何なる程度に受験者が修養し、體得されてゐるかといふことを見るのが根本となつてゐるのである。

そこで國民學校時代を再び思ひ出して、毎日雨の日も晴れの日も八年一日やうに通つた國民學校のなつかしい教科書を再び書籍箱から取り出すことに於て、すでに懷舊の念禁じ得ぬものがあるであらう。

然し國民學校を巢立つて或は軍需工場に或は野に山にあらゆる産業戦士としてひるまは一心ふらんに増産に従事し、つかれきつたからだで家に歸りつき作業衣をぬぎすて憶れの軍神西住戦車長たらんとえい／＼と勉強される諸君にとつて、最も淋しきものは信賴すべき良き師なき事ならんと衷心より同情し今日に至つた。

然し熱烈なる志願者諸子の御希望に答へ且時代の寵兒として大東亞戦争以來急に雨上りの筈

の様に少年戦車兵に關するいろんな圖書参考書が出版され、然もその内容たるや必ずしも感心出來ないものもあり切角一生懸命に努力してゐる青少年諸君を却つて骨折つてもそれだけの價値を發揮することは出來ない。勉強する爲には必ずその根本の主旨を知つて後はじめに教科書の一字一句が何を意味するかが明らかになり覺え易く然も能率があがるのである。

これから先づ一般的な事項と各課目についてお互に研究しよう。

## 第一章 一般的事項

先きののべた様に、皆が八ヶ年間國民學校で教育されたのはどういふ目標に青少年を導かうとしてやられたか。

それをよく手を胸にあてゝ考へて見ることが即ち受験勉強の最も大事なことであり、著者がこの本を諸君の爲にあらはした根本原因である。

即ち

イ 教育に關する勅語の御諭を十二分に奉體してあらゆる教育をうけてゐるうちに、皆が皇



國の道を修練し特に國體に對するはつきりした信念をもつやうになること。

ロ 國民生活に必要な普通の知識技能といふものを自ら身をもつて味ひ自分のものとし情操を醇化し健全な心身を作ること。

ハ 我が國の文化の特質をはつきりと分らせると共に東亞及世界の大きな動きについて知り皇國の地位と使命について自覺する様に教育を受け大國民たる資質をもつこと。

ニ 日常生活にすべて密切な連繫をもつ様な勉強をすること、即ち日常生活に縁遠い机上の空論勉強をやらないこと。

この外尙細部の事項についてたくさんあるが、以上述べた様なことを早く國民全般に知らしめたいといふ考へを以て教育せられ來たつたのである。

そこで我が陸軍に於ても、この教へられた事項が即ち入學試験問題となるのであるから、この根本の事項を忘れて書いた答案は、骨のない間にそはないものとなつてしまふのである。各科目に就て述べよう。

## 第二章 國語

### 一 國語の眞髓

我が國の道德、言語、歴史、國土、國勢等について習ひ特に國體の精華を明にして國民精神を涵養し皇國の使命を自覺せしめ以て皇國に生れたる喜を感じ敬神奉公の眞の意義を知る爲に國民科といふもので徹底的に教育せられ來たつたのであるが、その國民科の一部門である國語を勉強して來たのは何の爲か。

それは日常の國語を習ひ、其の理解する力と自分の意志を發表する力とを養ひ、國民的精神を修養する爲に國語を習つて來たのである。

即ちどんな學校を受験するものでもこの國語の根本といふもの、何を學ぶべきかといふことをよく味つて、はじめて教科書の文章に流れてゐる生々した精神がわかつてくるのではなからうか。



諸君の大部分はこんな大所高所から物をながめずして、最初から各部門の小さいところに頭をつゝこんでしまふのが普通の勉強法であろう。これでは少い時間つかれたからで、能率の上る勉強は出来ないのである。

即ちこの根本といふものを知つてゐたら、ある教科書の一課を讀んでこの中に流れてゐる日本精神の生々とした姿がどこにあるかといふことに氣がつくであろう。

この大きな流れがわかつてはじめて枝に入り葉のところに入つて研究すれば、自ら流るゝ水の様に頭の中に入つて來るのである。

次に枝に少々入ろう。

## 二 讀み方、綴り方、書き方

國語には讀み方、綴り方、書き方、話し方といろ／＼あるが讀み方に於ては常に正しく讀む力を養ふといふことと言語の練習に氣をつけて正確に書寫することに努力することが必要である。

國語には必ずといつていゝ位に書取の問題と讀み方の問題が出てゐるが、書取の勉強は諸君が如何に勉強しても數へきれないほどある漢字を全部覺えるといふことは到底望めない。又出來たとしてもこれに何千時間を費して出來るだろうか。

今の諸君にとつては三十分否五分間が貴重な時間にちがひない。

なるべく書取り等に使用される時間といふものをきりつめることが何よりの工夫である、では如何にしたらよいか。

諸君が國民學校在校中習つた全漢字を拾ひ上げても相當な字數になると思ふ、これも全部書けるものは殆んどあるまい。

従つて諸君はこの中で書けなければならんといふ字（常用漢字）だけは一生懸命馬力をかけて全部明確に端正に書けるといふ自信を養ふことが必要であろう。

次に讀み方である。

これも同様これだけは書けなくとも國民たる以上少くとも讀めなければならぬといふ字（準常用漢字）については反覆勉強して間違なく讀めるといふことに力を注ぎその他餘つた時間と力を文の意味の解釋等について勉強せば必ず諸君の能率は一〇〇パーセントに擧るであろう。



標準漢字表 (昭和十七年六月十七日 文部省發表)

常用漢字

- 【一】部 一丁七丈三上下不  
世丙
- 【丁】部 中
- 【ノ】部 丸主  
久乘
- 【乙】部 乙九乳乱(亂)
- 【丁】部 事
- 【二】部 二五井亞
- 【一】部 亡交京
- 【人】部 人仁今仕他付代令  
以仰仲件任休伺位低佐住何  
佛作使來例供便係俗保信修  
俵個倍候借假(假)偉停健側  
備催傳傷傾働像價儀儀儉儉優
- 【几】部 元兄先光免兒
- 【入】部 入内全函兩
- 【八】部 八公六共兵具
- 【冂】部 冊再
- 【フ】部 冬冷
- 【口】部 出
- 【刀】部 刀分切列初判別利  
制券則前副割劇劔
- 【力】部 力功加助努勅勇勉  
動務勝勞(勞)勢勤勵
- 【冫】部 包
- 【匕】部 化北
- 【匚】部 區
- 【十】部 十千升午半卒協南  
博

- 【冂】部 印危卵卷
- 【尸】部 厚原
- 【厶】部 去參
- 【又】部 及友反取受
- 【口】部 口古句召可史右各  
合吉同名后向君吸告周味呼  
命和品員唱商問啓善喜單器
- 【口】部 四回因困固圍圍園  
圓圖團
- 【土】部 土在地坂埋城堂堅  
報場境墓增墨
- 【士】部 士壯尙(尙)壽
- 【攴】部 夏
- 【夕】部 夕外多夜
- 【大】部 大天太夫失奉奧
- 【女】部 女好如妃妙妨妹妻  
姉始姓委姿威娘婚婦
- 【子】部 子字存孝孫學
- 【宀】部 宅守安完宗官定客  
宣室宮害宴家容宿寄密富寒  
察寢實寫寶
- 【寸】部 寸寺封射將專尉尊  
尋對導
- 【小】部 小少
- 【尤】部 就
- 【尸】部 尺尾局居屈屈屋展  
履屬
- 【山】部 山岡岩岸峰島崇
- 【川】部 川
- 【工】部 工左巧差
- 【己】部 己
- 【巾】部 市布希帝帥師席帳  
帶常帽
- 【干】部 平年幸幹
- 【女】部 幼
- 【尸】部 床序底店府度座庫  
庭庶康廢廣
- 【延】部 延廷建
- 【弋】部 式
- 【弓】部 弓引弟弱張強彈
- 【彡】部 形影
- 【彳】部 役往征待律後徒得



從御復徵德

【心部】 心必忍志忠快念

怒思怠急性怪恐恥息悔悟

悲情惜惠惡想意愛感慈態慣

慰憲懇應

【戈部】 成我戒戰

【戶部】 戶所

【手部】 手才打扱承技投折

押拂拔招拜拾持指振捕捨授

掛採探接控損擊操擴

【支部】 支

【支部】 收改攻放政故教救

敗散敬敵敷數整

【文部】 文

【斗部】 斗料

【斤部】 斤新斷

【方部】 方施旅族旗

【日部】 日旨早昇明易星映

春昨昭時晚晝普景晴暑暖暗

暮暴曇曜

【日部】 曲書替最會

【月部】 月有服望朝期

【木部】 木未末本札机杉材

村束柿杯東松板林枚果枝柄

染柔查柱柳栗校株根格桃棗

桐桑梅條梨械棒森椀植楠業

極榮構樂標樣橋機橫檢櫻權

【欠部】 次欲歌歡

【止部】 止正步武歲歷歸

【歹部】 死殘

【殳部】 段殺殿

【母部】 母每毒

【比部】 比

【毛部】 毛

【氏部】 氏民

【气部】 氣

【水部】 水水永汗求池決汽

沈河油治況泉法波泣注泳洋

洗洲活流浮浴海消淚深混清

淺減渡溫港湯源準滅滿漁演

漢澤激濟灣

【火部】 火灰災炭無然煮煙

照熟熱燈燒營

【爪部】 爭爲

【父部】 父

【片部】 片版

【牛部】 牛物特

【犬部】 犬狀猫獨

【玉部】 玉王班現球理

【生部】 生產

【用部】 用

【田部】 田由甲申男町界畑

留略番畫當

【疋部】 疑

【疒部】 病痛

【火部】 發

【白部】 白百的皆皇

【皮部】 皮

【皿部】 皿益盛盡

【目部】 目直相省眞眠眼

【矢部】 矢知短

【石部】 石砂砲破研硯確

【示部】 示社祈祕祖祝神票

祭禁福禮

【禾部】 秀私秋科秒移稅程

種稻穀積

【穴部】 究空突

【立部】 立並(竝)章童競

【竹部】 竹笑符第筆等答策

算管箱箸節範築簡籍

【米部】 米粉粗精糖

【糸部】 系紀約紋納紙級素

細終組結絕給統糸(絲)絹經

維網綴綿線緣練縣縫縮縱總

績織繼續

【缶部】 欠(缺)

【网部】 置

【羊部】 美群義

【羽部】 羽習翼

【老部】 老考者

【耒部】 耕

【耳部】 耳聞聲職

【肉部】 肉肥肩育肺胃背胸

能脈脫腕腰腸腹膾



【臣部】 臣臨  
 【自部】 自  
 【至部】 至致臺  
 【臼部】 與興舉舊  
 【舌部】 舌舍  
 【舛部】 舞  
 【舟部】 舟航般船艦  
 【艮部】 良  
 【色部】 色  
 【艸部】 花芽苗若苦英茶草  
 荒荷菊菓菜萬落葉著蓄薄藏  
 藝藥  
 【虎部】 處號  
 【虫部】 虫(蟲)蠶

【血部】 血衆  
 【行部】 行術衛  
 【衣部】 衣表衰袋被裁裏補製  
 【冏部】 西要  
 【見部】 見規視親覺覽觀  
 【角部】 角解  
 【言部】 言計訓記訪設許詔  
 評試詩話認誓語誠誤說課調  
 談論諸講謝謹證識警議護譽  
 讀變  
 【谷部】 谷  
 【豆部】 豆豐  
 【豕部】 象豫

【貝部】 貝貞負財貧貨貫責  
 貯貳貴買貸費賀賃資賞賢賣  
 質贊  
 【赤部】 赤  
 【走部】 走起越趣  
 【足部】 足距路  
 【身部】 身  
 【車部】 車軍輕輪輸轉  
 【辛部】 辛弁(辨辯)辭  
 【辰部】 辱農  
 【辵部】 込迎近返述迷迫退  
 送逆途通速造連週進遊運過  
 道達遠適選避邊  
 【邑部】 郡部郵都鄉

【酉部】 配酒醫  
 【里部】 里重野量  
 【金部】 金釜針鉛鉢銃銀銅  
 鋼錄錢錦鍋鍬鎌鏡鐵鑛  
 【長部】 長  
 【門部】 門閉開間閣關  
 【阜部】 防降限陞院除陰陵  
 陸陽隊階際障隣險  
 【隹部】 雀雄集雜離難  
 【雨部】 雨雪雲雷電震露  
 【青部】 青靖靜  
 【非部】 非  
 【面部】 面  
 【革部】 革靴

【音部】 音響  
 【頁部】 頂項順預頭題額類  
 願類  
 【風部】 風  
 【飛部】 飛  
 【食部】 食飲飯養余(餘)館  
 【首部】 首  
 【香部】 香  
 【馬部】 馬驗驛  
 【骨部】 骨体(體)  
 【高部】 部  
 【彤部】 髮  
 【鬼部】 魂  
 【魚部】 魚鮮鯉鯛

【鳥部】 鳥鳩鳴鶴鷄  
 【鹵部】 鹽  
 【麥部】 麥  
 【麻部】 麻  
 【黃部】 黃  
 【黑部】 黑点(點)  
 【鼻部】 鼻  
 【齒部】 齒  
 【龜部】 龜(龜)



準常用漢字

【一 部】 且丘  
 【一 部】 丹  
 【ノ 部】 乃之乏  
 【乙 部】 乞也乾  
 【丁 部】 了  
 【二 部】 云互互  
 【一 部】 亦亭享  
 【人 部】 仇介企伊伍伏伐伯  
 伴伸似但佳併佻侈侍依侮侯  
 侵侶促俄俊俠俱俳倅倉倒倚  
 值倦倫偏偕偵偶傍傑傘傲傭  
 傲債僕僚僞僧儒償儲

【几 部】 充兆兕克兕  
 【八 部】 其典兼冀  
 【冂 部】 冒  
 【冫 部】 冗冠  
 【冫 部】 冶准凍凝  
 【几 部】 凡凱  
 【凵 部】 凶凸凹函  
 【刀 部】 刃刈刊刑到刷刺刻  
 削到剖剝剩剩創劑  
 【力 部】 劣効勃勸募勳勸  
 【勹 部】 勻勾勿勿  
 【匕 部】 匕

【匚 部】 匠匡匪  
 【匚 部】 匹匿  
 【十 部】 卑卓  
 【卜 部】 占  
 【冂 部】 却卸卸卿  
 【厂 部】 厄厘厭  
 【又 部】 又又叔叡叢  
 【口 部】 只叫叱叶司吃吏吐  
 吞吟否含呈吳吹吾呂咫啞咽  
 哀哨哲唄啞唇唐唯啞喉喚喪  
 喫嗣嘉嘗噲噴嚴囑  
 【凵 部】 囚圜  
 【土 部】 均坊坐坑坪垂型垣  
 域執培基埼堀堆堤堪塤塊塔

塗塞塵塾墜墮墳墾壁壇壓壘  
 壞壤  
 【夕 部】 夙夢  
 【大 部】 央夷奇奈奏契奔奢  
 奪獎奮  
 【女 部】 妊妥姦姪姬烟娛娠  
 婆婿媒媛嫁嫌嫡孀  
 【子 部】 孔孟季孤孺  
 【宀 部】 宇宏宙宛宜宸寂寡  
 寧審寬寮  
 【小 部】 尖尙  
 【尤 部】 尤  
 【尸 部】 尻尼尿屍屏屑屢層  
 【屮 部】 屯

【山 部】 岐岬峙峻峽崎崩岳  
 (嶽)  
 【巛 部】 州巡巢  
 【工 部】 巨  
 【巳 部】 巳  
 【巾 部】 巾帆帖幅幕幡幣  
 【干 部】 干  
 【幺 部】 幻幽幾  
 【广 部】 廉廊廓廠廳  
 【升 部】 弊  
 【弓 部】 弔弘弦弧弼彌  
 【彡 部】 彩彫彰  
 【彳 部】 彼徐徑循微徹  
 【心 部】 忌忙忝忽怖怨怙恒

恢恤恨恭悅悉悠患悶悼惑惟  
 惰惱愁愉愚愼慌慕慘慢慨慮  
 慶愆憂憎憐憚憤憩憶憾懲懷  
 懸懼戀  
 【戈 部】 戈或威戮戲戴  
 【戶 部】 戾房扇扉  
 【手 部】 托扶批抄抑抗披抱  
 抵抹抽拍拒拓拘拙括拭拳搽  
 按挑揆挫挺挽抄捧据捺掃掌  
 排掘掠推掩措揃描提挿揚換  
 握揭揮援搖搜搬携搾摘摩摸  
 撚撤撫播撮撰撲擁擇担(擔)  
 據擦擬擾攝  
 【支 部】 敘敏敢



【斗部】 斜  
 【斤部】 斤斬斯  
 【方部】 於旋  
 【无部】 既  
 【日部】 且旬旭早旺昂昆昌  
 昔是晶智暇暫曆曉  
 【日部】 曳更曹會  
 【月部】 朋朗  
 【木部】 朱朴杖杜析枕枯架  
 柏某柑柘柴柵柝柎核栽桶梁  
 梯棄棉棋棚棟棺椅檣楷檜榭  
 概槽榑樓樞樟模樹樺樽橘樞  
 檄檜檣櫛欄朽李  
 【欠部】 欣欺欵款歎歎

【止部】 此  
 【歹部】 殛殆殉殊殖殲  
 【殳部】 毆毀毆  
 【毛部】 毫  
 【水部】 汎汗汚汝江汰汲沃  
 浚沖沙沸沼沿泊泌泡泥泰津  
 洪派浦浪浸涉涯液涵涼淋淑  
 淡淨淳淵添渙渠渥渦測渴湊  
 湖湧溜溝溢溪溶溺滋滑滯滴  
 漂漆漏漑漕漠漫漬漸潑潔潛  
 瀉潤潮潰澁澄澱濁濃濕濫濯  
 濱瀆瀆瀕瀧瀨瀾灌  
 【火部】 灸炊炎烈烏烹焦焰  
 煉煎煤煩煽熊熔燧燐燕燥燦

燭爆爐  
 【爪部】 爪爵  
 【爻部】 爽爾  
 【片部】 牒  
 【牙部】 牙  
 【牛部】 牝牡牢牧牲牴牽犧  
 【犬部】 犯狂狐狙狩狸狹狼  
 猛猪猶猿獄獅獲獵獸猷(獻)  
 【玄部】 玄率  
 【玉部】 玩珍珠琴琵琶瑞環  
 【瓜部】 瓜  
 【瓦部】 瓦瓶  
 【甘部】 甘甚  
 【生部】 甥

【田部】 畏畔畜畝畢昌疆異  
 疊  
 【疋部】 疋疎疏  
 【疒部】 疫疲疹疾疰瘕痔痕  
 痘痢痲瘦癩癩  
 【火部】 登  
 【皿部】 盆盜盟監盤  
 【目部】 盲盾眉看眺睡督睦  
 睽瞭  
 【矛部】 矛  
 【矢部】 矩矯  
 【石部】 砥硝硫硬碁碍碎碑  
 磁磬磨礮礮礎  
 【示部】 祀祇祉祐祚祥祿禍

禦禱禱  
 【内部】 禽  
 【禾部】 租秭秩稭稗稷稟  
 稱稼稽稿穗稔稷  
 【穴部】 穴穿窳窓窟窮窳窺  
 窃(竊)  
 【立部】 竟竣端  
 【竹部】 竿笛笠筋筒箇篔簹  
 篤簿籠籬籬  
 【米部】 粃粒粕粘粟粧粹糊  
 糞糧  
 【糸部】 糾紅紊紕純紗絃紛  
 紡索紫累紹紺絃絡紹綜綠綬  
 網綸緊緒締編緩緬緯縊縛縞

繁繕繡繩繪繫繭縲纂織  
 【缶部】 罐  
 【网部】 罪罫罰署罷罹羅  
 【羊部】 羊着  
 【羽部】 翁翌翰耀  
 【而部】 而耐  
 【耒部】 耗  
 【耳部】 聊聘聖聯聽聰聾  
 【聿部】 肅肇  
 【肉部】 肋肌肖肝股肢肪肯  
 肴胎胞胴脂脅脇脊脚脹腎腐  
 腦腫腺膏膚膜膝膨膺胆(膽)  
 膿臆臆  
 【自部】 臭



〔白部〕 白  
 〔舟部〕 舵舶舫艇  
 〔艮部〕 艱  
 〔艸部〕 芋芝芥芳苑苔荀茂  
 茨茸莊莖莫菌華菱萌萎萩葦  
 葬蒐蒔蒙蒸蒼蓋蓮蔓蔭蔽蕩  
 薤薦薨薪薯蕷藉藍藤藩藻蘭  
 〔疋部〕 虎虐虛虜虞  
 〔虫部〕 虹蚊蛇蛋蛙蛾蜂蜜  
 蝕蝶融螢蟬蠨蠅  
 〔行部〕 街衝衝  
 〔衣部〕 衷袂袖袴袷裂裔裕  
 裝裳裸裾複褐袷襟襲  
 〔西部〕 覆霸

〔角部〕 觸  
 〔言部〕 訂計訊討託訟訴診詐  
 詞詠詢詣詭詮詰該詳誇誌誕  
 誘誠誦誰誼請諒諫諷諭諮  
 諾謀謁謂謄謙謠謬譜譯讓讚  
 〔豕部〕 豚豪  
 〔彡部〕 貌  
 〔貝部〕 貢販食貼賈賂賄賕  
 賑賓賜賂賤賦賄賴購贈  
 〔赤部〕 赦赫  
 〔走部〕 赴超趨  
 〔足部〕 跡跳踊踏踐蹄躡躡  
 躍  
 〔身部〕 躬

〔車部〕 軌軒軟軸較載輔輻  
 輜輝輦輦輶輻輿輶轟  
 〔辰部〕 辰  
 〔辵部〕 迂迄迅迦迫迭逃透  
 逐逝逢逮逸逼遁遂遇遍遙遜  
 遞遡遣遭遮遲遵遷遺遼邁還  
 〔邑部〕 邑那邦邪邱郊郎  
 〔酉部〕 酌酢酬酷酸醇醉醒  
 醜醬釀釀  
 〔采部〕 采釋  
 〔金部〕 釘鈞鈍鈴銑銓銘銳  
 鋒鋪鋌鏞錐錠錙錫錮錯鍊鍛  
 鑄鑄鑄鑄鑄鑄鑄鑄鑄鑄鑄  
 〔門部〕 閨閑閼閼閼

〔阜部〕 阜阪阻阿陀附陞陣  
 陪陳陶陷隅隆隔隙隨隱  
 〔隶部〕 隸  
 〔隹部〕 隻雁雅雇雌雖雙雛  
 〔雨部〕 零霈霜霞霧靈  
 〔非部〕 靡  
 〔革部〕 鞍  
 〔音部〕 韻  
 〔頁部〕 頁頃須頌頌頌頌頌  
 領頸頰頻顛頤頤

〔風部〕 颯  
 〔飛部〕 翻  
 〔食部〕 飢飴餉飽飾餅餌餐  
 餓饑饗  
 〔馬部〕 馱馳馴駁駐駒駕駿  
 騎騰騷驅驕驚  
 〔骨部〕 骸髓  
 〔門部〕 闕  
 〔鬼部〕 鬼魅魔  
 〔魚部〕 鮎鮎鮎鮎鮎鮎鮎鮎

〔鳥部〕 鳳鴨鴉鴉鴉鴉鴉  
 〔鹵部〕 鹵鹵  
 〔鹿部〕 鹿麓麗  
 〔麥部〕 麴麴  
 〔黑部〕 默黨  
 〔鼓部〕 鼓  
 〔鼠部〕 鼠  
 〔齊部〕 齊齋  
 〔齒部〕 齡  
 〔龍部〕 龍

### 三 短文の作り方

よく語句を用ひて短文を作る問題があるが、この問題に對する皆の考へねばならぬことは語



句を使つて作つた短文の意味が、誰れが讀んでもはつきりわかる様に書くこと。

短文であつても文章の主體になる語句とこれを働かせる語句が揃はなければならぬ。

例へば昭和十六年度の試験で「候へども」といふ語句を使つた短文でよくあつた答解は

お送り申上候品僅かに候へども

といふ様に尾の切れてしまつて文章をなさないものが非常に多い。即ち

お送り申上候品僅かに候へども御受納下され度候

と書けば短くとも完全な文章をなしてゐるのである。

#### 四 文章の訂正

##### (1) 文章の誤りを正しくなほす問題

よく假名の送り方が間違つてゐる問題が出るが、これはよく先生のお話しをきいてゐたり又本を讀むときよく注意して讀んだり、自分達の方言の缺點等を頭の中に入れて勉強することが大事である。地方言葉(方言)のひどいところの人は例年出來が悪い様に思ふ。

##### (2) 文章を書き改める問題

よくあるのは口語體を文語體に書き改めるのであるが、これを見て居ると受験者は相當苦心してゐる様である。

大概書きなほしてほしい場所には線を引いてあつたりしてあるのであるが、受験者は傍線の引いてないところの文字まで書きなほしてゐるものが多い。

例へば昭和十六年度の試験で

起きるのは

といふのを、ことさらに

起床するは

といふ風に書いたものがさらにある。これは傍線を引いた場所即きを何か文語體になほせばよいのである。

起くるのは

とすればよいのである。



## 第三章 國史

### 一 國史の眞髓

國史は誰れも御存じの様に皇國の歴史的使命といふものはどんなものであるかといふことを習ひ且自分のものとする國民科の一課目である。

初等科の間は肇國の宏遠、皇統の無窮、歴代天皇の鴻業、忠良賢哲の事蹟、學國奉公の史實等について我が大日本帝國が今日の様に發展して來た跡を勉強し、高等科に入つてからは初等科で習つたことを更にくはしく國運の隆昌、文化の發展が國をはじめむる時の精神のあらわれであるといふことをよく納得し、諸外國との歴史的關係を明らかにして來た筈である。即ち諸君が國史の勉強をするときはこの主義に立脚して一字一句を味ひながら皇國青少年として世界に冠たる國體の尊嚴と、この國に生れたる喜びを如何にして獻身御奉公の誠をつくすべきかといふことを考へつゝやるときは、何等むづかしい事ではなからう。

### 二 失敗しやすいこと

例年受験者の失敗しやすいことについて二三述べて見よう。

よく時代を順を追つて覚えて置く必要がある。受験者の中には時代が十年後のことが先きにあつた様に書いたり、その時代は帝政ロシアであつたのに現在の「ソビエツト」聯邦の名稱を書いたりしてあるものが多い。

又一事件を書くのにその原因と結果を混同したり、外の事件の原因や結果を混同したりして受験者の準備の不十分さがあり／＼とうかゞわれる。

## 第四章 算數

### 一 算數の眞髓

數、量、形に關し國民生活に須要なる普通の知識技能を習ひ初等科に於て日常普通の知識及



之に對して處置する方法を高等科に於てその程度を進め産業、經濟、國防等に關し須要なる數理的事項について強く教育を受けて來たのである。即ちこれからの算數の勉強は單に數をかぞへたりよせたり引いたりするだけではいけない。實際生活に關連性をもたせ實際にものを計つてその重さや面積等を出したり、理科の時習つた事を數理的に計算して出すといふ様になり又圖面を引いて出すといふ様に變化否進歩せる問題が出される傾向となつたのであらう。

## 二 失敗しやすいこと

例年の受験者の缺點は、切角問題をとこうとするその方法はよいけれども、計算をまちがへるものが多い。

又字を読みちがへるのか、かんちがいするのか例へば弧と弦を間違へてとんでもない失敗をした者もある。

次に計算をどんな経路をたどつてやつたかをはつきり答解として出さねばならぬのであるがこれが書かれてないもの、又計算が誤つてゐるものが少くない。

圖を書く問題では、陰になるところの書き現はし方立體を如何にして表はすかといふことに相當な苦心がある様である。

## 第五章 理科

### 一 理科の眞髓

理科は自分達の周圍で目につき、手にさはる自然の物及現象、その相互竝に人生との關係、人體生理及自然のいろ／＼な法則から産業、國防、災害防止、家事等に關し直接自然に學んで行くべき學科であり従つて問題も自然日常生活に縁の近いものが出されるのであらう。

### 二 失敗しやすいこと

例年受験者の成績は、各學科の中でこの理科の成績が最も悪い。



中には問題が何をきいてゐるのかといふことをよく考へずに書いてしまつたものや、電氣の問題等では十と一とを混同するものが多い。特に圖を書いて説明する問題が多いのであるが、細心の注意をはらつて勉強するとき、よく頭に入れて置く必要がある。

答解出来ないものの中には時々採點官を苦笑させるのがある。

「答解不能なるも採用せられたる上は陸軍戦車界の爲一大發明を爲し、國軍の爲大いに貢献すべし」

なか／＼その熱のあるところは推察出来るが、これでは理科の答解としては點數がつけられない。

以上各課目について根本の勉強法について述べたが、よくこの内容を何遍も何遍も味つて、教科書をしっかりと勉強し、來るべき試験に於て、餘裕綽々として見事合格される様切に祈つてやまぬ。

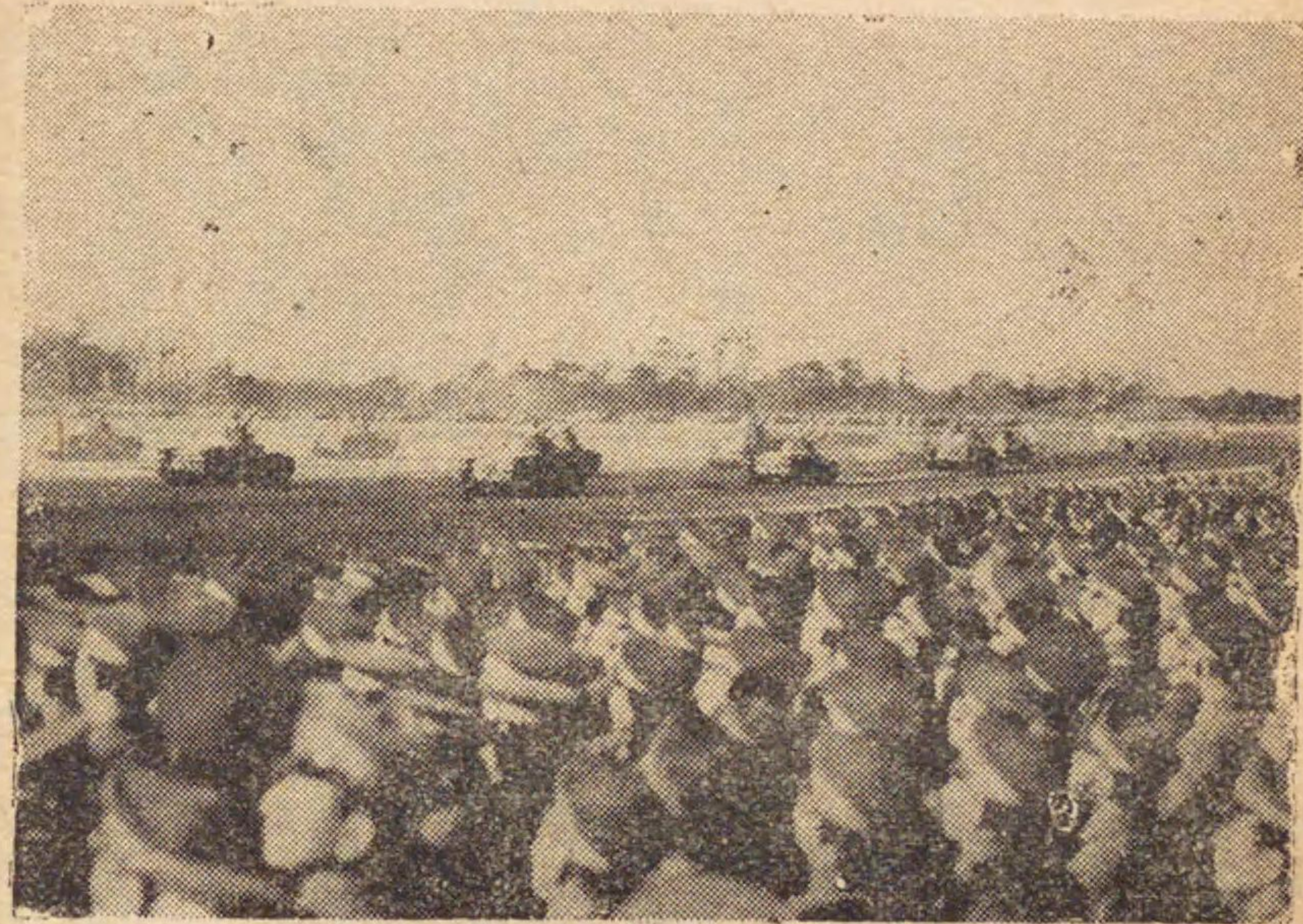
昭和十四年度以降の試験問題と模範答解を附してあるから之により、更に必勝の信念を養へ度い。

む す び

戦車隊の歌

- 一、大地搖がし砂塵上げ  
疾風迅雷醜敵を  
燦たり我等戦車隊  
無敵戦車の征くところ  
奇襲急襲撃滅す
- 二、鬼神さながら火焰吐き  
十字砲火の只中に  
燦たり我等戦車隊  
怒號天地にこだまする  
率先開拓く突撃路
- 三、鐵軌唸りて轟々と  
突進驍進將た挺進  
燦たり我等戦車隊  
雲霞の如き敵中に  
死命を制す追撃戦
- 四、萬雷轟く機關の音  
堅き團結搖ぎなく  
燦たり我等戦車隊  
鐵壁相摩す機甲戦  
猛撃反轉粉碎す
- 五、威風堂々聖旨を受け  
大和魂華咲きて  
燦たり我等戦車隊  
無敵戦車の征く所  
勝利の譽我れに在り





第三十二圖 御馬前を驀進する少年戦車兵(陸軍省検閲済)

世界列強は日新月歩の科學の研究と相俟つてその粹を集めたる第一線兵器は戰鬪を重ねるに従ひ世人を驚嘆せしめつゝある。

地上軍の華戦車部隊はますく爆發的擴張の一途をたどりつゝあり來るべき作戰に於ては必ずや渺々たる大草原を蔽ふて驀進する敵大機甲兵團と緒戦に於て鎬を削らねばならぬ。この緒戦たるや國家の盛衰の分れるところであり、一旦敵大機甲兵團を我戦線内に入れるや、全戰場は蜂の巢をつゝいた以上のものがあらう。然し之に對抗すべき手段はなく敵の無限軌道の蹂躪をほしいまゝにさせねばならぬ。思ふただけでもこの必ず起り得べき大機甲兵團に對して、數は少くとも我が三千年來傳統の日本精神と戦車

魂をもつて鐵猛獅子とともに、敵の急所を襲ひ、敵をして完膚なきまでに地面に叩きつけなければならぬ。

皇國肇國以來の國難に對して、一億國民のますく一致團結せるは、我日本人の世界人のまねることの出來ない精華である。

この一億の總決意を一身に背負つて、緒戦に於て正義の劍をふりかざし縦横無盡に駈散らすことの何たる痛快ぞ。

このたのむべきは熱血たぎる青少年にあるのだ。

今や大東亞戰爭を完遂し、八紘一宇の大理想を顯現せんが爲には、益々多くの優秀なる機甲部隊幹部を作ることが刻下の急務であつて、日夜聖諭を奉體し文武の道に精進する少年戦車兵こそ國軍の華、戦車隊活動の根源とも云ふべく前途誠に洋々たるものがある。

盡忠報國の念眉宇に溢れ炎熱酷暑を克服し、汗に塗れ油に汚れて只 大君の御馬前に轟々と驀進する我が少年戦車兵の凛々しい姿こそ、眞摯明朗、希望に充ちくた皇國青少年の進むべき途ではなからうか。



附録  
機甲軍備發達の歴史



## 第一章 昔の戦車

戦車といふことは外國の歴史を繙いても、支那や我國のそれにもよく見受けられるのであつて外國では三千年の昔より戦場に現はれてその猛威を逞くして居り支那でも戦車の數を以てお互兵力の多い少いのはかりとされ、強い將軍はたくさんの戦車を連れて敵國に攻め入つた。又我が國でも加藤清正が朝鮮征伐の際に龜甲車といふものを作つて、朝鮮の軍隊をさんくこらしめたといふことは既に御承知の方もあると思ふ。

然しこれ等の戦車といふものは即ちたかふ車であつて種々雑多な格好をして或はこれを人が押したり、馬が中に入つて引つ張つたりしてゐたものであつて、弓矢の時代の戦争にはこれでも隨所に於て威光を示したものであろう。だん／＼と世の中が進歩し蒸氣機關といふものをスチムソンが發明したことが、全世界の産業大改革を斷行した。その時代時代に於ける最も進歩した科學の粹を集めたものが、即ち戦場の武器であるといふことはいつの世になつても變ら

ない事實であつて蒸氣機關の發明は戦場兵器を逐次更新して來たのである。  
蒸氣機關の發明は或は汽車、汽船、自動車等といふ形として現はれ、之等が軍隊軍需品の輸送に戦場の移動に非常な能力を發揮する様になつて、それまで大地をしつかりふみつけて歩いてのみゐた時代の戦争のやり方では、到底敵をして我が軍門に降らしめる事は不可能になつて戦争のやり方や兵器も自然進歩一途をたどつて來た。

## 第二章 戦場支配者のうつりかわり

(近代戦車誕生迄)

戦場は弓矢の時代から火薬の發明によつて鐵砲が世人の目を驚かし、軍隊にまたたくまに擴がり、日露戦争の初期はこの鐵砲の戦争であり、これにいくらか大砲が加つた。

鐵砲や大砲の彈丸がうなりをたて、飛んで來る様になると、今迄の重たい甲冑はたゞ運動を妨害するだけの效能しなくなつた。

鐵甲に代つて或は散兵壕が掘られ、鐵條網が作られ、もぐらの様にだん／＼と地下にもぐつ



て来て、陣地が堅固になつた。

地下に潜つた敵をたゞきつける爲には、小銃では如何ともすることが出なくなつたのであらゆる大砲が雨後の筍の様にふえて日露戦争の大部分は戰場を支配するものは砲兵なりと云はれるまでになり、彼我兩軍は數限りない莫大な砲彈を敵に見舞ひ、二〇三高地攻撃にあたりてその山型改まつたといふ位にまでなつたことはよく私共のきかされたことであり、今だにこの戦跡を訪ねる者がひとしく當時の砲兵戦のすごさをまざくと見せつけられるのである。

日露戦争の終り頃には敵にはパンくくとひつきりなしに續いてうち出される、まだ見たこともきいたことすらない珍しい新兵器が現はれ、戦友が次から次へ、折重なつて滿洲の地に紅に染めたのであつたが、何といつてもこの日露戦争に勝つたのは砲兵様々であるといふ感じがする。

當時世界第一陸軍國露西亞を名もまだよく知られないちつぽけな日本がたたきつけて降参させたといふ事、これは世界中どここの國を探して歩いて日露戦争の最初から日本が勝つだらうと夢にも思つてくれたものはなかつた。世界の國々はおるか當時の我國民は、朝野を擧げてひとしくこの戦争に勝目のないといふことを信じてゐたのであつて、滿洲軍總司令官大山元帥を

して「今度の戦争はどんなに考へてもその勝目は敵が六分で日本は四分だ」

然し肇國以來外敵のあなどりを受けたことのない立派なこの世界に冠たる歴史をきずつけない爲に「何とかして五分五分にしたい。」と、言はれたといふことであるが、この國難にあつた國民の國に殉ずる覺悟は遂に世界の豫想を裏切つて奉天城頭高く日章旗をひるがへさしたのであるから、世界の者特に軍事界の人々が競つて日本の眞の底力の研究にとりかゝり、三千年來傳達の日本精神と砲兵威力發揮とを以て戦捷の原因と極言するに至り、世界列強も之に習つて大砲兵軍の編成に餘念なかつたのである。

列強が大砲兵戦の訓練酣なりし頃、あの第一次歐洲大戦は火蓋を切つて落され、砲兵は至るところ戰場の王座を占むるに至つた。

然し機關銃がだんく出てくるに従つて大砲兵の威力も次第にあやしくなつた。

西曆一九一六年秋英國軍はソナム河畔に於てこれまでに類を見ない様な何千門の砲兵を陣地につけて、數日間莫大の砲彈をうちつけて獨軍陣地は砲彈の爲に形をかへてしまひ一木一草皆ふつ飛んでしまふ位に徹底的に砲撃をした。もうこれで如何に頑強に獨逸兵ががんばらうとしても駄目だろう、敵陣地は一發の銃砲聲もしなくなつた、おそらく今度のこの砲撃に全滅し



ただらう。歩兵は無人の境を進む様に進軍が出来ると考へて總攻撃が開始された。果して英軍の作戦はうまく行つたらうか……。居ない筈の獨逸兵はあちらにもこちらにも現はれて機關銃がタツタツタツ……とうなり出し安心してゐた英國軍はさん／＼な目にあつてしまつた。

この時の英軍の損失たるや誠に同情したくもきれない位である。

大砲兵萬能を旗じるしとして進んで軍隊の編制や裝備をしてゐた當時の大なるあやまちを發見し、戦場の王座はこの機關銃にうばわれてしまつた。

彼我共に銃砲火力を發揚することに就て熱中し又之の對應の術をねらなければならなくなつた。即ち戦闘員は敵の火力が物を言つてゐる間は皆散兵壕を掘つて生命を全うせねばならなくなり、次第に陣地は壕や散兵壕や鐵條網が作られ築城の研究が長足の進歩を促した。どの陣地も西曆一九一四年一五年頃用ひられてゐた様な肉弾突撃戦法はたゞ尊い戦闘員の死屍を累々と敵前に積み上げるだけの事しか出来なくなつたので、全戦線は殆んど對陣の有様に代つて何日たつても何月たつても戦場の變化がなく、即ちよく云はれる戦闘交綏状態に入つてしまつて次第に戦闘員が戦闘に飽きて來る氣配が生じて來た。

各國は前に述べた様な状態ではいたづらに戦争が長びくだけで、一日延びれば延びる程これに必要な軍資金は誠に莫大なものである。一日も早く敵を制壓し勝鬨を挙げ様とする心にかわりはない。

全國民が全智全能を絞つて敵に一步たりとも勝れた兵器を出して敵陣地を破ろうと考へる戦争はその必要性からして、あらゆる方面に於て科學の進歩を促しこれらの粹を集めて兵器としたのである。蒸氣機關に代つて「ガソリン」を使ふガソリン機關が發明され、自動車をはじめいろ／＼の新兵器が戦場に飛出して來た。

然しまだ／＼あの雨霰の様に飛び來る敵彈を處理して進み得る何物もない。

敵に勝たんが爲にはどうしても敵彈を受けても平氣、鐵條網も平氣、壕も飛び越える何物かが出なければこの延々とたゞ延びるにまかした對陣、眠つてしまつた戦線を揺り動かすことは出来ない。



## 第三章 近代戦車の誕生

### 第一 發明家は氣狂ひなり

第一次歐洲大戰の數年前に、英國フツチンガムのある鉛職工が、装甲を施し原野をかけまわることの出来る機械の設計書を、英國の陸軍省に提出した。然し大戰後、陸軍省書類棚の一隅からこの設計書が見出されたが、それには「立案者は狂人なり」と符箋がつけられた上、ほこりのつむにまかせてあつた。

この立案者は氣違であつたらうか……。

第一次歐洲大戰はじまつて戦線がこうすい状態になつてはじめて、何か新しい兵器を必要と考へる様になつた多ぜいの人々と比較して……あまり頭がよすぎるのもよしわるしだ……。

又一九一二年には、奥太利ブリスチン中佐は戦車を考案して特許を得たが、未だ廣く軍事上に應用されることなしに歐洲大戰がはじまつた。

### 第二 魅力は惡魔の様な登攀能力

非凡な先見の明と、絶大な想像力との持主であつた英國のスウイントン中佐は第一次歐洲大戰初期、英軍に従軍して政府の軍事通報員の職務に服した。だが、一九一四年十月、西方戰場が陣地戦に陥るや鐵條網や塹壕を突破し、且特に猛威を逞うしてゐる機關銃を破壊する爲にはどうしても装甲をかぶつた彈丸の通らない機械が必要だといふ結論を下した。

心眼の鋭いスウイントン中佐は既に大戰の勃發前から、敵の思ひがけないところをつかうする方法に就て深刻な研究を續けてゐたので、一人の友人から米國のホルト牽引車に就て「惡魔の様な攀登能力を持つ米國牽引車」といふ様な意味の手紙を貰つたことがあつたのを思ひ出し、「軟かい地面をめり込まずに重たい機械が行くのはこれだ、壕を突破するのはこれだ」と思はず膝をたゞいて、一九一六年の十月二十四日、陸軍省へ裝軌式機關銃破壊車の製作設計を提出した。

これは車に厚い装甲を施しその上に大砲と機關銃とを載せ、どんな地形でも突破し、鐵條網



を踏み潰し又壕を跳び越え様と云ふのであつた。

この著想から纏て戦車が生れて來たのである、十五箇月の後には之が具體化されて本物の戦車になつたのだが、こゝまでこぎつけるまでに、中央部ではいろいろないざござがあつた。

尙大部分の者がタンクの元祖は英國であると思ひ込んでゐるものが多いが、丁度時を同うして佛國でも第一次歐洲大戰開始後間もなくエステイヌ將軍は戦車の必要を當局に建言し英國でそれが出來上る頃には、佛國でもサンシヤモンなどの戦車が出來てゐたともいひ、更にその用法に就ても英佛互に協定し、某數量を整備するまでは兩國共に使用せず、これを極秘にして置き、所望の時機に一舉に戦場に押し出して勝を制さうとの約束をしたのであつたのに、英國側は自己の戦況の苦しさに耐へ兼ねたか、それとも自己一人發明者の誇りを獨占せんと思つたか佛國側を出し抜いて一九一六年（大正五年）突如として戦場に怪物の姿を現はさしめたのだとも云はれてゐる。かうなると紳士國などといふものも、サツパリ當てにはならない。

ともかくも、本場と元祖の争奪はこの邊で止めあとは讀者の判斷にまかすこととしよう。

### 第三 タンクの名稱の由來

新しい兵器を造り出して敵の思ひがけない作戦をやる爲にはこれを徹底的に秘密としなければならぬ。これがためにあらゆる手段が講じられつゝあるのであるが、この時は戦争に使ふ車ではないといふことに一般の人々をだまして置くことが一番手近なやり方であり、之が爲度戦車を造る時の工程が水槽に似てゐるところから、これは水を運ぶ車即ち運水車と呼ぶことにしようとしたところ、一つの問題が持ち上つた。

一體英國の官廳では、委員會等の名稱は、その頭文字で呼ぶ習慣であつた。いよく運水車 Water Carrier とすることになると、委員會は W・C 委員會と略稱することになるのだが、W・C は皆さん御感じになりました様に當時の人々もこれぢや一寸おかしいぢやないかといふ話が出たので結局 Water Carrier を Tank Supply（水槽供給）委員會と呼ぶことにした。これが今日世界中で戦車をタンクと呼ぶ様になつた原因である。

今一つは工場での秘密を更に嚴にする爲に

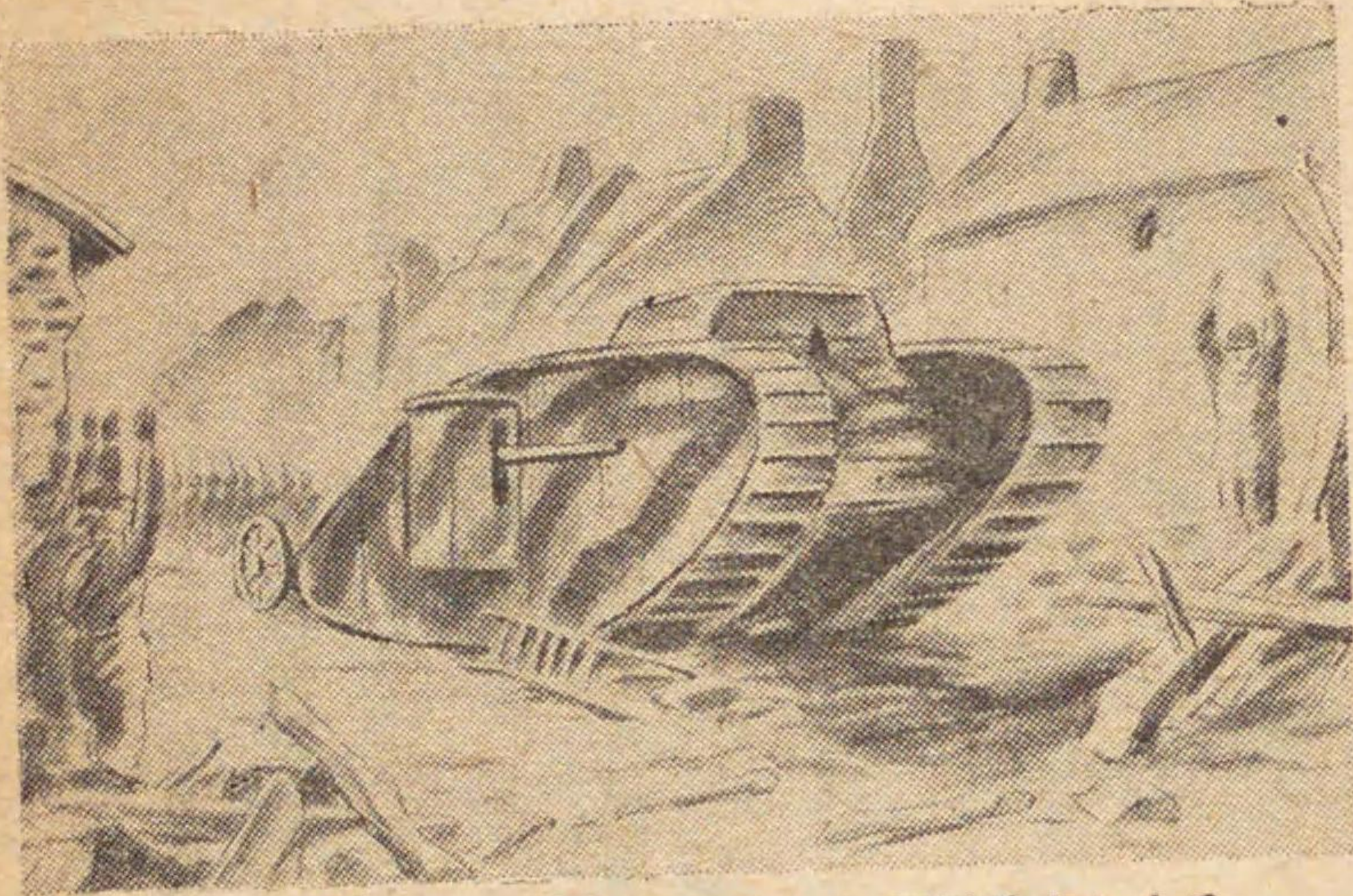


「これは「ロシア」から注文を受けた水槽車だ」と説明し、戦車の側面に「取扱注意、ペトログラード行き」などと白ペンキで書き立て「ロシア人て奴、變なものを造る奴だ」と見物人を笑はせたといふ話もあつたと聞く。單に戦車を秘密にするといふのみでなく、この戦車に備付けらるべき五十七耗砲や、重機關銃の操縦者を教育する上にさへ、秘密を保つやうに苦心したことは、さすがにえらかつた。

## 第四章 戦車の盛衰記

### 第一 戦車の初陣

側面から見ると、角に丸みを持つた菱形であつて、後端の下方には、周囲を深い鋸形に刻まれた起動輪があつて、この齒形が無限軌道の履板を引かけて、軌道を回轉させる前方上端には誘導輪があつて、車體の下面から廻つて來る無限軌道が、この誘導輪に懸つてグル／＼車體の



第三十三圖 フレール村に突入した英軍戦車と歩兵  
最初は戦車には圖の様に尾輪がついてゐた

周囲を廻つて行く。車體の下面と無限軌道との間には轉輪があつて、無限軌道の上に廻轉してゐる。なほ車體の兩側には長出砲塔があつて、五十七耗砲が一門づゝと機關銃が据えつけられてゐる。併しこれは雄型で雌型の方は砲塔が小さく、砲が機關銃に代へてある。結局雄型は五十七耗砲二門と機關銃四、雌型は機關銃六といふ武裝である。無限軌道は左右共に九十枚の履板から出來てゐて車體の周囲をグル／＼廻るが、實際は無限軌道が地面の上を進んで行くのではなく、戦車は自分で軌道を敷設してその上を進み、また自分でこれをおさめて行くのである。大きさは長さ約八米、高さ約二米五〇、雄型の幅



は四米、重さが二十八噸。雌型は幅三米で重さ二十七噸。速度は毎分平らな地面では九〇乃至一〇〇米、行動半径が二十四軒と註されてゐる。これが最初の怪物の姿であつた。

かくして製造しはじめてから以來七ヶ月、長い月日を秘密と武者振の裡に過ごして來たタンクが前歐洲大戰第五年目西曆一九一六年九月十五日五時三十分。英軍は僅かに戦車四十九輛（但し戦闘に参加せしものは三十二輛）が西方戰場アミアン北方、ソナム河畔フレール附近に於て勇躍戦闘に参加し、對陣になれて眠つてゐた戦線に驚愕をひき起させ、檻を破つた猛獸の様に活躍した。その一輛の如きは塹壕の後方に進出して三百人の捕虜を得た。然し當時に於ては歩兵の活路を擴きつゝ前方に進んだのは僅かに九輛のみであつた。

戦車の初陣を見た獨逸の一從軍記者は觀戰記の一節に、

「獨逸兵は腰を抜かしたかの様に、唯目をきよろ／＼と光らせるばかりであつた。巨大な怪物は或は跳るが如く或は揺るゝが如くしながら前進を續け、著々として獨逸軍に迫つて來た。今迄誰れも全然見た事もきいた事もない變なものが目前に現はれてどんなことをしても一向この怪物の動作はかわらない。縦ひどんなものをもつて行つてもどんなに射撃しても之をくひとめる事は出來ない。第一線の塹壕内にゐた一人の兵が之を見て「惡魔がやつて來た」と言つたが

此の言葉は實に當時の獨逸兵の驚きぶりを現はしたものであつて、この言葉は丁度枯野原に火を放つた様に次から次へとひろまつて遂に全戦線に擴がつてしまつた。

### 第二 一戦車を以て三百七十名の捕虜獲得

一九一六年九月二十六日英軍ストレー少尉のD十四號戦車は僅か一時間間に八名の乗員のみをもつて、長さ千五百米の塹壕を占領して敵に大打撃を與へ、且三百七十名（内將校八名）の捕虜を得たのであるが、これは歩兵一旅團を以て難戦苦闘三百の犠牲者を出さなければ出來ない事であると云はれた。

### 第三 戦車の一師團は歩兵の十師團に匹敵す

戦車の活躍に非常な感銘を受けた、英軍司令官ヘイグ元帥は、即時戦車一千輛を造るやう註文した。そして炯眼のヘイグ元帥は、一九一七年四月二十四日、戦車製造の衝に當つてゐたス



タイン大佐に次の様に語つた。

「戦車一師團は歩兵十師團に値する、偉大なる生命救助者なる點に於て戦車は飛行機に次ぐ重要兵科である。」

#### 第四 狀況急變——一千輛の註文取消

ヘイグ元帥の一千輛の註文が、一千二百五十輛に増加せられ、大藏省の承認を得て戦車製造工場が新設せられて、愈々戦車工場が動き出した時、突如全作業の停止と云ふ途方もない命令が下つた。是は一九一六年十月十日に陸軍參議院が註文を取消した爲であつた。

戦車委員会にとつては、實に晴天の霹靂で、早速ロイド・デョーデ陸相に懇願して復活したが、戦車の創始者スウイントン大佐は國防委員に左遷せられた。

#### 第五 イイプル第三會戰に於ける戦車の悲劇

一九一七年七月三十一日より十月に至り行はれた、イイプル附近の第三回目の會戰に於て、戦況が苦しくなつてくると、

「戦車来て呉れ」

「戦車に頼め」

とソナムの初陣に於ける戦車の或程度の成績を知つてゐる者は水に溺るゝものが藁をもつかむといつた様に、非常に機關の調子が悪く故障續發し、然も速度が遅い爲に敵の砲兵の好い餌になつてしまつた戦車にそらだのみをする様になつた。

従つてその使ひ方も地形の通り易いか否かといふことも考へることなく、使ひまわしたものであるから、幾分改良せられたとはいへ、此の會戰には功績よりも失敗が多く、然も大雨の後で泥沼のやうになつた彈痕地帯へ戦車を追ひ込んで、百九十輛の戦車を鮒と一緒にしてしまつたといふやうな、寧ろ喜劇に近い悲劇が演ぜられ友軍からは、

「戦車の後には立たない。見る、あの泥んこの中に到るところ立往生してゐる醜體を！」  
などゝ悪口をいはれ又

「戦車は無用の長物である。少々地形が悪いと直ぐに行動が不能になるが、一體戰場が泥田の



やうになるのは、極くありふれた事なのだから、其處で行動力を失ふやうなものは、戦闘の役にたかない」

との聲が高まつて、英本國に於ても戦車の鼎の輕重が問はれ、十月十一日にはウインストン・チャーチル軍需相は戦車製造主任のスターン大佐に次の様に語つたことがある。

「徒らに第一線に無益の戦車を集め、巨額國費を濫費した。設計は全然失敗であり、何等進歩の跡も認められない。陸軍省に於ける機械化戦に對する期待は全くはずれ、之を放棄するに決した。」

これ等は寧ろ戦車が悪いのではなく、大部分はこれを使つた人の使ひ方が悪いのと、各兵種が戦車と力を協せて一塊になつて戦車のとつた敵陣を直ちに歩兵が利用しやうとする様なことをしなかつたのに原因するものであるけれども、人はとかく罪を物になすりつけたがる悪い癖があつて、戦車もこの戦闘で全く受難の時代に入つてしまつた。

その後、若干日にして一九一八年の爲に準備した四千輛の製作計畫は、千三百五十輛に切下げらるゝことになつた。

スターン大佐は、直ちに參謀總長に切下げ計畫の時宜に適應しないことを進言したが、其の翌日、スターン大佐は突如として現職を免ぜられ、佛米に於ける戦車研究に關する新職務に左遷せられ、後釜にはまだ一度も戦車を見たこともない一海軍將官が任ぜられた。

## 第六 戦車最初の大成功作戦カンブレー戦車戦

かうした受難の時代が一九一六年から一七年とつゞいたが英國の戦車關係者は、この苦難時代をよく耐へ忍んだ。絶えず戦車運用の研究をつゞけ、その改善に努め、内外の非難を物ともせず名譽恢復の準備をつゞけて、一七年十一月に入つたのであつた。

前歐洲大戦第四年目の一九一七年十一月二十日六時總數四百七十六輛の一大戦車艦隊はカムブレー附近英軍陣地の線の前方に進出し、蜿蜒約十軒に互る正面に鐵壁の陣を布いた。

戦車司令官ヒュー・エルス少將の搭乗せる戦車は、戦車の隊列を離れること前方百五十米に歩兵部隊は戦車の後方、鐵條網の隙間に位置した。

この攻撃のやり方は今迄のやり方とは違つて、戦車を戦車の動き易い地形に集團使用し、敵を急襲することにあつた。



本會戰ではいつも攻撃の前には砲兵が攻撃準備射撃を行ふのであるが、この時は戦車部隊の動き出す前には、これ等の砲射撃等一際をやらす、その反面あらゆる準備と輸送とは、周到な注意をもつて偽装せられ然もこれをなす時間を時間的に極度に短縮せられた。

カンブリーの戦がかくして開かれた、この方面の陣地は、いはゆるヒンデンブルグ線中の強固なもので、三線から成り、その鐵條網を破壊するだけでも英軍の砲兵が數週間の日子と數千萬噸の鐵量を要するであろうといふ堅固なものであつた。がこれを戦車の大集團を以て急速に突破しやうといふのである。

戦車の行動開始直前に短時間猛烈なる射撃の後、戦車の攻撃が歩兵の攻撃と同時に全攻撃正面に亘つて行はれた。

この時戦車と歩兵の前進は榴霰弾と煙弾を混用して彈幕射撃に掩護された。こういふ攻撃方法は當時の様に戦車の速度が一時間三乃至四軒といふ遅い速度しか出ない時には絶対に可能であり又必要な事であつた。

そうしてこの攻撃によつて占領した成果を早速利用する爲に五師團より成る騎兵軍團が後方に待ちかまへてゐた。この時の戦車司令官エルス少將は齡未だ不惑に達せず元氣頗る旺盛未曾

有の大戦車艦隊を指揮するに方つては海軍式の陣頭式を採用したのみでなく、其の搭乗せる戦車には戦車團旗をへんぼんとひるがへした。

此の旗は、此の年八月カツセルに於て制定せられたもので大地即ち泥土を表はす褐色、血即ち闘志を表はす赤色、原野即ち運動を表はす緑色の三色旗であつて、泥と血に塗れながら猛烈な闘志を以て綠滴る平原へ突破進出しようとする戦車團の大望を表徴したものである。

此の日酷烈な寒氣、七時半が日の出である。戦車の乗務員にはラム酒が供せられた。

エルス將軍の搭乗する戦車を中心に午前六時十分、黎明の中を前進に移り、一千門の英軍砲兵が戦車の前方一八〇米に在る獨逸軍陣地へ榴霰弾と發煙弾との百雷を轟かせた。

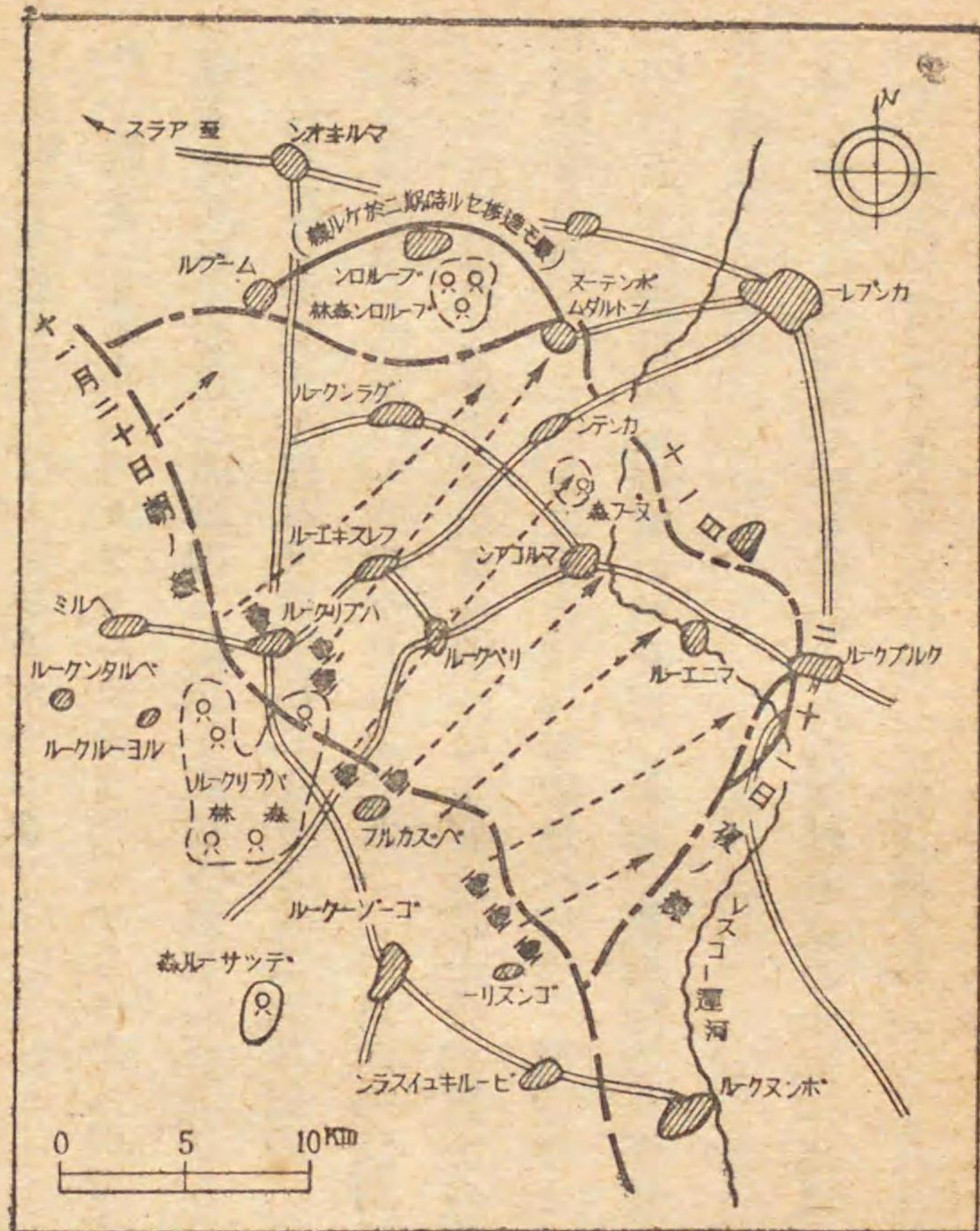
頭の上では飛行機が獨軍の司令部や本部、砲兵陣地目かけて爆撃を始める。正にこれ空前の大立體戰である。

驚いたのは獨逸軍で煙や霧の中から突然戦車の大群が現はれたこととて、周章狼狽なすところを知らず、武器も装具も投げ出して逃げ始めた。

戦車は益々進む。第一線、第二線、遂に見事に第三線を越えた。

併し決して無人の境を行くのではない。砲弾が命中して火災を起すものもある。機械の故障





第三十四圖 カンブレ附近戦闘經過圖

で動けなくなるものもある。

獨逸軍も一時はあわてたけれども、擱坐戦車を見ると引返して之を包圍し屋根の上にまで上つて来て、これを鹵獲しようとする。

ある戦車長は包圍を受けて手の下しようがなかつたが、急に名案が浮んで戦車の輪乗りを始めた。それに驚いて、飯についた蠅が飛び立つ様ににげるところを大部分は踏みつぶされた

いふ痛快な話もある。

中でも金鶏勳章にあたひする目覺しい戦闘をやつたのは獨逸軍の一砲兵將校で、英軍の左翼(左りはし)方面の戦車が斜面の一番高いところへ顔を出すのを待ち受けて、片腕で操作する僅か一門の野砲を以て、近距離から直射し、またたくまに十六臺の戦車を擱坐させた。

戦は夕方になつてその午後四時までに、戦車團の攻撃は偉大なる成果をおさめて終を告げた。十時間の間に英軍歩兵はその正面十二軒に互つて縦深約九軒の前進をすることが出来た。捕虜約八千、大砲約百門の外多數の倉庫、酒保、野戦郵便局、病院及映畫館等を手に入れることが出来た。而もこれに對して英軍の損害は僅か千五百名を越えなかつた。

戦車の参加しなかつたイイプルの第三會戦に於ては、略々同一程度の戦線進出に對して三箇月の日子と四十萬の犠牲を拂つたのである。大捷の報を傳へ聞いた英本國に於ては、大騒となり教會といふ教會は皆鐘を鳴らして勝利を祝福し、頑迷な將軍達も遂に眼を醒ますに至つた。なほこの戦に参加した戦車隊の兵力は將校六百九十名、下士官以下三千五百名、計約四千人であつて、正に英軍の歩兵約一旅團に匹敵して居る。一九一六年九月ソンム戰場に現出して以來、なほとやくの議論のたへなかつた戦車も、こゝに初めて彼我兩軍に明確にその偉大なる



戦闘力を認識させ、且つその戦車戦法にも大きな教訓を與へたのである。  
この點に於てカンプレーの會戦は、私共には忘れてはならぬものとなつた。

## 第七 アミアン附近の會戦及其の後に於ける 英軍戦車の活躍

### 一、總數約七百輛の參加

第一次歐洲大戰第五年目の一九一八年八月八日四時二十分、ローリソン將軍の指揮する英第四軍はアミアン附近約十八軒の正面に互り攻勢を開始した。其の後方森林内に待機せる約四百二十輛の戦車は出發合圖の號笛が鳴ると羅針儀の針に方向を托しながら、濃霧を衝いて猛然と前進を開始した。  
砲兵の誘導彈幕射撃の射程は十五分毎に逐次前方に推進される。戦車は彈幕の後方約二百米に在つて躍進し、戦車の後方には英本國兵、加奈陀兵及濠洲兵が疎開隊形で前進を續けて行く。空には飛行機が敵の司令部、豫備隊及陣地を爆撃しながら地上部隊を誘導して行く。

聯合軍側の企圖秘匿の效は空しからず、獨軍は全く急襲せられ僅か二時間足らずの間に捕虜約一萬六千を出し、機關銃約二百挺を失つてしまつた。

斯くてアミアン附近の會戦は八日より三日間繼續せられ、苟も使用出来る戦車は最後の一車迄も使用し、遂に戦線は縱深約十二軒の突破を見るに至つた。

然し會戦第三日の八月十日には攻撃に使用出来た戦車は僅かに六十七輛となり、第四日の八月十一日には、ほんの僅かの戦車が濠洲軍と共に攻撃に参加し得たに過ぎず、それから間もなく、全戦車は整備の爲戦線より撤退するの餘儀なきに至つた。

八月八日より八月十一日の四日間の攻撃に参加した戦車總數は六百八十八輛であつて、其の内約四百八十輛が戰場に於て故障を生じ又は破損した。

此の會戦間英軍戦車隊の一装甲自動車は、農家内の獨軍軍團司令部を奇襲して重要書類を鹵獲し、ヒンデンブルグ陣地線編成の詳細を知ることが出来た。

### 二、歐洲大戰中の最大厄日

戦車戦闘の成果は偉大なものがあつた。

獨逸總參謀長ルーデンドルフ將軍は豫期せざる獨軍の大敗北に關し、次の辯明書を印刷配布



した。

「軍隊は戦車の大集團に依りて奇襲的攻撃を受け、人工霧及天然霧の掩護の下に戦車が戦線を突破して背後に不意に出現するに及んでは總ての團結を失へり。」

同將軍は又其の回想録に左の如く記述した。

「八月八日は、歐洲大戰中の最大厄日なり。」

聯合軍は、十月にはヒンデンブルグ陣地を攻略したので、其の後戦闘は純然たる運動戦となつて獨軍は敗退の一路を辿つた。

### 三、模造戦車の出現

戦車の数がいやが上にも少くなつたので、英軍某師團は遂に模造戦車を案出した。

是は工兵が造つたもので、木製の骨組の上に天幕を張り、之を紐で螺馬の背に載せ馱者も天幕の中に入つて前方の隙間から前を視ながら螺馬を牽いて前進するのである。

傍から見ると、凡そ噴飯物であつて、長靴を窄いた二本の脚と毛の生えた二本の馬の脚とのぞいて居り、是こそ本當に馬脚を現はして居つた。然し遠くから特に拂曉薄暮等の時に見ると、實に嚴然たる戦車その物であつた。

此の戦車には、時々手のかかる故障が起つた。

流石、手練の運轉手——馱者——を以てしても螺馬發動機を始動することが出来ないこともあつた。あちらこちらひどく跳ね廻つたり、奇聲を發したり、背中の戦車を振り落そうとして狂奔したり、全く手に負へないこともあつた。

こんな笑話もあつたけれども、模造戦車の戦果は素晴らしいものがあつた。

模造戦車の多數が第一線の後方に出現した或る日の戦闘に就て、獨軍某部隊は退却に際して左の報告を提出した。

「敵が戦車の大集團を使用せし爲、遂に退却の止むなきに至れり。」

### 四、戦車團は軍中に於ける最も利潤多き資本

ウイストン・チャーチル氏が、一九一八年の九月に、佛蘭西より英國首相ロイド・ジョージ氏に書き送つた手紙の一節には、左の如く書かれてある。

「現在に至る迄、戦車團の兵力は約一萬八千名に過ぎず、又其の戦闘に使用し得べき戦車数は六百乃至七百輛に過ぎず。

而も、當地に於ては良く戦運を挽回したるのみならず、之を缺除するときは戰略家の腦漿を



搾りて策定せる計畫をも全然無價値ならしむるが如き戰術的優越を吾人に與へたるものが戰車なることは一般の容認する所となれり。

戰車の救助したる人命と、鹵獲せる捕虜とが、戰車團の此の一萬八千名をして軍中に於ける最も利潤多き資本たらしめたりと云ふも決して過言にあらざるなり。

戰車の援助に依りて成功を收むるや、其の直後に於ては常に多數の戰車を要求するの聲、囂々として起るを聞くも、成功の印象の漸く薄らぐや、必要なる人員及器材と雖も尙之が容認を吝むに至ること悉く是然り。予は再言す、戰車團の兵力を十萬となすべきことを……」

五、八月八日以後の攻勢の成果

1 英軍總司令官ヘイグ元帥の、一九一八年八月より十一月に至る間の消息中には左の如く書かれてある。

「各戰線を通じ、英軍は捕虜十八萬七千名、火炮二千八百五十門、機關銃二萬九千挺以上を鹵獲せり。是英國軍の戰列師團五十九師團に依りて獲られたるものにして、此等の師團は三箇月の戰鬪期間に良く敵の九十九師團と對戦し之を撃破せり。八月八日の攻勢開始以來、戰車は各戰場に於て使用せられ、敵歩兵の抵抗を打破する爲、戰車の演じたる役割の

重要性は容易に評價するを得ず。

八月八日の攻勢計畫は總て是戰車に負ふ所にして、同日以來戰車の時宜に適する援助に依りて歩兵の成功が支援又は確保せられたるの例は枚擧に遑あらず。」

2 一九一八年八月八日アミアン附近の攻勢以來一九一八年十一月十一日休戦に至る迄約三箇月は連続せる一大會戦で之に参加した英軍の戰車及装甲自動車の數は合計一千九百九十三輛で、其の内八百八十七輛は破損したが十五輛以外は修理が利いた。

此の期間に於て、戰車團の一部の人員は十六回以上も戰鬪に参加した。

3 一九一八年十二月六日、英國の軍隊は初めてケルンに入城したのであるが、其の先頭に在つたのは戰車團の装甲自動車であつて、戰車團の旗は最初にラインの河上に翻り、英軍勝利の表徴となつたのである。

## 第八 前歐洲大戰間に於ける佛、米、獨軍 戰車の活躍

一、佛軍——輕戰車の急速なる整備



佛國では獨特の戰車を創製した。

英軍戰線の後方で重砲の牽引を行つて居た裝軌牽引車を見た佛軍エスチエンヌ大佐は、一九一五年十二月、佛國總司令官に意見を具申し、一九一六年二月裝甲自動車百輛の注文が發せられたが、同年六月エスチエンヌ大佐は英國に戰車のあることを初めて聞き、英國に行つて戰車を見學し、交渉の結果佛軍は主として輕戰車を製造することとなり、同年十月佛國シュナイダー會社は初めて其の十六輛を製造して、佛國陸軍へ納附した。佛軍の戰車は一九一七年所々に使用されて、各々成功を収めたが、受けたる損害も亦大きかつた。然し佛國陸軍省は同年六月に至つて、三千五百輛の注文を發するに至つた。之を英國陸軍省で承認した一千輛に比すれば其の懸隔の大なるに一驚を喫しなければならぬ。

一九一八年の一月には戰車七十五輛より成る輕戰車大隊の整備が確定し、逐次其の數を増したが、同年三月及五月の獨軍第一次及第三次攻勢阻止の爲には大いに役立つた。第三次攻勢の際には英軍のカムブレール會戰の例に倣つて、砲兵の攻撃準備射撃を省略して二百二十五輛の戰車を使用し、獨軍を名狀し難い混亂に陥れて撃退した。

休時當時に於ては戰場は輕戰車二十七大隊、戰車約二千輛を有して居たが、製造中の戰車數

は約三千五百輛に達した。

二、米軍——厖大なる計畫

一九一七年四月參戰した米軍は、一九一七年九月に重戰車五大隊、輕戰車二十大隊より成る戰車團の編成を確定し、更に一九一八年五月に至つて、其の編成を重戰車一大隊、輕戰車二十大隊より成る戰車聯隊十五個に擴張した。

米軍の計畫は恐しく厖大であつたが、休戰當時西方戰場に保有して居つた戰車はルノー戰車約九百輛で、米國で製造して佛國に揚陸したのは、休戰時迄にルノー輕戰車約二十輛に過ぎなかつた。然し米國の工場は全能力を以て製造に着手して居つた。

三、獨軍——極端なる消極的態度

獨軍は一九一七年に至り初めて若干の戰車を戰場に活躍せしめたが、戰車の價值に關する認識を缺き、極めて消極的態度を以て前歐洲大戰を終つた。然し大戰後に於ては濶然として眼を開き、世界第一の戰車王國となり、精銳無比の機甲兵團の編成に徹底した。



## 第九 前歐洲大戰間に於ける各國軍自動車の活躍

一、佛軍——到る所で獨軍の攻勢を阻止

前歐洲大戰間、自動車を最も多量且有効に活躍せしめたものは佛軍である。

佛軍は一九〇五年頃から自動車を軍用に供することに著手し、開戦當初軍用自動車約百七十輛を有したのみであつて、其の作戦計畫には乗合自動車二百二十輛を、支援歩兵輸送用として騎兵軍團に配屬する如く規定されて居つたに過ぎなかつた。

然し一九一四年八月動員完結の時には後方輸送の爲に徵發せる自動貨車、乗用自動車等を含み約六千輛を有し、同年九月のマルヌ會戦中には約一萬輛の徵發自動貨車を以て増援兵團を巴里附近よりマルヌ河畔に輸送し、獨逸第一軍の右翼に向ひ攻撃し戦勝の基を拓いた。

同年九月下旬迄に自動車輸送をした兵員は、約十萬人の多きを數へた。

茲に於て自動車を統一して使用することに著手したのである。

又此の年佛國西北部の戰場に於ては、装甲自動車を使用し、翌一九一五年五月にはロウレン

又軍に於て、初めて七五耗砲の自動車化中隊を編成した。

一九一六年ヴェルダン要塞の攻撃を受けたる時には、佛軍は二月、三月に九千輛以上の自動車輛を使用し、六月に於ては、其の數を一萬二千輛に増加した。そして有名な神聖道路上には一晝夜に六千輛の自動車輛、即ち平均約十四秒に一輛、忙しい時には約四秒に一輛宛が運行し要塞の防禦を全からしめた。

一九一八年の獨軍の第三次攻勢の時には、佛軍自動車隊は五月二十七日より六月二日に至る七日間に、三十三箇師團の歩兵と三箇師團砲兵とを輸送し、マルヌ河畔の獨軍の突破を阻止した。因に同期間に於て、佛國の鐵道は其の發達せる鐵道網を以てしても、十九箇師團（内二箇師團は既に輸送實施中）を輸送したのみで輸送の弾力性を有する點で、自動車隊は克く其の効果を發揮した。

前歐洲大戰の末期に於ては、佛軍の自動車隊の軍用自動車輛の數は、約六萬八千輛の多きを數へ、別に自動車化砲兵は三十七箇聯隊の多きに達し、開戦當初の約十一倍の増加となつた。

二、英、米、露、獨軍——軍用自動車の大擴張

英軍は一九一七年に、師團通信隊及輜重隊を自動車化し、休戦當時に於ては軍用自動車約四



萬五千輛を保有した。

米軍は休戦當時西方戰場に、約四萬輛の軍用自動車をも有して居つた。

露軍は一九一五年に、獨軍の追撃に鑑みて装甲自動車七十餘輛を整備したが、獨軍は之より先、前年の一九一四年に東プロシアに於て、装甲自動車隊を以て露軍を急追して偉功を收め、逐次師團輜重隊を自動車化した。休戦當時に於ては軍用自動車約四萬輛を有するに至つた。

前大戦休戦當時に於ては、西方戰場の軍用自動車は聯合軍約十五萬輛、同盟軍約四萬輛を數へた。

## 第十 獨軍敗戦の主因

一、一九一八年十月獨逸の最高統帥は、戦敗の避くべからざるを自覺して獨逸の國會各政黨の領袖に左の要旨の聲明書を送つた。

「最高統帥は、最早人力を以てしては敵國をして和を請はしむるの見込なしとの重大なる判決に到達するの止むなきに至れり。吾人をして此の判決に到達せしめたる決定的素因は我が軍の

戦車及豫備の缺乏の二に存す。

敵は吾人の豫期し得ざりし大多數の戦車を使用せり。戦車が煙幕中より突如其の姿を現すや我が軍は全く失神せり。

主として敵の戦車の成功に依り我が軍の失ひたる捕虜は巨大なる數に達せり。」

二、第一次歐洲大戦終了後滿三箇年、初めて反省と研究との餘裕を得た一九二一年に至り、獨軍フォン・ゾーヴェル將軍は次の如く大戦の敗因を指摘した。

「吾人はフォツシユ元帥の天才に破れたるにあらずして戦車將軍に破れたり。」

## 第十一 前大戦後の戦車の運命

「喉元過ぐれば熱さを忘る」前歐洲大戦後、英國の戦車團は四大隊に縮小されてしまつた。此等の大隊の戦車も一九二〇年頃には追々と破損してしまひ、且年月の経過と共に第一次歐洲大戦に於ける戦車の偉大なる功績も漸く忘れられて來た爲に、又もや戦車團の解散問題が擡頭して來たのである。



即ち英軍の戦車が戦場に現はれて間もなく、佛軍のサンシャモン、シュナイダーの二種の戦車が出来たが「餘りに重過ぎ、脆弱で、然も戦場に多くある障碍物を飛び越えることが出来ない。」といふやうな議論が生じ茲に於て、當局者はその速度に於て陸軍省や、報道機關の注意を惹くやうな軽量高速の戦車を造つて戦車團の延命を策することにした。

その結果、佛國ではルノー輕戦車、英國ではマークV型のやうなものゝ外に、軌道が車體全周をめぐらず、ただ車框(車臺)の周圍だけをめぐるホイペツト戦車を作つた。

戦争の終つた時佛軍では

イ 敵陣地の奥深く突貫し得る非常に重い戦車

ロ 戦闘間の局所々々に起る問題を、最も迅速に解決するため、歩兵の直前に在つてこれを支援する輕戦車

を造らうではないかといふ意見が強くなつた。

やがて英國では軽量高速のヴィカース輕戦車が生れた。重さが十二噸で長さは五米五〇、最高時速三十二浬で行動範圍二百浬(最初のマーク一型は僅かに二十浬)といふ格段の進歩を見るに至つた。

一九二五年になると一人乗戦車の考案が變化した。操縦手一名に銃手一名を乗せる二人乗戦車が考へられ、二七年カーデンロイドの二人乗戦車として姿を現はした。

この豆戦車は時速三十二浬といはれ當時敵の準備した陣地前にじぐざぐ運動をやつて敵の砲兵や機關銃がこれを射撃しやうとしても、あまりにじぐざぐで然も速度が早い上に戦車の姿勢が低いので射撃出来ない。これで敵陣地直前まで或は敵の陣地の間をぬふて中まで入り込み、敵情を偵察してくるといふ重大なる役割を負はされて一時非常にチャホヤされた。

後に多少その型を改めて輕戦車と稱する様になつて、時速は更に四十八浬に増加した。勿論この間に装甲は強化され、裝備も優秀となり。外部の連絡にも無線通信を使ふといふ風に、改善が加へられ、こゝに往年の「鈍重なタンク」は一變して「陸の王者」「地上の華形戦車」となつたのである。

近代戦車と誕生當時の戦車とを比較すると、先づ第一に最初のはたゞ陣地を突破するだけの目的で造られたものだが、近代のは迅速な運動戦でも容易に使用し得るもの、否、寧ろその迅速な運動戦の主體として活躍する様になつた。

さて戦車の性能に三つの要件がある。



中戦車					軽戦車				
ソ	英	米	伊	獨	ソ	英	米	伊	獨
聯	國	國	利	逸	聯	國	國	利	逸
ベーター	ピツカース アームストロング	クリスチー	制式	三號	ター	カーテン・ロイド エムブイ	エム 二	ファイアット・ アンサルド	二號
裝軌	裝軌	裝軌	裝軌	裝軌	裝軌	裝軌	裝軌	裝軌	裝軌
五〇	八〇	三〇	六〇	七六	三〇	四〇	五五	六五	八〇
五五					三五	四五	八〇	四〇	五五

様にまで進歩した。  
こゝに世界列強の現用戦車の最大速度に就て参考迄に列挙しよう。

即ち武装、速度、装甲である。  
然し「速く走りたい。」「武装はなるべく威力のある大砲や機關銃をそなへつけたい。」「装甲はなるべく敵の弾丸が貫通しない様に厚く丈夫なものにしたい。」といふ欲望であつて、お互に相容れないところがある。  
早く走ろうとすれば重さをなるべく軽くする必要があり、之が爲には装甲を薄く武装も少く乗員も少くする必要がある。又これらを強大なる威力をもたせる爲には運動力、即ち速さが遅くなつてくる。  
従つて科學の進歩に伴つて或程度三者の希望を入れられる様な戦車が出來てくるのであるがそれでも三者の希望通りになるといふことは考へられない。

(1) 速度

英國がソナム河畔に最初に戦車を登場させた頃は最低一時間一・二杆から最高六・五杆までの間であつて敵陣地前に於て原野を運動する時は平均一時間三杆前後であり、第一次歐洲大戦中次第に改善を加へられたが一時間十杆を越すものはなかつた。  
然し現代に於ては遅いものでも二十乃至二十五杆早いものは六十杆から八十杆程度を出せる







一五五耗砲といふやうな大きな火炮さへ装備してゐる。

更に優秀なるものは高射機關銃とか高射砲とかいふ様な射空射撃の武装まで備へてゐる。

(3) 装 甲

敵の砲彈の破片や機關銃彈、小銃彈を全身に受けて豆をいる様な音に男子としても痛快味をこの上なく味ひつゝ、友軍部隊の監視の中を敵陣中を縦横無盡にひつかきまわす戦車兵も、この装甲あつてこそ思ひきつた動作がなされる。

戦車に一命を安心してまかして終始戦闘が續けられる。戦車部隊がこの度の大東亞戦争に於て友軍から遠くはなれて獨り敵陣地内を思ふ存分、二日も三日もあらし廻り以て突撃作戦の因をなしたのも、雨霰の様に飛んで來る敵彈位に何等拘束されないといふところに無敵猛獅子部隊の特徴がある。

然しこの装甲は一概にかたい厚いといふことのみでは物の様にたたない。

あまりかたすぎるといふことは敵彈があたつた時破れ易いし、厚いといふことは重さが重くなつて先きに述べた速度等に非常に影響してくる。

だん／＼金をきたへる冶金術が進歩した今日では薄くて抵抗力の強い装甲が作られる様にな

つて來たが、一方また對戦車砲の發達も實に目覺しいものがあるので、装甲がより以上強大となり研究されなければならないことはいふまでもないことである。

なほ装甲の研究とともに、敵彈をはねかへすに都合のよい戦車全體の型といふものが考へられる。

即ちなるべく装甲を少くし鋳でも皆まるくなつてすべりやすい様になつており又なるべくこんなものを少くして装甲鋳と装甲鋳を熔接したり、全體の姿勢を低くしてたまのあたらない様にしたりしてその工夫はますます冶金術の研究とともに續けられるであらう。

附 屬 設 備

以上三つの要素について述べたが戦車には更にいろ／＼な附屬設備がある。

1 無線通信 戦車はつんぼであるといふはれてゐた。これが戦車の缺點の大きな一つであつて戦車部隊内の指揮は一旦戦車にのつてしまへば、後は旗の色わけとふり方によつて部下の戦車に指揮官の考へてゐることを傳へ、同じ戦車の中の操縦手や銃手等には大きな聲をはり



上げてどなつてもあのやがましいエンジンのひゞきの中ではなか／＼きゝとれない。ちようどつんぼの部隊の様であつた。

然るに無線電信装置が發達して、戦車にもとりつけられる様になつた今日は自由自在に同じ戦車内の部下には勿論外の戦車や指揮官に對して「もし／＼」といへば向ふの戦車で直ぐに、「はい、はい」と答へるやうになり、それも運動中でも話が出るのであるから、これによつて全戦車群を指揮し、また各戦車からも、機を失せず上級指揮官に達するやうになつたのである。

論より證據第二次歐洲大戰に於てヒットラーの命令の一言一句はたちまち電波にのつて軍の最先端を突貫しつゝある獨逸軍戦車部隊の無線機に入つて、その意圖が直接話しをする様に遺憾なく傳つた。大東亞戦争の日本軍の電撃作戰にしる、この無線による指揮が可能になつた事が獨逸をしてあの大捷をはくさしめ、日本軍をして歴史上未聞の戦果を擧げしむるに至つたものである。

將來戦車の耳はますます／＼さへんとする傾向にある。

2 視察装置 戦車は常にすきまなしに敵弾に見舞はれる。敵弾は装甲板にあたつてこつぱ

みぢんにくだける。

これらのものの中に入れては、従つて孔をあけることが出来ないのて盲目と云はれて来た。

然し防弾ガラスの發達や潜望鏡等の利用によつて、非常に目が見える様になつて来た。

## 第五章 戦車の種類とその用途

いろ／＼と戦車の生ひたちがわかつて来た様であるから、これから戦車の種類とどういふ任務に使はれるかといふことについて述べて見よう。

### 第一 重さによる分類

- 1 超軽戦車(一名豆戦車とも云ふ) 五噸以下
- 2 軽戦車 六噸乃至九噸



- 3 中戦車 十噸乃至二十九噸
  - 4 重戦車 三十噸乃至五十噸
  - 5 超重戦車 五十噸以上
- に概要分けられるであろう。

## 第二 目的による分類

### 1 偵察戦車

極身軽な戦車で多く豆戦車や軽戦車等が使はれる。

### 2 驅逐戦車(又は破壊戦車とも云ふ)

軽戦車や中戦車級程度のもが使はれる。敵の人馬の殺傷、機關銃、砲兵及戦車等をその重要なる攻撃目標とし、武装も装甲も偵察戦車よりはるかに威力があつて、獨力戦闘も歩戦砲協同してやる戦闘戦闘も出来るものである。

世界列強の主力戦車をなしてゐる。

### 3 突破戦車

敵の堅固なる陣地帯の突破の爲に使はれるのであつて、敵の砲撃に對しても戦車に對しても偉大なる抵抗力を有し速力は若干遅くなつてもノン／＼と敵堅壘の一角又一角をその大偉力砲と重さによつて突破して行くので、重戦車及超重戦車がこの役割を演じつゝある。

## 第三 列強戦車のあらまし

さて以上の區分を頭に入れて列強戦車の一端をのぞいて見よう。

### 1 超軽戦車

前にも述べた様に極めて小型で低姿勢であり、偵察とか部隊と部隊との間の連絡とか歩兵や騎兵を助けたりする任務をもつてゐるが最近ほとんど第一線に使用されない傾向にある。

T-27 豆戦車 は蘇聯の豆戦車であつて

重 さ 約二噸